
僕の宝物

バックハイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の宝物

【Nコード】

N8687C

【作者名】

バックハイ

【あらすじ】

美人で男慣れしている美咲。彼女に振られて女性恐怖症気味な平凡な僕。そんな二人の出会いと居心地のいい関係。*****恋の隠し場所」公開しました。そちらも応援頂けると嬉しいです。

1 プロローグ（前書き）

初めての小説でまだまだ下手くそですが、どうぞよろしくお願いします（汗）

1 プロローグ

「マコちゃんちょっとこっち来て抱きしめて」

恥ずかしげもなく僕にそんな台詞を投げ掛ける彼女。

：おそらく見ているテレビがCMにでもなったのだろう：

ベットで横になっていた僕は、隣の部屋のその声を布団を被って聞こえないふりをした。

「ねえマコ」

返事の戻らない寝室へ彼女が向かってくる気配がした。僕は布団の中で足を抱え体育座りの様な格好で身を固くする。

ドンっ！！

急にのしかかる重みに耐え切れなく、僕は小さく

「グエツ」

と呻いた。

被った布団が頭の部分からめくられ、僕の上に乗り掛かって来た彼女が上から僕の顔を覗き込む形で

「CM終わるでしょ早く抱きしめてよ！！」
と頬を膨らませる。

僕はやれやれ：と、布団から腕を出して、彼女の髪をそっと撫でる

出会った頃と変わらない、子供の様な笑顔を見ながら僕は幸福感に包まれる

「マコ…大好き…」

彼女も僕と同じ幸福感に包まれながら僕の唇に自分の唇を重ねた

隣の部屋から彼女が見ていたテレビの音が漏れてくる

もうCMなんて終わっている様子で笑い声が聞こえてくる

彼女はそれを気にも止めず、僕の上にのしかかったまま頭を僕の肩へと乗せると瞳を閉じた

僕はまた彼女の髪を撫でながら彼女の瞼に唇を寄せた。

微かに彼女の長い睫毛が揺れたが、彼女はそのまま瞳を閉じている

…僕の大切な宝物…

このままずっと僕の腕の中で同じ幸福感を感じ取っていて欲しい

…ずっと同じ時を刻みながら、二人で歳を重ねて行こう…

…僕は心の中でそう呟いて彼女を強く抱きしめた

2 女王様

彼女との出会いは四年前。僕、長谷部誠はせべまことがまだ19歳の頃の事だった―。

「マコ、まじ頼むよ。俺今回の合コンは気合い入ってんだよ。」

電話越しの相手は小学校からの友人、林田智博。

「嫌だよ。マジで合コンは面倒臭いよ。言ったら？彼女とか作る気ないって。」

僕はベットに横になりながら、ぺらぺらと雑誌をめくりながら答えた。正直その頃の僕は、一年間付き合っていた彼女が

「元カレが忘れられない」と僕の下を去って以来、女は懲り懲りだった。

：恐らく僕達が付き合い合っていた頃から関係は続いていたのだろう：

もう、女に振り回されるのも恋をするのも面倒だ。

そう思っていた。

「んな事言わないでさ。マコもそろそろ彼女作れば？それに今回はあの聖南の藤井美咲も来るらしいよ？噂くらい聞いた事あるっしょ？」

藤井美咲―。

智博の言葉に僕は雑誌をめくりながら高校時代に噂で聞いた彼女を思い出していた―。

隣の聖桜南高校の藤井美咲。なんでも凄い美人な上にスタイルはモデル並。と、当時うちの高校の男共が噂していた

ただ、放課後に迎えに来る年上の彼氏とその容姿のせいで僕らと同世代の男共でアプローチしたのは数える程しか居ないらしい。

そしてその勇気ある男共も皆、彼女に散々たる振られ方をしたらしい。

「タツもさ、藤井美咲ゲットって超気合い入れてんだよ！ なっ？ 頼むよ！」

「…相手にされないのがオチだぞ？ …分かったよ。行くよ。」

智博の押しの強さに少々返事をした僕。

でも、それとは別に藤井美咲にも好奇心が沸いていた。

別に、智博みたく彼女へアプローチをしようなどと考えちゃいない。どうせ相手にされるはずもない。

ただ、それだけ噂される傲慢な女王様を見てみたくなったのだ。

…なんとなく…

僕の下を去った彼女と藤井美咲を重ねて、勝手に嫌悪感を抱いていた…。

「まじ？ありがとう！じゃあ、土曜日七時に迎えに行くから。」

明るすぎる智博の返事に

「わかった」と言い、小さな溜め息を吐いた。

そして、そのまま携帯をベットの土へ放り投げる。

…女なんて懲り懲りだ…

自分勝手に我が儘で…

結局別の男の所に行くくせに…

僕はベットのパイプ部分に未だに貼られたままのプリクラを見詰めた。

そこに写っているのは、少しだけ若い僕と、僕に頬を寄せて笑っている前の彼女。

それを見て、何だか無償にモヤモヤが胸に広がり始めた。

僕はそのプリクラを剥がすと、小さく丸めてごみ箱へと投げ捨てた。

3 友達

そして合コン当日：僕は洗面所で髪の毛をセットしながら会った事もない藤井美咲の事を考えていた。

僕の中での藤井のイメージは最悪なものだった。

：と言うより、僕の元カノをもっと最悪にして美人にしたイメージを勝手に抱いていた。

「どうせ指で髪の毛くるくる弄りながら上目使いで甘ったるい声ですのか：女王様気分でツンケンしてんのか：」

：と、鏡に向かって一人でブツブツ呟いていると聞き慣れたメロデイが流れ始める。

僕はポケットの携帯を取り出し通話ボタンを押しながら自分の部屋へ足を向けた。

「マコ、そろそろ着くから外出てきて」

電話越しの智博の声に返事をして電話を切ると上着を着込み、また小さな溜め息をついた。

「女の子達は七時半頃に来るからさ、それまで中で話してようぜ」

店の近くの駐車場に車を止め、智博がそういいながら車を降りる。

「竜揮^{たつき}は？」

僕はそう言いながらも一人のメンバー山崎竜揮を探す。

「多分店の前に居ると思うよ」

車を降りながら智博の返事に耳を傾けピピッと鍵を閉める音を確認して、僕は店の方へと足を向けた。

「マコゝ。ともゝ。」

少し歩くと僕らの名前を呼びながら手を振る竜揮を見つけた。

栗色の長めの前髪に奥二重の切れ長の目。

整った顔立ちに白い歯が光る。僕とは違い身長も185センチあり、スタイルもいい。

…はつきり言って、竜揮は男の僕から見ても格好がいい。

そして高校時代、藤井美咲にアタックした経験を持つ数少ない勇気がある男の一人だ。

「女の子はまだ来ないんでしょ？中で待ってようよ」

智博がそう言いながら店の方へと足を向ける。―智博は僕と同じく身長は175センチ位。違うのは、二重瞼に大きな口。

髪は金に近い茶髪で某アイドル事務所のアイドルのような感じ。

…ようするに二人とも格好がいい…

…比べて僕は短めの黒髪に一重瞼で取り留め特徴のない顔立ち…

…本当に神様は不公平だと思う…。

こうして三人で並ぶと、竜揮はまるで俳優だし…

智博は例のアイドル事務所のアイドル。

…比べて僕は…

相方にばかり注目される芸のないお笑いタレントみたいだ…。

…別に合コンなんて興味はないが…

やっぱり神様は不公平だ。

4 出会い

「へー結構いい店じゃん。」

智博がそう呟きながら店内に入る。

お洒落な雰囲気テーブルが並び落ち着いたJ a z zが流れている。

「ご予約の山崎様ですか？こちらの御席になります」

そう言いながら若い男の店員さんが店の奥へと案内してくれる。

店の雰囲気合った白いワイシャツに、黒いネクタイを締め足元までの黒いエプロンという出で立ちがますます雰囲気を盛り上げる。

奥はカラオケも付いてある個室のBOXになっており、僕等はそこへ案内された。割と広い部屋で、四人掛け位のソファが向かい合いに並んであり、真ん中にガラステーブルが置いてある。

「皆様お揃いになりましたらお伺いします」

と店員さんが部屋をでると僕等はソファへ腰掛け一息付いた。

「俺、今回は藤井美咲にリベンジ狙ってるんでよろしく。…まあ、無理そうならすぐ切り換えるけど…」

竜揮が笑いながら言うと言智博も負けじと

「俺だって女の扱い慣れてきたし藤井美咲にチャレンジするつもりだよ？」

と笑うのを見て僕は苦笑いをしてメニュー表を手取る。

「マコは？ チャレンジすんの？」

と智博が聞いてきたので首を横に振ると同時に、竜揮がポケットから携帯を取り出した。

「あ、由恵ちゃんからだ。着いたのかな？」

と言って電話の着信ボタンを押して外へ出ていく。それを見届けて

「来たみたいだな。緊張するー」

と智博が足を組み替えた。僕は一旦背伸びをして智博の座っている方のソファアへ座りなおす。…と同時にドアが開いた。

「皆来たぞ」

と言いながら入って来る竜揮の後に女の子が見える。

「お邪魔しまーす」

と最初に入って来たのは割と背は低めで長い髪を綺麗に巻いた、目の大きな女の子。ピンクのニットのワンピースがとてもかわいらしい。続いて入って来たのは智博と同じく金に近い茶髪の手入れされた長めのショートカットに小麦色の肌。キリッとした眉毛でボーイッシュな感じとは対象的なミニスカートがセクシーだ。

そして最後が…僕は一目で彼女が藤井美咲だと気が付いた。栗色のまっすぐな長い髪で長めの前髪を斜めに流すヘアスタイル。黒目がちの大きな目と長い睫毛。本当に整った顔立ちと、黒のオフショル

ダーのカットソー、そしてブーツに入れたストレートのジーンズと女の子にしては高めの身長が彼女のスタイルの良さを際立たせている。

…迂闊にも僕が藤井に見とれていると、智博が僕の耳元で囁いた。

「ジーンズだよ…今回は厳しい戦いになりそうだ…」

「何で？」

僕が囁き返すと

「合コンの時の格好で気合いの入りが分かるだろ？」

と智博が顔をしかめた。

僕は成る程…と納得して藤井美咲を改めて見た。

…確かにガードの固そうな印象だった。

不意に藤井美咲が僕の視線に気付いて、こっちを見た。

…やべっ…！

僕は慌てて視線を外そうとしたが…

…藤井美咲は僕と目が合うと…にっこりと微笑んだ。

その笑顔はとても大人っぽくて、とても同い年だとは思えなかった。

僕は藤井美咲の意外な対応に一瞬戸惑ったが、慌ててお辞儀をする。

…それが何だか、妙に子供っぽい対応だった気がする…

…まだ合コンは始まってもいないのに…僕は激しく後悔していた。

5合コン

「ねえ、美咲ちゃんはいつかから彼氏居ないの？」

合コンがスタートしてから10分程経った頃、最初に仕掛けたのは智博だった。

「うん？一年位かな…」

カシスオレンジを一口飲み美咲が答える。

まだスタートしたばかりと言う事もあり、席は男女向かい合う形で別れている。一番奥に座っている僕の隣に智博、次が竜揮。女性陣は僕の前にはショートカットの千葉元子真ん中に美咲、竜揮の前にピンクのニットの平田由恵ひらたゆえの順だ。

「何で一年も彼氏作らないの？美咲ちゃんモテるでしょ？」

美咲の答えに智博が聞き返す。僕もビールを一口飲み美咲に目をやる。

「何でって言われても…男見る目ないからかな？」

苦笑いしながら答える美咲。すかさず竜揮が口を挟む

「美咲ちゃんはどんなタイプが好きなの？」

美咲はその問いに苦笑いしながら

「質問攻めじゃ疲れちゃうよ…ちょっとトイレ行ってくるね」

と席を立った。そのやり取りが妙に可笑しくて僕はクスッと笑いながら竜揮と智博の方を見た。

僕の美咲の印象は想像してたのとは全然違っていた。変に甘える訳でもなく、美人なのを鼻に掛ける訳でもなく、自然体の美咲は僕等なんかよりずっと大人に見えた。

美咲が席をたつと智博が

「いつまでも向かい合ってるのも何だし…由恵ちゃん席代わんない？」

と言って、美咲の席に座りだした。

由恵もそれに頷き僕と竜揮の間に座った。

席を代わろうと言って美咲の席に座った智博は、さりげなく美咲のカシスオレンジを由恵の座っていた席にずらした。美咲がトイレから戻ると

「美咲ちゃんごめんね。席替えしたから」

と、由恵の居た席に座らせた。

…智博…慣れてるな…

「誠君はどんな感じの子が好きなの？」

あれからずいぶん時間も経ち、隣に座っていた由恵が僕に尋ねる。

「うーん…今はよく分からないや。恋愛はしばらくお休みしたいし…」

苦笑いしながら僕が答えると、いつの間にかに僕の前の席にいた美咲が口を挟む

「珍しいね。私達位の男の子ってみんながつがつしてんじゃん。」

「それは美咲だからだよ」

美咲の言葉に由恵が笑いながら答える。

「そんな事ないよ。軽い気持ちで『好き』とか言う人多いよ」

少しむっとしながら美咲が答える。

僕は何も言えずにただ苦笑いをしていた。

「美咲ちゃんは彼氏欲しいとかは思わないんだ？」

話題を切り替えようと美咲に尋ねる。

「…彼氏が欲しいからって彼氏になってくれる人探すのって変でしょ？ 順番が逆だよ。」

そう言いながら美咲がくすくす笑いだした。

…確かに…でも、そんな当たり前の事をはっきりと言える彼女がなんだかとても格好良かった…

「何話してんの」

カラオケを歌っていた智博が美咲の隣に座りながら話しに混ざって来た。

その隣で元子と竜揮が話し込んでいる。

竜揮は美咲を諦めて元子に切り替えたのだろうか？

「ちょっとした恋愛談議だよ。それより智博くん、一緒にカラオケでもない？」

そう言いながら由恵が智博を誘い、曲を探し始めた。それに智博も頷き由恵の隣へと移動しようとしている。それに合わせて

「私もそっち行こうかな…」

と美咲も移動し始めた。

…？美咲が行動するのは今回は初めてだ…。

以外に智博…気に入られてるのかな…？

智博もそれに気付き自分の隣を空けようとしている。

「智博くんはカラオケするんでしょ？そっち入れてよ」

…と、笑いながら美咲が来たのは由恵と僕の間…。

…？僕の隣…？

少し驚きながら美咲を見る僕をよそに美咲が隣に座った。

6 約束

「誠君、ちゃんと飲んでる？」

そう言いながら僕の顔を覗き込む美咲。

：僕は彼女がこの席に移動してきた意味がまだ解らないでいた。

「飲んでるよ。美咲ちゃんこそ竜揮も智博も話したがってるのにこっちに来ちゃっていいの？」

彼女の真意が知りたくて、ちらりと彼女を見ながら尋ねてみた。

「竜揮君は元子と話してるし智博君は由恵とカラオケでしょ？」

彼女が笑いながら答える

「それに、竜揮君も智博君も私と話したいってゆうより：女の子と話がしたいだけなんじゃないかな？」

彼女が苦笑いしながら続けて言った台詞が、妙に的を得ていて僕はちよつと笑ってしまった。

（：どうやら二人共がつがつしすぎているようだ：）

「成る程：僕は安全パイか：」

ちよつと悪戯気に彼女に言ってみる

「ばれた？ごめんね？」

と苦笑いしながら答える彼女。

素直に答えてしまう彼女が妙に可笑しくて僕もクスクスと笑ってしまっただ。

「いいよ。正直僕も今はあまり興味が無いから。美咲ちゃん程美人でも、逆に警戒しちゃうから」

「警戒？男の人でも？」

僕の言葉に美咲はきょとんと幼い表情をした。
今まで、美咲の大人っぽい表情しか見てなかったからか、それが妙に可愛いらしかった

「本当は僕、美咲ちゃんと会うまで美咲ちゃんの事誤解してたから。
髪を指でクルクルしながら「ヴィトンのバッグ買って〜」とか言うんじゃないかとか…」

僕が言い終わらないうちに美咲はアハハと声を出して笑っていた

「何それ？私、プレゼントは好きな人にしか貰わないよ？」

と言いつつもまだ笑いの止まらない様子の美咲。

僕は少しバツが悪くなり手元の煙草をくわえて火を着けた

そんな僕を見ながら美咲は竜揮の方にあった灰皿を取り僕の方に置いてくれた

「…あ、ありがとう」

そんな美咲の行動に素直にお礼を言う

美咲が笑いながら「どういたしまして」と答える

…なんだろう…僕はそんな美咲の一つ一つの行動が何だか居心地が良かった。

「僕さ、ちょっと気付いたんだけど…美咲ちゃんの事好きかも」

…思わず口に出た言葉…

彼女が大きな目を見開いて僕を見ている

「いや…誤解しないでね？女としてってゆう意味じゃないんだ。付き合いたいとか言ってる訳じゃなくて…何となく美咲ちゃんの性格が一人の人間として好きかも」

…それは慌てて言い訳を考えた訳でも、作戦なんかでもなく

…僕の本音だった。

別に彼女にときめいている訳でも抱きたい訳でもない。

ただ…竜揮や智博に対する好きと言う気持ち。本当にそんな軽い好感が彼女に湧いて素直に口にしていた。

しかし美咲が不思議そうに僕を見るのを見て、急に罪悪感が湧いてきた。

…ふと、さっき彼女が言っていた台詞が頭を過ぎったのだ…

（みんな軽い気持ちで好きとか言い過ぎ）

…今の僕はまさにそれだった…

「ごめん。美咲ちゃんは好きって言われ慣れてるから逆に警戒しち

やうよね？ 本当に変な意味じゃないからあんまり意識しないでね…？」

慌てて謝る僕を見て、彼女がクスクス笑い出した

「解ってるよ。ありがとう」

そう笑顔で答えてくれた彼女に僕はホッと胸を撫で下ろした。そして…少し考えながら彼女が口を開いた。

「良かったら今度遊びに行かない？…変な意味じゃなくて友達としてだけど…」

彼女の言葉に耳を疑った

「ふえ？…友達として？…何で僕と？」

びっくりしすぎて変な返事をする僕。

何で彼女に誘われてるのが全く解らない

「私、一緒に遊びに行ける男友達居ないんだよね…まあ…誠君は完全パイって事なんだけど」…成る程…

ここまで美人だと逆に男友達は作れない訳か…

少し考えて僕は答えた

「ヴィトンのバッグ買ってって言わないならいいよ」

僕の言葉に笑いながら彼女が答える

「大丈夫。グッチしかおねだりしないから」

僕も釣られて笑い出す

「大丈夫。絶対買わないから」

そんなやり取りをしながら、僕らは次の約束を交わしたんだ。

7 初デート？

…あの合コンから一週間後の日曜日…

僕は駅のトイレの中に居た。

美咲との待ち合わせは10時…今の僕の腕時計は9時20分を指していた。

トイレの鏡の前、ちょっと早く来過ぎてしまった僕は自分の髪を弄りながら身嗜みを整えていた。

…一つ断っておくが、僕は今日のデートにそこまで気合いを入れているわけではない…

そもそも、これがデートに入るのかどうかも疑問だが…やはり男と女が二人きりで遊びに行く訳だし…

買い物に付き合わされるだけでもデートの内に入ると思っている僕にとっては、やはりデート。

で、僕がこんなに早く待ち合わせに来たのは、たまたま昨日の夜、特に用事もなかった僕は9時前には布団に入っていた

それで目が覚めたのが8時…特にすることもなかった為、予定よりも早めに待ち合わせ場所に来てしまったのだ。

とは言っても、今日のデート相手は美咲な訳で…

一緒に歩いていたら嫌でも目を引く。

なのでこうして駅のトイレで最終チェックをしていたのだ…

…しかし、美咲を女性として意識していないとは言っても正直、今日のデートは僕にとってはかなりのプレッシャーだ…

やはり相手はあの美咲。

きつと色々なデートをしてきている訳だし…

やはり男として恥をかきたくはない。

「…さてと」

待ち合わせまでまだ30分もある。僕は上着のポケットから煙草を取り出し喫煙所へと足を向けた。

駅の外へ出る。

外は快晴。

とは言っても季節は三月。

まだまだ肌寒い。

ふと、すれ違う男性達が皆、どこかを見ている事に気が付く。僕もその視線を追うと、そこに居たのは美咲だった。

ロングパーカーにジーンズ、足元はシープスキン。

髪型は高めの位置でおだんごを一つ作っている。

ラフな格好だけどとても可愛くて、行き交う男性陣の目を引くのがよく分かる

「美咲ちゃん！もう来てたの？早いね？」

僕は慌てて声をかける

正直、僕は待たされるのは覚悟していたし、前の彼女は平気で一時間も遅刻するタイプだったので時間よりも早く来ていた美咲に驚いていた。

「だって待たせたら悪いし…早めに来てみた」

笑いながら美咲が答える

僕はただ、その気遣いがとても嬉しかった…

美咲と待ち合わせをしてから、僕たちはとりあえずお茶でも飲もうと近くのファミレスに来た。

美咲と向かい合って座りコーヒーを頼む。

「これからどこか行きたい所とかある？」

コーヒーを一口飲み、美咲に聞いてみる

「んーおまかせするよ。せっかくのデートだし」

僕の言葉にケーキをフォークで小さくしながら美咲が答える

美咲の口からでたデートの響きに僕は少し戸惑った。

…そもそもこのデート…美咲には一体何のメリットがあるんだろう…
特別行きたい所があるわけでもなさそうだし

やはり男友達が出来たとはいえ、休日外に遊びに行くとしたら慣れ親しんだ女友達の方がよっぽど楽しいのではないか？

美咲が僕に気があるとは到底思えないし…

…やはりなにかねだられるだろうか…

「誠君？深く考えなくてもいいよ。私、あんまりこうゆうデートし

た事ないから本当にお任せしたいだけなの」

美咲がクスクス笑う

「…え？美咲ちゃんならいっぱいデートしてるでしょ？」

俄かに信じられない美咲の言葉に僕は驚きながら聞いてみる
僕の言葉に美咲は少し寂しそうな表情をする

「…デート誘われてもほとんどみんな夜なんだもん。お酒飲んでどつか泊まろうとしたり…昔の彼氏にもあんまり昼間はデート連れて行ってくれなかったし…」

…成る程。

僕と同じ年齢の美咲だが、ずっと大人の恋愛ばかりで僕たちにとって普通の遊びにはあまり縁がなかったのかもしれない…

「じゃあ、今日は時間もたっぷりあるし目一杯遊ぼうか」

僕の言葉に美咲が笑顔になる

大きな目をクシャッと細めてまるで子供のような笑い方がなんだか凄く可愛いかった。

8 距離

「マコちゃん頑張ってー」

美咲の言葉に僕は美咲の方をちらりと見て

「美咲には負けない！」

と、返す僕。

あれから僕達はボーリング場に来ていた。

いつの間にか僕を「マコちゃん」と呼ぶ様になっていた美咲と、美咲に促されて「美咲」と呼びはじめていた僕。

いつの間にか僕等の距離は随分縮まっていた

…とは言っても縮まっているのは呼び方だけなのだが…それだけでも随分「友達」らしくなったと思う

相変わらず美咲は人目を引き、ボーリング場に来るまでもすれ違う男達は皆、美咲を見ていた

僕は、その感覚に少しの優越感と美咲に対する劣等感の両方を感じながら一緒に歩いていた。

しかし、ボーリング場に来てから、こうやって美咲とはしゃぎながら楽しんでいるとそんな気持ちなど何処かに吹き飛んでしまっていた。

僕に向けられる美咲の表情はどれも楽しそうに笑っていてとても可愛いらしかった。

僕の中での美咲のイメージは大人っぽい綺麗な女性と言うよりも、明るく可愛いらしい女性と言う方が強くなっていた。

「やったあ！またストライクだよ！」

そう言いながら戻って来る美咲を見ながら僕も自然に笑顔になっていた

一男としてのプライド―

一美咲と並んだ時の劣等感―

一格好良く―

…そんな事を色々と考えていた自分がなんだか馬鹿らしくなり、素直に美咲との時間を楽しみたいと思っていた…

そして僕は…初めて会った時よりも美咲をどんどん好きになっていった。

それはまだ恋と言う訳ではない

初めて会った時と同じ…人間として美咲に憧れを抱いていた。

付き合いたいとか…抱きたいとか…やっぱりそういう気持ちはまだまだ僕なんかじゃおこがましくて…

そんな事を考えているとふいに聞き慣れた音楽が鳴っている事に気が付いた

僕はズボンのポケットから携帯を取り出す

…着信は智博…

僕は美咲に謝りながら席を立ち通話ボタンを押した

「マコどこに居るの？」

智博の不機嫌そうな声がボーリング場の騒音を掻き消す

「何処って…ボーリング場だけど？」

「由恵ちゃんに聞いたんだけど…美咲ちゃんとデートなんでしょ？」

僕の返事にますます不機嫌そうな声で言う

…正直面倒臭いので、僕も軽く

「そうだよ」

と答えると

「何で…？マコいつの間に美咲ちゃんゲットしてんの？俺にも分けてよー」

…と半分叫びながら訳の解らない事を言っている…

…ますます面倒臭い…

「結局あの日、竜揮は元子ちゃんをお持ち帰りしていたし智博だって由恵ちゃんの番号ゲットしただろ？」

僕の言葉に智博も

「むうう…」と押し黙る

しかし直ぐに

「とにかく、由恵ちゃんに言って今度またみんなで飲む事にしたから！俺はまだまだ美咲ちゃん狙いだかね！」

…全く…

…転んでもただじゃ起きないらしい…
しかし、

僕は智博の言葉にふと考えた

「…じゃあさ、飲みとかじゃなくてみんなで遊園地とか行ってみないか？」

「はあ？そんなガキ臭い所誘ったって美咲ちゃんにつまらない男だと思われちゃうじゃん！」

僕の考えにぶつくさと文句を言う智博
しかし僕はそんな智博を他所に

「いいから遊園地！じゃ、忙しいから切るぞ？」
と電話を切った

…僕の中での美咲はお酒を飲む姿よりも楽しそうにはしゃぐ姿の方が数倍も美咲らしいと感じていた

席に戻り、美咲に遊園地計画の話しをしてみると

「凄に行きたい！そういうの楽しそう」

と嬉しそうにしていた

：その笑顔を見ながら僕は計画を変更して本当に良かったと心から思っていた。

9 好き？

「あっ！ねえマコちゃん…ちょっと見てもいい？」

ボーリングを終了し、何処かで食事でもしようと二人で歩いていると一軒の店の前で美咲が立ち止まる

…げっ…このパターンは…

昔の彼女がよく使っていた手口…

…洋服屋やアクセサリー店

…気が付くと僕は色々な物をねだられていた…

そんな昔の傷跡を思い出しながら警戒心丸出しで店の中を覗いてみる。

そこは普通の雑貨屋さん…特に高価な物は無い事に気付きホッと胸を撫で下ろす

美咲が一生懸命見ているのは色とりどりのビーズコーナー

「何か作るの？」

僕は少し不思議そうに尋ねてみる。

「うん。最近ハマってるんだよね」

と真剣な顔で答える美咲が妙に可笑しくて、僕はクスクス笑いながら他の場所に足を向ける。

僕は、さっき一瞬でも美咲に対して警戒心を持ってしまった事に罪悪感が込み上げた。

朝ファミレスに行った時、僕は美咲がトイレに行っている時に会計は済ませておいた。

それは対した金額ではないし、その位は男の僕が払って当然だと思っていた。

しかし美咲はその事を気にしてボーリングは自分が出すと言い張った。

でも流石にそれは出来なくて結局、割り勘とゆう事にした。

：そんな風に些細な金額でも気に留める美咲に対して、先程の考えは失礼極まりない：

そんな事を考えながら、何気なく手にとっていたクマの縫いぐるみが妙に美咲に似ている事に気付き僕は笑い出していた。

「何笑ってるの？」

そう言いながら僕の方にやってきた美咲の顔の隣に、その縫いぐるみを並べてみる。

：やはり美咲のキョトンとした表情と、この縫いぐるみが妙に似ている：

「何でもないよ」

僕は言いながらその縫いぐるみをレジへと持って行った

「ねえ、マコちゃんさっき何笑ってたの？」

クリームソースのパスタをくるくる巻きながら聞いてくる美咲
僕は近くのパスタ屋さんに来ていた。

僕は少し笑いを堪えながら先程の縫いぐるみが入った袋を美咲に渡す。

美咲は驚いた様子でその袋を見ていた。

しかし、美咲に袋を渡してから僕の胸の中は急に不安になっていた。

…今時、縫いぐるみをプレゼントする男なんているのだろうか？
もしかしたら美咲はドン引きするかも知れない。

「何？」

と言いながら袋を開ける美咲…

僕は不安で美咲の表情から目が離せなくなっていた…

「可愛いークマさんだ！何？これくれるの？」

美咲の言葉と表情にホッと胸を撫で下ろしながら僕は頷いた

「うそ？本当に？私の事警戒してたんじゃないの？」

美咲が驚いて僕を見る。

「いや…あまりにも美咲にそっくりだったからどうしてもプレゼン
トしたくて」

僕の言葉に、美咲が目を丸くして縫いぐるみを見つめる
…しまった…失礼だったかな？

そう思った瞬間、美咲が物凄く嬉しそうに笑い出す。

「ありがとう。大切にするね？」

その表情に僕の胸がドクンと鳴った―

そしてその後に関いた彼女の口から出た言葉―

「私さ、マコちゃん好きだな。…あ、勘違いしないでね？男としてじ
ゃなくて人間として…ね？」

…その言葉にますます高まってしまった僕の胸…

僕は平然を保つのにいっぱいいっぱいになっていた…

10 僕等の positioning

「…でね、元子が竜揮くんと一緒に帰って来たらしいんだけど、竜揮君ったら家に着いたら急に「トイレに行きたい」って言ったみたいで…」

元子は「じゃあ一緒にコンビニに行こう」ってコンビニまで連れていっちゃったらいいんだよね」

美咲を送る帰り道、二人で歩きながら合コンの後、一緒に帰った竜揮と元子の話をする美咲。

僕は竜揮のミエミエの手口と、さらりとかわした元子を考えながらクスクスと笑っていた。

てっきり竜揮達は上手くいったのかと思っていたので、余計に可笑しかった。

…でも、笑いながらも先程の美咲の言葉が頭から離れなくなっていた。

あの台詞は特別な意味から出た言葉では無いのは分かっている。

初めて美咲に会った時、僕が美咲に言った台詞。

きっとそれと同じように美咲も感じてくれている。

それが僕には凄く嬉しいものだった。

ただ一つ違うのは、僕は格好よくもないし「好き」という言葉を言われ慣れていないという事だ…

しかもその台詞を言ったのは、あの美咲な訳で…
正直…竜揮や智博に自慢しまくりたい程に嬉しい…

しかし、そこで嬉しさを噛み締めてしまうと美咲を女性として意識してしまうかもしれない恐怖に駆られた。

美咲に恋心を抱いたところで相手にされないのは百も承知。
傷付くと分かっているのに突っ走るよりも先程の台詞は無かった事にする方が何倍も賢いハズだ…

「マコちゃん、ここでいいよ今日は本当にありがとう。あと、この縫いぐるみも嬉しかったよ」

気が付くと美咲の家の近くまで来ていたらしく、美咲が先程の縫いぐるみを顔の横に並べている

「…いいよ。高い物でもないし、逆に縫いぐるみなんかでダサいけど…喜んでくれて凄い嬉しかった」

僕の言葉に美咲が笑顔になる

「マコちゃん、私ねこの縫いぐるみに似てるって言ってくれたの嬉しかった。こんなに隙だらけの顔してるんだなって…」

美咲の言葉に僕も笑いが込み上げる。

「それに似てるって言われて喜ぶのは美咲位だよ！」

少し悪戯気に言った僕に釣られて美咲も笑い出す。

「やっぱりマコちゃんは安全パイだね。凄い居心地がいいもん」

笑顔で答えて「じゃあね」と手を振る美咲を見送り、僕は来た道へと踵を戻した。

…安全パイ…それが今の僕と美咲の適切な距離

きっと今まで男友達を作れなかった美咲にとっては、僕との出会いは貴重なものだと思うてくれているのかもしれない

僕は先程の胸の高鳴りに罪悪感を抱いていた

僕にとっても、大切だと感じる事の出来る美咲との出会い

僕はそれを大事にしたいくて「安全パイ」を貫き通したいと思っていた女としてと言うよりも人間として大切だと感じた美咲の存在。

僕にとっても、貴重なその体験をくだらない恋心なんかで無駄にさせたくはなかった

…ふと空を見上げる

空に輝く星を見つめながら初めて会った時の美咲を思い出していたどこか隙など見せずに、しつとりと笑う美咲

…あの顔を見て縫いぐるみに似てるなんて言う奴はきっと何処にもいないだろうな…

そんな事を考えながら僕はクスクス笑って歩き出した。

11 男同士の車内

「ねえマコ。こないだどうだったの？」

隣の席に座っていた智博が僕に尋ねる

…あれからすでに二週間。智博が早々と話をまとめ、僕等は美咲達との待ち合わせ場所へと向かう車の中にいた。

「何？なんかあったの？」

運転席に座っていた竜揮が話に交ざってきた

「それがさー、マコこの間美咲ちゃんとデートしてたんだよー」

「はああゝあゝあゝ!？」

智博の言葉に訳の解らない叫び声をあげる竜揮。

せっかくこれから楽しい遊園地だというのに初っ端からこれじゃ気分が萎える…

「どうゆう事だよマコ!? お前は友達だと思ってたのに俺の美咲に手を出すとはっ!？」

「…その台詞、助手席に座る予定の元子ちゃんが来てからもう一回言ってくれ…」

竜揮が意味の解らない事を言っているので、すかさず僕も言葉を返す

「…もうタツは黙ってて…それよりマコはもう美咲ちゃん食べちゃったの?」

「「はあああ!?!」」

智博の台詞に僕と竜揮が声を合わせて叫んだ。

「食べたってどうゆう事だよ!マコずるいぞ!俺にも分けろっ!」

また訳の解らない事を叫び始めた竜揮を無視して僕は智博に言葉を返す。

「あのなあ…僕と美咲は友達なの。そうゆう関係にはならないよ」

「美咲ってなんだあ!美咲ちゃんと呼べええ!」

僕が話終わらない内にまた叫び始める竜揮…本当に疲れる…

「えっ食べてないの?じゃあ俺、今日こそはリベンジしよう!」

僕と同じ様に竜揮を無視して返事を返す智博。

…食べたとか食べてないとか…本当に智博は…

「ずるい!俺にも分けろっ!」

「タツが元子ちゃんを分けてくれたらね」

竜揮の意味不明の言葉にすかさず返事をする智博…
むううと唸ってから

「…それは無理な相談だ…」

と返って来た竜揮の返事に僕と智博は笑い出した。

「…確かに…その前にコンビニまで帰されないようにしないとな。
竜揮？」

「つつ！何でそれを知ってるんだ！？」

僕の言葉にびっくりした声を出す竜揮。

ルームミラーに見える竜揮の顔が真っ赤になっている

その様子を見ながら理由の解らない智博は

「何？何？」

と聞いてくる

僕は堪らず声を上げて笑い出す。

…全く…この二人はモテるくせにどこか頭のネジが緩い…

そんなこんなで僕たちが騒ぎ合っている間に、車は女の子達との待ち合わせ場所である駅前に着いた。

「…多分この辺に居るハズなんだけど……あつ居た！」

竜揮が話しをしながら女の子達を見つけ、車を停めて外に出る。
負けじと智博も外へ出る。

竜揮と智博が女の子達の方へと駆け寄るのを見ながら僕も外へ出て、
八人乗りの竜揮の車の後部座席に女の子達が乗り込みやすい様に智
博が乗っていた座席を上げる。
すると皆がやって来た

「マコちゃんおはよう！」

そう言いながらやって来た美咲は、今日もパンツスタイルで髪は襟
足を残したアップスタイル。

ふわふわに散らした髪の毛がまた可愛い…

「おはよう。由恵ちゃんも元子ちゃんもおはよう」

僕がそう言うのと由恵と元子が手を振りながら

「おはよう」

と返してくれた。

「俺、一人じゃ寂しいから元子ちゃんはこっちね」

さりげなく元子を助手席へと促す竜揮。

それに従い助手席へ乗り込む元子に続いて、後部座席に由恵が乗り
込み美咲もそれに続こうとした時、智博がそれを制した。

「由恵ちゃんの隣にマコが乗りたいらしいから美咲ちゃんは待って
て」

（はぁぁ!?!）

智博の言葉に驚き、智博の顔を見る。

智博が僕の背中を押しながら耳元で

「マコ、ごめん」

と囁いた。

：という訳で運転席は竜揮、助手席は元子、真ん中の席に美咲と智博。

そして後部座席に僕と由恵とゆう順で車は発進し始めた。

12 遊園地

「由恵ちゃんは遊園地とか好き？」

遊園地へ向かう車内

僕は極力、由恵に話し掛ける努力をした。

智博が美咲の隣に座る為に僕を由恵の席へと促した事を由恵に悟られないように：

「うーん、ジェットコースターとかは苦手だけど：みんなで遊園地に行くのは楽しみだよ」

由恵がニコニコと微笑みながら話す

由恵は今日も髪をふわふわに巻いていて白いニットにピンクのスカート、ピンヒールの白いブーツを履いている

女の子らしくとても可愛いんだけど：遊園地で動き回るには大変そうだな：と僕はひそかに思っていた。

「マコちゃんはジェットコースターとか大丈夫？」

突然、前の席から美咲が身を乗り出して聞いてくる。

「僕は全然平気だよ。智博は苦手らしいけど」

僕は智博の方へ悪戯気に笑い答える

：まあさっきの仕返しなんだけど：

「俺だって頑張れば乗れるよ！というより、美咲ちゃん：俺の事も

トモって呼んでよ？マコばかり…」

僕の台詞に答えながらさりげなく美咲に呼び方を変えるように促す
智博

その言葉に

「そっかあ、私ジェットコースター大好きだからさ。じゃあ後で智博君も付き合ってね」

と、笑顔で言う美咲

…話しの後半部分をあっさりと受け流した。

…智博がポカンと口を開いたのを見て僕は大笑いをした
しかしすぐに

「智博君じゃなくてトモね！」

と、食い下がる事なく口を開く智博

それを見ながら僕はまた笑いが止まらなくなった

「…じゃあ、トモとマコね。…って私も呼んでいい？」

と、口を開いたのは隣に座っていた由恵。

その言葉に僕と智博は

「もちろん」と口を合わせた

それを聞いて嬉しそうに笑う由恵が可愛いらしかった。

…美咲はとゆうと…

クスクス笑いながら智博の方を見ていた

智博がちらりと美咲の方を見る

それを見ながら

「じゃあ、トモね」

と、智博ににっこりと笑いかけた

それを見た時の智博の顔が拾われた子犬のようで、僕はまた声を出して笑った

遊園地に着き、僕達が最初にやってきたのは飛行機型の乗り物が、柱を中心に円を描く様に並んでいて、発進と同時にグルグル回りながら上下に動く初心者向けのアトラクションだ。

まだ三月とゆう事もあり、遊園地はがらがら。

どのアトラクションでも列ばずにすんなり乗れる

「美咲ちゃん行こう」

この飛行機は二人乗りになっていて、真っ先に智博が美咲を誘った。それにつられて、竜揮も元子と一緒に智博達の乗り込んだ後ろの飛行機に乗った。

残された僕と由恵は竜揮達の後ろの飛行機に足を向ける

「大丈夫？怖くない？」

僕が由恵を気にして声を掛ける

「この位なら大丈夫そう…」

と返事はしているが由恵の表情は固まったまま動かない。

そんな由恵を見ながら飛行機に乗り由恵に手を差し延べる。

僕の手を取り飛行機に乗った由恵は、安全ベルトを付け両手は前の手摺りを固く握っている。

そして固まった表情のまま

「マコ：危なくなったら助けてね？」

と僕の方を見た

…危なくなったらって…

僕はクスクス笑って由恵に

「わかった」と返事を返した。

13 智博のファイト

…ガゴンッ

自動販売機から出てきたお茶とコーヒーを手にしてベンチに座っている由恵のもとへと足を向ける僕。

由恵はハンカチを口元に当てて真っ青な顔をしていた。

あの初心者向けのアトラクションでこの様子の由恵

…相当苦手なんだな…

「由恵ちゃん大丈夫？」

そう言いながら隣に座り持っていたお茶を差し出すと

「うん。ありがとう」

と精一杯の笑顔を向ける由恵

そんな由恵に笑いかけてから、僕は大きく揺れている海賊船に目をやる

船の一番端で大きく手を上げている竜揮と美咲。

その両隣で元子と智博が縮こまっているのが見えた。

僕はそれを見てクスクスと笑う。

「マコ？ごめんね付き合わせて…」

ふいに由恵が口を開く。

僕は由恵の方を見て

「なんで？役得じゃん？」
と笑った。

その言葉を聞いて由恵は少しホッとした顔をしながら小さく
「：嘘つき」と微笑んだ。

僕はそんな由恵を笑いながら見て、また海賊船の方へと目を向けた。

停まった海賊船から四人が降りて来るのが見えた
美咲が手を振りながら走ってくる

その後ろで楽しそうに話しながら歩いている竜揮と元子

：そして一人、真っ青な顔をしてトボトボ歩いて来る智博。

僕はそんな智博を見て声を出して笑った。

そんな僕をよそに由恵の隣に座り

「由恵、良くなった？」

と声を掛ける美咲

由恵はそれに笑顔で頷き、お茶を一口飲んだ

竜揮と元子もベンチの前までやってきて智博の様子を眺めながら口
を開いた。

「マコ、元子ちゃんと向こうのアトラクション行こうと思ってるん
だけど：どうする？」

竜揮の言葉に僕は由恵と美咲の方へ目をやる。

由恵と美咲も僕の方に目を向けた。

「智博君もあんな状態だし…マコちゃんとジェットコースター行きたいけど…由恵いい？」

美咲がそう言いながら由恵の方へ目を向けた。

由恵は笑顔で頷いた。

…しかし…

「俺もジェットコースター凄じ乗りたい！」

…と僕たちの所までやってきた智博が会話を遮った。

…ぶほっ！

僕は飲んでいたコーヒーを口から吐き出す。

「大丈夫？」

と由恵が手に持っていたハンカチを貸してくれた。

僕は智博の言葉に大声で笑いたいのを必死で我慢した…童揮もその様子を見て、腕で口元を隠しながら必死で笑いを堪えている。

あまりにも真っ青な顔をしながら必死で笑顔を作る智博を見て、美咲は少し困った顔をしたが、

「行こう」

と美咲の手を取り智博が引っ張って行ってしまった。

そんな智博を見送り竜揮に目をやると竜揮も僕の方を見ていた…

「ぶはははっ!」

その途端に堪え切れなくなった笑いが僕と竜揮を襲った。
そんな様子を見て元子と由恵も笑い出す。

「…何が「俺もジェットコースター凄い乗りたい!」だよ…」

笑いながら声を絞りだして竜揮が言う

「アハハ…誰が見たって無理じゃんか」

僕もそう言いながら竜揮を見る

…智博…いつもの冷静さを欠く程、海賊船が怖かったのか…

「…じゃあマコ、俺達行ってくるわ」

まだ笑い止まない様子の竜揮がそう言いながら元子と一緒に立ち去った

僕は由恵に目を向け

「じゃあ行こうか？」

と席を立った

由恵も

「うん。」と頷き席を立つ

それを見て僕はゲームコーナーへと足に向ける
ふと、指先に何かが触れた。

僕は自分の手へと目に向ける。

…ぎゅっ！

その瞬間…

由恵の小さな手が僕の手を握り、僕は慌てて由恵の方へと目に向ける。

「…マコ、歩くの早いよ」

そう言いながらはにかんだ笑顔の由恵。

僕も由恵に微笑んで歩幅を少し狭めて歩いた。

14 ゲームコーナー

「ちょ…待って！由恵ちゃん！逆走！」

ゲームコーナーで二つ並んだ車の運転席に由恵と座り、正面のモニターを見ながら二人でカーレースの対決をしていた僕たち。

…のハズなのだが…

何故か正面に写っているモニターには一台、反対に走り続ける車がいる…

「…マコ…これどうやって戻すの？」

そう隣で声を出す由恵。

僕は正面のモニターに顔を向けたまま

「一旦、止まってハンドルを目一杯切りながら走ってみて」

と言った

隣から

「わかった！」

と声が聞こえたが、正面のモニターに写っているのはぐるぐる大きく旋回している一台の車…。

…僕はそれを横目に見ながらGOAL！

突然モニターに「二位」の文字が出てゲームが終了した事に、訳が分からない様子の由恵。

僕はそれを見て笑いながら運転席から腰を上げた

それを見て由恵も

「…難しいね」

と、笑いながら立ち上がる

すると入口の方から美咲と智博の姿が見えた

「由恵ー！」

美咲が由恵に声を掛けながら歩いてくる

その後ろから歩いてくる智博は…さっきよりも青い顔をしている…

僕は笑いながら由恵に

「智博と外に出てくるね」

と言い、智博の方へと歩きだす

「…マコ…怖かったよ…」

美咲と由恵の方をちらりと見てから智博が声を絞りだした

僕は笑いながら智博の肩を叩き

「外に行こう」と、智博を外へと連れ出した。

外へ出るとゲームコーナーの前にあるベンチに腰を降ろし、上着から取り出した煙草に火を着けた。

隣に座った智博はベンチの背もたれに深く寄り掛かり両手をだらりと下ろしている。

「…無理するからだよ」

僕が笑いながらそう言い智博の方へと目を向けた

「…マコのせいだ…遊園地なんか来ようって言うから…」

智博がジロリと僕を睨みながら口を開く

そんな智博の言葉に笑いながら

「美咲と二人きりになれただろ？」

と聞き返す

「…だって美咲ちゃん脈なさそうなんだもん…二人きりになると殆ど話してくれないし…」

そう言いながらため息を付いた智博

僕は美咲とデートをした帰り道、竜揮と元子の話を面白そうに話している美咲を思い出していた。

なんだかそれが僕だけに与えられた特権のような気がして少し嬉しくなった。

「…でも、まだリベンジしてやる…マコ、四人で観覧車乗りに行こうぜ」

突然そう言いながら立ち上がる智博…

…観覧車って…まだ遊園地に来たばかりじゃないか…

：そう思ったが、ゲームコーナーに向かって歩く智博を見て僕も席を立った。

ゲームコーナーに入ると美咲と由恵が楽しそうにクレーンゲームをしていた。

黄色いくまのキャラクターの縫いぐるみを一生懸命に取ろうとしているが、なかなか持ち上げられない様子の二人。
それを見て智博が

「取ってあげるよ」

と間に入っていった。

しかしやはり上手く持ち上げられずに、もう一度百円を入れる智博。
僕はそれを見ながら隣に設置してあるクレーンゲームに百円を入れた。

「マコちゃん取れるの？」

そう言いながら美咲が覗き込んで来た

「任せて」

と一言、言った僕はピンクいうサギのキャラクターの肩の部分にクレーンを引っ掛けた。

……

「あーあ」

隣から智博と由恵のため息が聞こえる。

「待ってて、もう一回」

智博がそう呟いたのと同時にチャリンとお金を入れた音が聞こえた。

しかし、僕と美咲の視線は少しずつウサギを持ち上げて行くクレーンに釘付けになっていた。

…バランスを保ちながら上に浮いていくウサギ…
そのまま出口へと運ばれていく

…すどんっ…

「マコちゃん凄い！」

ウサギが下に落ちるのと同時に美咲が声をあげた。

僕は落ちてきたウサギを拾い上げ、美咲の手元に渡す

「くれるの？ありがとう」

美咲が嬉しそうに僕を見たその顔が凄く可愛いらしい

「トモ、やったね！」

隣で一足遅く黄色いくまを取り上げた智博が、僕らをちらりと見ながら

「はい、由恵ちゃん」

と、黄色いくまを由恵に渡す。

…そして由恵と美咲に見付からない様に僕をジロリと睨み付けた

僕は少し苦笑いしながら美咲と由恵の方に目を向ける

「ねえ、二人共よかったら観覧車でも乗りに行かない？ 智博が観覧車なら乗れるって言うから…」

僕は二人にそう言いながら智博の方に寄り

「これでチャラだぞ？」

と囁いた

15 美咲の初恋

「マコちゃん、このウサギも私に似てる？」

美咲が先程マコに貰った縫いぐるみを手に持ち、楽しそうに話している。

「これは美咲が海賊船に乗ってた時の顔に似てる」

ウサギの顔を見ながら悪戯氣に言うマコ。

その言葉に美咲が

「見てなかったくせにー」

と笑い出す。

美咲がこんなに、男の人と楽しそうに話すのを見たのはどれ位前だろうか：

そんな二人を訝し気に見ているトモをちらりと見て、私は見え始めた観覧車の入口へと視線を戻す。

「美咲ちゃん、観覧車見えて来たよ。行こう！」

突然そう言いながら美咲の手を引っ張り進み出すトモ

美咲は慌てて私の腕を掴み

「せっかくだし、四人で乗ろうよ」

と、トモに言った。

私はそんな美咲の腕をそっと解いて

「トモが可哀相だから一緒に乗ってきなよ。私はマコと乗るから」
と答えた。

…意地悪だな私…また美咲に嫉妬してる…

…美咲と私は小学校の頃からずっと一緒だった。

小学校の頃の美咲はショートカットのよく似合う女の子だった。

いつもクラスを中心にみんなと笑い合っている

そんな風に、明るくて活発な女の子だった。

中学校に入っても、そんな美咲の周りには男女問わず皆が集まっていた。

美咲が少しずつ変化していったのは中学二年生の頃。

髪も伸ばし始めて、一人で考え事をしている事が多くなっていた。

あの頃の美咲は、見る度に綺麗で大人っぽくなっていた。

美咲が綺麗になっていくたび、男子達は距離を置き始め、女子も美咲に声を掛けにくくなり少しずつ美咲は孤立し始めた。

男女共に美咲に一目置くようになっていたのだ。

「…由恵…私ね、好きな人がいるの…」

頑張ってその人に女として見てもらいたい。

…早く大人になりたい…」

今にも泣きそうな声で美咲が私に話してくれたのは学校の帰り道、私の家の近くにある公園だった。

私は、今にも崩れそうな美咲が、そんな想いを相談してくれた事がとても嬉しかった。

…はずなのに…

心のどこかでは、それほど強く想える恋をしている美咲がとても大人に見えて

…羨ましかったんだ…

美咲の恋が終わりを告げたのは卒業式。

美咲の姿が見えなくて、探しに行った教室から聞こえたのは、小さく震えた美咲の声だった…

「…少しでもいいんです…私の事を女として見てください…」

「…ごめんな…藤井は藤井だよ…女としてはどうしても見てあげれない」

美咲の声に続いて、聞こえてきた声は落ち着いた男性のものだった。

男性はもう一度

「ごめん」

と呟いて歩き出した様子だった

…まづいっ！…

そう思ったのと同時に教室のドアが開いた…

とっさに逃げ出そうとしたが、出てきた男性と目が合ってしまった。

「…平田…」

…それは美咲が所属するバスケット部の顧問の松山先生だった…

先生は24歳で背も高く生徒にも人気があった。

…でも美咲の好きな人が先生だったとは…

驚き見つめる私の視線に、先生は逃げるようにその場を去って行った。

私は、教室に一人でうずくまる美咲の側に行き
「頑張ったね」

と美咲の髪を撫でた。

そうする事で私も美咲のしている世界に入れたような気がしていた。

「…由恵ちゃん？大丈夫？具合悪い？」

ふと心配そうに覗き込むマコの視線に気が付いた。

結局、私の一言で美咲とトモは一つ前の観覧車に乗り、私はマコと観覧車の中に居た。

…そうだ観覧車…！？

思い出したように窓の外を見る私。
もうずいぶん高くまで上っている

途端に足が震えだし、どうしようかとマコを見た

…マコは心配そうに私を見ている。
切れ長の一重瞼にキリッとした眉毛。

…マコってトモや竜揮君と居るから目立たないけど結構、格好いい

部類に入るよな…

そう思って見ていると足の震えも恐怖心も飛んでいた
…のだけど…

「マコ？隣に座ってもらってもいい？」

私はそう言って、隣に座ったマコの腕に自分の腕を絡ませた。

16 観覧車

「…あんまり外は見ない方がいいよ?」

隣で心配そうに声をかけるマコ。

私はギュッとマコの腕を抱きしめる

…ドクン…ドクン…

観覧車が頂上に近付く

…ドクン…ドクン…

「由恵ちゃん? 凄いドキドキしてるけど大丈夫?」

…ドキッ!…

マコに胸の高鳴りが気付かれてしまった

…みるみる顔が熱くなるのが分かる…

私は俯き何も答えなかった

マコの大きな手の平。私はそのゴツゴツした指に自分の指を絡ませた

…高校の入学式。他校から来た男子や上級生達は皆、美咲を見ていた
他の女子生徒よりも遥かに大人びていて綺麗だった美咲

一緒に帰る時も上級生達が声を掛けにやってきた

瞬く間に美咲は学校中の有名人になっていた

…しかし、当の美咲はその頃毎日イライラしている様子で、寄ってくる男子達に冷たい言葉を浴びせていた

あの日もそうだった

「美咲ちゃん、付き合って欲しいんだ。俺マジで美咲ちゃんが好きだから」

学校を出ようと美咲と校門の近くまで歩いた所で呼び止められ、美咲にそう告白したのは三年のサッカー部の大橋先輩。

爽やかな容姿と笑顔でかなり女子生徒の間では人気が高かった

：私もそんな大橋先輩のファンの一人だった

流石の美咲も、大橋先輩に告白されたのだから少しは気持ちが揺らぐだろう

：と思ったのもつかの間：

「マジで好きって：話した事もない人に簡単にそんな言葉言われたくない！」

冷たい視線と共に、そう言って歩きだす美咲：

美咲の言葉に呆然とする先輩：

「美咲っ！」

慌てて私は美咲を追い掛け、校門を出た所で呼び止める

「いいの？あんなに言っちゃって：先輩人気あるのにさあ：」

「人気なんて関係ないよ：何なの皆して：遊びに行こうとか、付き合ってとか：簡単に言い過ぎ：馬鹿にしてるよ：」

私の言葉に美咲はそう答えると急にうずくまり出した

「…私に何を求めてんの…？男の人って本当は皆、同じ事しか考えてないの？」

そう小さく呟くと、小さく背中を震え始めた

…中学生の頃、美咲の事を好きだった男子は沢山いた。しかし皆遠くから見ているか、告白するとしてもあんな公衆の面前なんかではなく、本当に勇気を振り絞り美咲に気持ちを伝えようとしていた。

…高校に入ってから男子達の対応に、一番戸惑っていたのは美咲自身だった。

…でも…正直、私には美咲の気持ちが分からなかった

…分かりたくても美咲の環境は、私みたいな普通の女の子には分からない…

…何でだろう…ずっと一緒に居たはずだったのに…いつの間にか美咲は見えなくなるほど前に進んでいた

…マコと笑っている美咲を見ると、美咲が私と同じ目線でマコを見ている気がして嬉しかった

…そう…嬉しかったはずだった…

「マコ？マコも美咲が好き？」

隣に座るマコに尋ねてみる：マコは少し黙って口を開く

「好きだよ」

…ズキンッ…

マコの言葉に胸が張り裂けそうになる

「でも…惚れてる訳じゃないんだ。ただ、美咲が好き。それだけだよ。」

マコが言葉を続ける

私はその言葉の意味が解らずに、そっと顔を上げてマコを見つめる

…ドクン…

マコは私の目に涙が溢れそうなのを見て、少し心配そうな表情をしている

…ドクン…

私は少しずつマコとの距離を詰めていく

…ドクン…ドクン…

マコの吐息が感じられる程の距離。私は目を閉じた…

…ふいにマコに抱きしめられた。私の頭はマコの胸の中にすっぽりと収まっていて、マコの鼓動が聞こえる

「…いや…由恵ちゃん…僕も一応男なんだから…まずいよ？」

頭の上からマコの声が聞こえる

…何やってるんだ私は…

自分の行動に恥ずかしくなるのと同時にさりげなくマコにかわされた自分の唇が、惨めでどうしようもなかった

私はマコの腕の中から頭を抜き、先程トモに貰った黄色いくまを抱きしめた

本当は美咲のもとへ行くはずだったこの縫いぐるみと、今の私は同じだった…

17 欲望と気持ち

…今、僕の頭の中はフル回転していた…

目の前には涙を溜めた由恵の顔

僕はその大きな瞳に吸い込まれそうになっていた

先程までの観覧車、僕は乗ってる間ずっと同じ事を考えていた。

…それは…

ずっと右手の肘にある柔らかい感触…

由恵が僕の腕を抱きしめる間、ずっと僕の肘は由恵の大きな胸に当たっていた…

…僕は自分の股間が恥ずかしい事にならない様にずっと、僕の母親の太い二の腕を思い出していた…

…この感触は母さんの二の腕…

…この感触は母さんの二の腕…

呪文の様に唱えたその言葉も、今の由恵の瞳を見るとどこかに吹き飛んだ

…ドクン…

…柔らかそうな由恵の唇が近づく…

…ドクン…

…僕の理性が吹き飛ぶ…

…ドクン…ドクン…

由恵の唇に自分の顔を近付ける

(…マコちゃん…)

…一瞬の出来事だった…

僕は由恵の頭を自分の胸に埋めて冷静になる…

…何やってんだ僕は…

…由恵に惚れてる訳でもないくせに…

僕はいつもこうだ…

ただの性欲なのに好きだと勘違いをする

そんな気持ちで誰かを幸せにする事なんて出来ないと分かっているのに…

「…いや…由恵ちゃん…僕も一応男なんだから…まずいよ…」

…なんとか声を搾り出す

…何言ってるんだ僕は…これじゃまるで由恵が悪いみたいじゃないか

…!

由恵が僕の胸から頭を抜くと、僕の腕の変わりに智博に貰ったクマを抱きしめる

僕は小さく

「ごめん」と呟いた

僕はあの瞬間、確かに美咲の笑顔が頭を過ぎった事を思い出す

(…私と話したいんじゃないかって女の子と話したいんじゃないかな…)
以前、美咲が竜揮と智博の事を言っていた言葉…
今の僕は正にそれだった…

…由恵とキスをしたかった訳ではない…抑えられなくなった性欲を
吐き出そうとしていただけだった…

僕は美咲の笑顔が僕の前から消えてしまう恐怖感に駆られていた

観覧車は静かな沈黙のまま降りて行った…

「由恵？」

観覧車を降りると、先に降りていた美咲が由恵の表情に気が付いて
声を掛ける

「高くて怖かったよー」

そんな美咲に笑顔で答える由恵：

…僕はそんな由恵と美咲に対して罪悪感でいっぱいになっていた…
そんな様子に美咲は気付く事なく

「由恵？私、まだ乗り物乗りたいからマコちゃん借りてもいい？」

と由恵に尋ねた。その言葉に頷き、トモの手を取り歩きだす由恵：

…と言うより智博？…

智博も美咲の言葉に素直に従っている…

…さっきはあんなに無茶したのに…

「智博と何かあったの？」

僕は美咲に尋ねた

「…ん。付き合ってたって言われたの…で、断った…」

美咲が少し考えながら口を開く。そしてすぐに

「でも諦めてくれなくて私ね、智博君にどこが好きなの？…って聞いたの…」

美咲は近くにあったベンチに腰を下ろしながら続ける

僕も美咲の隣に腰を下ろし美咲の顔を見る

「…でも智博君は「俺、本当に美咲ちゃん程綺麗な人は見た事ないんだ」ってそれしか言わなくて…で…つい…馬鹿にしてんの？って…言っちゃった…」

…僕は美咲の言葉に自分の腕で口元を押さえ、顔を美咲と逆の方へと向けた…

…智博…すまん…

…僕は笑いたいのを必死で我慢していた…

「…マコちゃん？…引いたよね…私きつく言い過ぎちゃった…」

僕の様子に美咲がため息をついた

「…いや…大丈夫だよ智博なら多分。今頃、次の作戦でも練ってるよ…あいつは打たれ強いから」

僕がそう言うのと美咲はホッとした笑顔で眉をしかめた

「…次の作戦練られるのは嫌だな…」

美咲の言葉に僕は我慢し続けた笑いが抑えられなくなり、声を上げ

て
笑
っ
た

18 悪戯娘

「美咲。僕、あれに乘りたい」

美咲と二人で歩きながら僕が指をさしたのは川の上を丸太の形のジェットコースターが緩やかに走り、最後は滝から滑り落ちるとゆうアトラクション

美咲も笑いながらそれに頷く

…いざ、乗ろうと思い来てみたのはいいが、この丸太…一列の四人乗りで乗る場所が縦に二人ずつに分かれている
前に乗る方は背もたれがなく、後ろの人に寄り掛かる形になってしまふ…

美咲は前、僕は後ろに乗り僕の股の間に美咲が乗るような体勢だ…

…先程の観覧車に引き続き、この状況も僕にとってはかなりマズかった…

「ねえ、ラストで落ちる時私濡れちゃうかな？」

突然、美咲が振り返り僕に尋ねる

…近いっっ！…

僕達の顔の間は僅か数十センチ：

「…美咲…この状況で振り向かれると距離が近すぎるよ…」

僕は慌てて顔を背けて答える

その言葉に美咲も

「ごめん」と前を向き、なぜか笑い出した

「マコちゃん？　そうゆう事は言わない方が得じゃない？」

美咲が少しだけ顔を向けて悪戯っぽく言った

僕は顔を背けたまま

「それで堪える身にもなってくれよ…」

と、先程の観覧車での出来事を思い出しながら答えた

「堪えてるの？」

美咲がわざと振り向いて聞いてくる…

…近いってば…

そんな美咲に僕は、今度はわざと顔を背けずに答える

「僕だって男だぞ？」

その言葉に美咲は顔を赤くして、何も言わずに前を向いた
…ふう…この悪戯娘め…少しは懲りたか…

美咲の様子に僕はニヤリと笑い、顔にかかった水しぶきを手で拭った

「…意地悪…」

美咲がそう呟いた気がしたが、目の前に見えてくる滝に僕の気持ち
は集中していた

…バシヤンッ!!…

丸太が下に落ちるのと同時にびしょ濡れになったのは…僕…

前に居たはずの美咲は上半身を目一杯かがめて水しぶきを避けてい
た…

…そのままの体勢で顔だけ向けてニヤリと笑う美咲…

…この悪戯娘め…

僕はびしょ濡れのまま遊園地を歩いていた

「大丈夫だよマコちゃん! ジェットコースターに乗れば乾くよ!」

…笑いながら話す美咲をちらりと見ながら、僕は仕返しの仕方を考
えていた

「あ、マコちゃんコーヒーカップ!」

そう言いながら美咲が走りだす
僕はそれを見てニヤリと笑った

優雅に回転するコーヒーカップ…その中に一台…凄まじい回転をする僕達のコーヒーカップ

「…ごめ…んな…さいっ!」

美咲がやっとの事で口を開く

「駄目だね! スーパー早乾き脱水ー!!」

僕はそう言いながら更にコーヒーカップをぐるぐる回す

美咲の綺麗な顔が風に煽られて凄まじい顔になっている…

僕はそれを見ながら声を出して笑った

「…マコちゃんがこんなに意地悪だと思わなかった…。」

回転が止まり、疲れた様子で、美咲がそう言い僕をジロリと睨みつける

僕はその様子をクスクスと笑い

「服が濡れたからしょうがなかったんだよ」

と答える。

その言葉に美咲も笑い出し、近くのベンチに座った

僕も煙草を取り出しながら座る

「…はい。」

不意に美咲が僕に何かを渡してきた

それを受け取り美咲の顔を見る

「この間のくまさんの御礼」

そう、笑いながら答える美咲

袋を開けるとお洒落な携帯ストラップだった

ウッド素材のビーズで、下にはシルバーの飾りが付いている

それは「M a k o」のスペルが繋げてあってとても可愛いらしい

「…手作りだけど引かないでね…?」

隣で小さく呟く美咲

僕は驚いて美咲を見た

「手作りなの?」

そう尋ねると美咲ははにかみながら頷いた

「ありがとう。めっちゃ嬉しい」

僕はそう言い、美咲に笑いかけた。それを見て美咲も少し照れながら嬉しそうに笑った

19 悪戯娘再び

…僕達は遊園地を出て、帰りの車に乗っていた…

しかし、行きの車内とは全然違うこの空気…

運転席の竜揮と元子は何故か手を繋いでいる…

智博は振られたくせに美咲の隣でいびきを欠いているし…

由恵は頬杖をついて外を眺めたまま口を開かない

「…ねえマコちゃん…なんか智博君に無性に悪戯したいんだけど…」

突然、前の席から美咲が振り向き言った。

…確かに…本当に打たれ強い男だ…

「美咲、口紅持ってる？」

僕は美咲に聞いた

美咲はクスクス笑い出しバックから化粧ポーチを取り出した

「やっぱりファンデは必要だね」

そう言いながら智博の顔をパタパタとやる美咲

僕は後ろからシャドーを塗ってみるが上手く出来ない

「由恵も手伝って」

美咲が由恵に声を掛ける。突然呼ばれて驚いた由恵は、智博の顔を見て笑い出した

僕はそんな由恵を見てホッとしていた
あの観覧車での出来事から僕は気まずくて由恵の顔を見る事すら出来なくなっていた

「美咲、ライン取って！」

由恵はそう言ってアイライナーを手にとると、智博の瞼を指で軽く押さえて綺麗にラインを引いた

その様子をルームミラーで見ていた竜揮は

「…美咲ちゃんと由恵ちゃんの以外な姿を見た気がする…」

と呟いた。その隣で元子も

「私もやりたかったなー」
と笑っている

「「アハハハっ！」」

完成した智博の顔を見て皆で笑い出す

「トモ美人だねー」

由恵が言う。…確かに…

智博のぱっちりとした二重はメイクをしたらますます大きくなり、

本当に女性の様だった

「…ん…？」

皆の笑い声をに目を覚ました様子の智博。

その瞬間、全員が笑いを堪え平然とした表情を保とうとしていた

「…トモ？これから皆で飯でも食おうかって話してたんだけどいいか？」

竜揮が智博を見ないようにして聞いた

何も気付かない様子の智博は

「うん。めっちゃ腹減った」

と答える。その瞬間、美咲が急に後ろを振り向き座席に顔を埋めた
…相当笑いを堪えている様だ

「美咲ちゃん？どうしたの？」

何も気付かない智博が美咲を心配そうに覗き込む
美咲は必死で顔を見ない様にして

「…ごめん…車に酔っちゃったみたい…」

と嘘をついた。そんな美咲を見て智博は

「タツ！運転荒いよ！美咲ちゃん酔っちゃったじゃないか！」

と竜揮の顔の前に身を乗り出し怒鳴り出した

ぶーっっ!!

途端に飲んでいたお茶を吐き出した竜揮

…もう全員がどうにも耐えられない様子だった…

それから近くのファミレスに来た僕達。

智博はまだ何も気付かないままファミレスへと入って行った

「いらっしゃい…ませ…」

笑顔で迎えてくれた店員さんが智博を訝し気に見つめる

その様子を見て、僕達は笑いを堪える

…智博は顔だけ見れば女性のようなだが、格好や髪型、歩き方などそれ以外は男そのものだった

「ええと、俺は和風ハンバーグのセット…」

そう注文する智博を不思議そうに見つめる店員さん

ふと、智博が

「トイレ。」と言って席を立った

「「ぶはははっ!」「」

その途端に笑い転げる僕達

今頃、智博はどんな顔で鏡を見てるのか…それを考えると笑いが込み上げてくる

バタンっ!!

「マコー!!」

智博がトイレから出てくる。化粧を擦り落とそうとしたのか顔が所々赤くなっている
そんな智博を見て皆大声で笑い出す

「何だよこれ!?!」

智博が僕の所まで来て怒りだす
僕は大声で笑いながら

「…犯人は美咲だよ!」
と美咲を指さした

「嘘つけ!」

僕の話に聞く耳持たない様子の智博

「本当だよ! その口紅は美咲ちゃんがキスして付けたんだよ」

竜揮が悪戯っぽく笑い出す

…その言葉に動きを止める智博と美咲

智博は顔を真っ赤にして美咲を見ている

美咲はジロリと竜揮を睨み付けた

それを見てまた皆で笑い出した

∴僕はこうして皆で笑い合える事が何よりも楽しかった
このまま、この関係が続けばいいな∴そう思いながら手元にあった
お水を一口飲んだ

20 由恵への想い

僕達は駅前へと来ていた

そこで女の子達が降りて行く

「本当に送らなくていいの？」

竜揮が心配そうに元子を見る

「うん。三人で話もしたいし。今日はありがとう」

元子が竜揮にそう言いながら笑いかける

僕もそれを見ていると、急に誰かに引っ張られた
そこへ目をやると由恵…

「ちょっとだけいいかな？」

由恵の言葉に頷き、僕等は皆と少し離れた

「…さっきの事謝りたくて…」

由恵が小さく呟いた

「…由恵ちゃんが悪い訳じゃないよ…僕の方こそごめん」

僕はそう言って由恵を見た

「…マコ…私、マコに嫌われたくない…」

由恵が涙を溜めて僕を見る

：僕はその涙に気付かないふりをして

「嫌わないよ…友達だろ？」

そう笑いかけ由恵の頭に手を乗せた

そして

「行こう」と言って、そのまま皆の方へ足に向ける

：僕の胸はどうしようもない程に高鳴っていた：

それを由恵に気付かれないように、出来るだけ由恵の方を見ないようにして歩きだす

戻って皆に別れを告げると僕は車に乗り込んだ

：頭の中では由恵の事を考えていた

僕の彼女に対する気持ちは何なのか自分でも解らなくなっていた

ふいに運転席から竜揮が声を掛ける

「俺、元子と付き合う事になったから！」

その言葉に智博が身乗り出す

「はぁ！？タツずるい！：俺なんて美咲ちゃんに振られたのに：」

そう言いながら体を座席に戻してため息をつく

それに竜揮が笑い出し

「当たり前だろ？付き合えると思ってたのか？この身の程知らず！」
と智博に言葉を浴びせる

僕はそんな二人のやり取りを見ながら小さく笑いだす

（マコも美咲が好き？）

あの時言った由恵の言葉を思い出し、僕はまた胸が高鳴るのを感じていた

「…ねえマコ？もしも、今由恵に告白されたら付き合う？」

…ドクンっ！

智博の言葉に胸が高鳴る

「…どうゆう意味だよ…」

僕は出来るだけ冷静な振りをして智博に尋ねる

「…いや…由恵と二人きりになった時にさ、美咲ちゃんに振られた話を由恵にしてたんだ…その時にマコとの話聞いちゃって…」

智博の言葉に、僕は自分の顔が赤くなっていくのを感じていた
智博はそんな僕に見向きもせず

「マコ勿体ないよー。そんなシチュエーションなかなかないぞ？…
由恵泣いてたぞ？」

と言葉を続ける

僕は何も答えられずに俯いていた

「…で由恵ちゃんはマコが好きなの？」

それまで黙って話を聞いていた竜揮が口を開く

「…それは言わなかったけど…態度を見てれば解るよ」

竜揮の言葉に智博も返す

僕は今日一日の由恵の事を思い返していた

…僕の手を握りしめていた時の由恵の笑顔

…カーレースで逆送して

「難しいね」とはにかんだ由恵

…観覧車…柔らかい由恵の胸…

…近付いてくる由恵の顔…

「だあああっ！」

突然叫び出した僕に驚き目を向ける二人…

気が付くと車は僕の家近くまで来て止まっていた

「駄目だ…頭がパンクする…家でゆっくり眠るよ…」

僕はそう言いながら車を降りた

僕は家に入るとそのままベットへ身を投げた

（…勿体ないよ…）

智博の言葉が頭から離れず、由恵の顔を思い出す

「僕、馬鹿なのかな…」

そう一人で呟いてポケットから携帯電話を取り出した

そこにぶら下がっているストラップを触りながら、僕は一人で考えていた

21 苛立ち

…ドスンっ…

私はベットに倒れ込む

お風呂に入ったばかりで、赤くなってる頬を軽く抓る

手を伸ばし一つの縫いぐるみを取る

そのクマの縫いぐるみと顔を合わせて私は呟く

「…マコちゃんのバーカ!」

…何だろう凄く苛々する…

原因は解ってる。帰りに由恵が私に言っていた言葉

「観覧車でマコとキスしそうになったの…」

私はその言葉を思い出し、枕に顔を埋める

…マコは由恵が好きなのかな…

由恵は私と違い女の子らしくてとても可愛い

…私と違い背も低いし…

…私と違い胸も大きい…

そんな由恵と観覧車で二人きりになったら…女の私でも欲情するさ…

…でもマコは違うと思ってたのに…

(僕だって男だぞ?)

マコが言った言葉を思い出す

あの時、その一言で胸が高鳴ってしまった自分に後悔が押し寄せてきた

…あれは由恵に向けられて言った言葉なのかもしれない…

…私はマコが好きだ…

それは今まで恋をした時の感覚とは違い、胸が熱くなるものでも、相手を想い苦しくなるものでもない
きつと、恋をしている訳ではないはず…

私はただ、マコと一緒に笑いたいのだ

キスしたい訳でも抱きしめられたい訳でもない
ただ単純にずっと一緒に居たいだけなのだ…

私は枕元で充電器に立てられている携帯に目をやる

そこにぶら下がっているストラップ…

マコと同じウッドビーズで作られていて下には「M i s a k i」の
スペルが列んでいる

…突然、携帯が鳴りだした私は携帯を手に取り画面を開く…

そこにはマコからのメールが届いていた

「お疲れ。今日はストラップありがと。」

絵文字も入っていないそのメールを見て私は直ぐさま返事を送る

「マコちゃんは絵文字も入れられないのかな？ウサギありがとね」

わざと沢山の絵文字を使ってメールを送った
直ぐにメールの受信音がする

「絵文字ってこうやって入れるの？」

そう書かれたメールには絵文字は入ってなく、下をスクロールして
いくと写メが貼付けてあった

…爆睡している智博君に私が必死で化粧している…

…いつの間に撮ったんだよ…

私はそれを見ながら声を出して笑っていた

私はまた直ぐにメールを返信する

「証拠写真撮ったな！マコちゃんの馬鹿！

…お詫びとして次のデート決行日を決めて！」

少し胸を高鳴らせながらそのメールを送信した

…少したってからの受信音

「じゃあ、再来週の日曜日ね。」

私はそのメールにOKの返信を送り、クマを抱きしめながら寝返り

をうった

(…私の事を女として見てください…)

以前、松山先生に言った台詞が頭を過ぎる

…あの時の先生の困った表情とマコが重なる

(…女としてって言う訳じゃなくて…)

初めて会った時のマコの台詞…

(…藤井を女として見る事は出来ない…)

あの時、先生が私に言った台詞…

…二人の台詞が私の中で交互に思い返されて行く…

「…マコちゃんは由恵の事…女として見てるのかな…」

私はそっと呟いた

22 交差する想い

あの遊園地に行った日から次の週の金曜日…

「…ん…」

ベットで眠りに就いていた僕は、聞き慣れた携帯の着信音で目を覚ました

手を伸ばし携帯の画面を開く…見慣れない番号…

「…もしもし？」

「…マコ？私、由恵だけど…トモに番号聞いたんだ。ごめんね寝てた？」

そこから聞こえてきたのは由恵の声

「いいよ。起きてたから。それよりどうしたの？」

僕は起きてたふりをして由恵に聞いた

「…うん、あのね明日の夜とか空いてる？良かったら食事に行かないかな？」

突然の由恵の誘いに戸惑う僕。

「…いいけど…どうしたの?…急に」

「…あの、話したい事もあるんだけど…マコと二人で出掛けたくて…」

僕の言葉にそう由恵は答える

僕は

「分かった」と返事をして電話を切った

次の日、僕は自分の車に乗り駅前へと向かうとそこには既に由恵の姿があった

「由恵ちゃん!」

僕は助手席の窓を開け声を掛ける
僕に気が付いた由恵が助手席へと乗り込む

「迎えに来てくれてありがとうね。」

由恵がそう言いながら僕を見ると

「…なんかマコ、いつもと雰囲気違うね? マコの車に乗るのも初めてだし…緊張する…」

そう付け加えた

「そうかな？ 食事に行くなら車の方が便利かと思ってさ」

僕はそう言いながら由恵の方を見た

由恵は少し嬉しそうに笑っていた

僕はそう笑いながら答えると、由恵は嬉しそうに笑っていた。

「…ところで…何が食べたい？」

僕の言葉に由恵は少し考えながら

「何でも」

と笑った。僕はそれをちらりと見ながら苦笑いをした

…女の子の「何でも」程、プレッシャーなんだよな…

…と言う訳で…僕が悩みながら来たのは、少しこ洒落たイタリアン
レストラン

白い壁と大きな窓の店内には観葉植物が並べられていて、キッチン
は中まで見えるオープンスタイル

その脇にはワインセラーが置いてあり、何種類ものワインが並べら
れている様子だ

僕達は窓際の席へと案内された

「いいお店だね」

由恵がそう言って僕に笑いかける
僕はホッと胸を撫で下ろした

それから僕達は色々な話をしながら出てきた料理を口にした

「美味しい！」

嬉しそうに食べる由恵を見ながら僕も自然に笑顔になる

「…トモ、美咲に振られちゃったみたいだね…」

由恵がそつと口を開く

智博の事を心配している様子で、僕の方を見ないまま話を続ける

「…あの遊園地の日、トモが言ってたんだ…美咲に断られたって…
…美咲はいつもそうだからしょうがないよって言ったんだけど…」

「智博は打たれ強いから平気だよ。美咲と付き合いたいって言うって
るけど…僕からしてみれば何処まで本気なのかも分からないし…」

僕は由恵の言葉に返事を返す

「…じゃあ、マコは？美咲の事好きだって言ってたでしょ？」

由恵が真剣な瞳で僕を見る

「言っただろ？僕が美咲を好きって言ったのはそうゆう意味じゃない

よ…」

僕がそう言っていると由恵は僕を見たまま口を開く

「じゃあ、私の事は？もしも、私がマコが好きだって言ったら？」

僕は由恵の真剣な瞳から逃げる用に視線を皿へと移す

「由恵ちゃんも好きだよ…だけど…もしもの話は止めよう」

僕の言葉に、由恵はそれ以上は何も言わなくなり黙ったまま食事を始めた

(…由恵ちゃんはマコが好きなの？)

(…態度を見てれば分かるよ…)

僕はあの日の竜揮と智博の会話を思い出し、胸が高鳴っていた

23 海

「マコ？私海に行きたい」

由恵の一言で、食事を終えてから僕等は海を見に来ていた

「凄い。いい香り」

風に靡く髪を押さえながら由恵が口を開く

僕は手を伸ばし背伸びをして風を感じる

「気持ちいいな」

僕がそっと呟くと、由恵は僕をちらりと見て微笑んだ

「…私ね、すごーく嫌な奴なの…そんな汚い気持ちも全部、波が浚ってくれたらいいのに」

由恵が海を見ながら言った

僕はその言葉の意味が分からずに

「何で？」

と聞き返す

由恵は僕の方を振り向かずに言葉を続ける

「…私ね、ずっと昔から美咲に嫉妬ばかりしてるの。綺麗で人気があつて…いつも男の子達は皆、美咲にしか興味がないの」

僕は黙って由恵の後ろ姿を見つめながら、次の言葉を待っていた

「…私に近付いて来る人はいつも皆、美咲目当て。美咲に振られたから私と仲良くなって、次のチャンスを狙ってるの…だから、ずっと嫉妬ばかり…」

僕は、由恵の言葉を聞きながら竜揮と智博の事を思い浮かべていた昔、一度振られて由恵と仲良くなって合コンをセッティングした竜揮脈が無さそうで、由恵と連絡を取り合って次の約束を取り付けた智博

…僕は由恵の言葉に

「そんな事ない」

と言ってあげる事が出来ずに、ただ黙って聞いていた

「…それにね、本当は今もそんな汚い気持ちを全部隠してマコにアタックしようと思った。

…でも、それじゃ益々美咲に勝てないから…汚い所、全部吐き出してマコに見てもらいたかったの…」

由恵が僕の方を振り向きながら言った

僕は黙って由恵を見ていた

月明かりの下、由恵は満面の笑顔

しかし、瞳からは今まで何年も堪え続けていた涙が溢れだしていた

「…マコ？前にね、美咲が言ってた。マコは美咲を女としてじゃなくて、一人の人間として見てくれる。って…私もね、美咲と私を同じ目線で見てくれる男性はマコだけだった…」

そう言いながら由恵は僕の方へと近付く
…ギョッ

由恵が僕に抱き着く

…しかし僕は、由恵を抱きしめ返してあげる事が出来なかった…

「…由恵」

「…何も言わないで…今はこのままで居たい…」

僕の言葉を遮るように口を開く由恵

僕の胸に顔を埋めた由恵の表情を見る事は出来ないけど
由恵の背中は小さく震えていた

僕は由恵の髪をそっと撫でた

まだ肌寒い夜の海

沢山の星達に照らされた僕と由恵

まるでこの世界で二人しか居ない様な空間の中
潮風の香りを感じながら

僕等はそっとキスをした

24凍結された想い

「……………」

私は今日もベットの上でクマを虐めていた

…明日はマコとデートだとううのに…気分が乗らない…

先週、由恵からあった一本の電話

「私ね、マコが好きなんだ」

由恵はそう話を切り出してきた

「私は私なりに頑張るつもりだから…」

「…何もしないで終わらせるつもりはないから。」

…由恵が電話口で言っていた言葉が次々に頭を過ぎる…

そして最後に由恵が言っていた台詞が、私の胸の苛立ちを余計に駆り立てていた

「美咲がマコと付き合うつもりがないなら…惚れてる訳じゃないなら…マコの気持ちを振り回さないで欲しい…」

私は…私はマコを振り回しているの？

ただ一緒に居たいと思う、この気持ちはマコを振り回している事に

なるの？

私はクマを抱きしめたまま寝返りを打つ

…由恵は昔からとても可愛かった

小学生の頃、いつもフワフワの洋服を着て私に笑いかける由恵
そんな由恵が私はいつも羨ましかった

私にない物を沢山持っている由恵

中学生になって恋を覚えた時、由恵の様になれば先生も私を女として見てくれるかなって思ったっけ…

鏡の前で由恵の笑顔を思い浮かべながら、私も笑顔を作る

…でも、やっぱり私には由恵のフワフワの笑顔は真似出来なくて、
代わりにピンクのリップを塗った

でも、先生に私の想いは届かなくて…

教室で一人泣いてる私に

「頑張ったね」

って言ってくれた由恵

そんな由恵を私はずっと大切にしたいと思っていた

気が付くと頬を涙が流れていた

私はそれを拭って枕に顔を伏せる

不意に携帯から流れる着信音
開いてみるとマコからだった

「もしもし美咲？」

電話口から聞こえてくるマコの声

「明日なんだけど、待ち合わせはどうする？」

私はその言葉に一瞬躊躇ってから口を開く

「…マコちゃん…私、風邪ひいたみたいなんだ…明日行けないや」

「…そつかあ、ちゃんと治せよ？出掛けるのは今度、ちゃんと治ってからな」

私の言葉にマコは心配気に答える

「…ん、ごめんね。」

私はそう言って電話を切った…

…これで良かったんだ…

私は自分にそう言い聞かせる

でも、そんな想いとは裏腹に流れ出した涙は止まってはくれなかった

会えないと分かると余計に会いたいと思ってしまう

きつと、こんな気持ちにマコを振り回してるんだな…

そんな事を考えながら、私はマコがとても好きなんだと気付いてしまっていた…

しかし、私は由恵の電話を思い出す

（私ね、マコが好きなんだ…）

由恵のその声は今にも崩れてしまいそうで…

とても切なく、必死だった

私は、自分のこの気持ちが由恵を傷付けてしまう事が怖くて堪らなかった

…全て無かった事にしよう

この気持ちも、マコと笑い合った日々も…

私はそう決心した

25 久々の再会

あの電話以来、私はマコと会う事は無くなっていた
私からマコに連絡をする事は無かったし
マコからの連絡も入らなかった

由恵とマコはあれから何度か会ったりはしているみたいだったけど、
二人がどんな関係になったのかは私には分からない

私は、出来るだけマコの事を考えないようにしていた

：マコを想うと、自分の行き場のない想いが惨めになるだけだった…

「GWにき、皆で旅行に行こうよ」

元子がそう電話をよこしたのは四月も、もう終わりに差し掛かった
頃だった

私はマコに会えるとゆう期待感から胸を高鳴らせた
どうせマコは由恵と一緒に居るだろう…でも、私はマコに会いたく
てどうしようもなくなっていた…

「旅行か…うん…いいよ。」

元子の誘いに私は、少し悩んだそぶりを見せながら返事をして、G
Wの旅行を迎える事にした

その次の日曜日、私は元子と由恵と買い物に来ていた

三人で旅行に着て行く洋服やパジャマなどを見に来ていた

「竜揮…こうゆう服、好きなんだよな…」

「…私も少し、違う雰囲気の服買ってみようかな…」

そう言いながら、楽しそうに買い物をする元子と由恵

私はそんな二人を眺めながら並んである洋服を手取る

不意に流れてきた聞き慣れない着信音

「もしもし?…今?皆で買い物だって言ったじゃん」

そう電話に出て話始めるのは元子

「…ええ?…うん…皆に聞いてみる」

元子はそう言って電話を切ると

「ねえ、これからご飯でも食べに行かない?竜揮も今、三人で居るらしくて…」

私達の方へ来てそう聞いてくる

「行きたい！」

その言葉に真っ先に返事したのは由恵だった

私もその言葉に促される様に

「いいよ」

と返事をした

そしてすぐに買い物が終わらせて外に出ると既に竜揮の車が止まっていた

元子が助手席へと乗り込む

私と由恵は後部座席から出てきたトモとマコに促され車に乗り込む
前回の定位置、私とトモ、後にマコと由恵の順に座った

「マコ、この間はどうだね」

後ろから聞こえてくる由恵の声

私はその言葉を耳にして、胸が張り裂けそうな想いを感じていた

「…美咲ちゃん今日はスカートなんだね？マジ可愛い…」

隣でトモが口を開く。私はその言葉に

「今日は智博君が居ないと思ったから…」

と言って悪戯気に笑って見せた

その言葉を聞いて後ろで笑っているマコ：

私は車に乗ってからずっと見れないでいたマコの顔をちらりと見る以前会った時より少し髪が短くなっていたマコに、多少の距離感を感じた

しかし、やはり私の胸の高鳴りは以前と何も変わらなかった

「でも美咲、今日は本当に可愛いよ」

私を見ながら笑顔で言うマコ

私は胸の高鳴りを抑えられずに、視線を前に戻しながら

「ありがとう」と呟いた

それから私達は和食がメインの居酒屋へと来た

皆、ビールを片手にGWの話で盛り上がっている

「俺はプールとかあるホテルがいい！」

「無茶言うなよ…ホテルを探す身にもなってくれ…」

トモの言葉にため息混じりで答える竜揮

「じゃあさ、温水プールが近くにある所に旅行に行って、次の日皆で行こうよ！」

元子も楽しそうに話始める

「…GWまでなんてダイエット間に合わないよ…」皆の話を聞きながらぼつりと呟く由恵
そんな皆の様子を笑いながら見ているマコ

私は一人、取り残されたような気分になって持っていたビールをグイッと空けた…

それから二時間程飲んで、会計を済ませ私達は店を後にする

「マコー気持ち悪い…」

そう言いながらマコに寄り添う由恵
…相当飲んだみたいだ…

「マコ？俺達、代行で帰るけどどうする？」

「僕は智博と由恵を送らなきゃなんないし…四人でタクシー拾うよ」
竜揮の言葉にそう返したマコは、道端で横になっているトモの肩を抱きタクシーを止めた

助手席にトモを乗せドアを閉める

私は由恵の腕を掴んで後部座席へと乗り込んだ
続けてマコも乗り込む

私、由恵、マコの順で並びタクシーは出発した

「…マコ…」

私はそう呟きながら、マコの膝の上で眠る由恵をちらりと見てから

視線を窓の外へと移した

26 溢れ出す想い

「疲れたー。智博め…今度絶対、飯奢らしてやる…」

そう言いながらトモの自宅から戻り、タクシーに乗り込むマコ

「お疲れ。智博君も随分飲んだみたいだしね」

私はそう言いながらマコを見て苦笑いをする

「次は由恵か…」

マコが私の膝の上で眠っている由恵をちらりと見て苦笑いする
そして

「運転手さん、あそこの信号を右にお願いします」と運転手さんに
由恵の家までの道を説明する

「マコちゃん、由恵の家知ってるんだ？」

私はマコをちらりと見て聞いてみる

「前に送って来た事があるんだ」

マコの言葉に、私は胸が張り裂けそうになる

それを必死で隠しながら

「そっかあ」

と笑う

タクシーが由恵のマンションの前に止まる

由恵を抱えてマコが降りると

「美咲、部屋まで案内して」

と声を掛けてきた

私はタクシーに待ってて貰い外に出ると

「部屋は知らないんだ？」

と悪戯気に聞いてみる

マコは

「当たり前だろ！」

と苦笑いをした

私は由恵の部屋の前まで来ると、由恵のバックから部屋の鍵を取り出し部屋を開ける

由恵をベットに寝かしつけると

「マコちゃんも泊まりたい？」

と悪戯気に聞いてみる

「そんな訳ないだろ！」

少し顔を紅くしながらマコが答える

私はそれを見ながらくすくす笑うと部屋の外へと足を向ける
それに続きマコも外へと出て来た

「でも、美咲は酒強いんだな…」

エレベーターを待ちながらマコが聞いて来た

「本当は弱いよ？今日は男の人も居たから酔えなかっただけ…」

私はそう笑いながら答えると、開いたドアからエレベーターに乗り込む

マコも私の言葉に笑いながら一緒に乗ると

「…さすがだな」

と、小さく呟いた

私はマンションの外へ出ると、待ってて貰ったタクシーへと乗り込む

運転手さんに私のマンションまでの道程を教えると、座席に寄り掛かりため息をつく

「美咲も一人暮らしなの？」

私の方を見ながらマコが聞いてくる

「うん。まあ、私は母親が高校生の頃に再婚したからさ…居づらくて…」

私は苦笑いをしながらマコを見る

「そっかぁ…変な事聞いてごめんな…」

「いいよ。気にしないで」

私はマコの言葉に笑って返事を返す

ふと、窓の外を見ると家の近くまで来ていた

私は久しぶりのマコと二人きりの時間が終わってしまう事に焦りを
感じていた…

ちらりとマコの顔をのぞき見る

マコは前を見たまま何か考え事をしている様子だった

(…マコの気持ちを振り回さないで欲しい…)

由恵の一言が頭を過ぎる

タクシーが私のマンションの前に止まる

…ドクン…

「マコちゃん？少し、酔い覚ましにお茶でも飲んで行かない？」

私は、精一杯の笑顔を作ってマコに聞いてみる

マコが驚いた様子で私の顔を見る

…ドクン…

マコの返事が返ってくる時間がとても長く感じる…

「美咲：言ったろ？僕だって男だぞ？少しは意識しなさい！」

マコが笑いながら私のおでこを突く
：意識なんてとっくにしてるよ：

「マコちゃんも狼になるんだ？」

私は笑いながらタクシーを降りる
緊張からか、涙が溢れそうになる
今マコにこの顔を見られたら：

「玄関まで送るよ…」

マコもそう言いながらタクシーを降りる

「ここでいいよ。ありがとね」

タクシーの前で私はマコにそう言って手を振りマンションへと足を
向けようとした：

：しかし、不意にマコに掴まれた左手がそれを制した

：ドクン：

私はゆっくり振り返りマコを見つめる

マコは自分の行動に少し驚いた様子で

「…いや…気をつけてね…」

と口を開くとタクシーに乗り込んだ

私は走り去って行くタクシーを見ながら

「…何だよそれ…」

と小さく呟いた

27 優柔不断男（前書き）

僕の宝物を御愛読の皆様へ！皆様の応援で、この作品が恋愛ランキングへ入らせて頂く事が出来ました！昨日のアクセス数もラブノベルランキングで20位以内に入れた事にとても感謝しております。そして、これからも応援よろしく願いします！（バックハイ）

27 優柔不断男

「ふう…疲れた…」

帰って来たって誰かが居る訳ではない

でも僕は、今日一日の疲れを、ため息付きの独り言で外に出した

結構、お酒を飲んだせいで口の中はまだまだ酒臭い

ベットに倒れ込みながら今日一日の出来事を思い返す

今日は智博と竜揮と三人で遊びに行っていた

…とは言っても、ゲーセンに行っていただけなのだけれど

そこでGWの話になり、竜揮が元子達が買い物に行っている事を話し出した

そこで智博が

「皆で食事に行こう！」

と言い出し

…結局、食事ではなく居酒屋へと向かったのだ…

一ヶ月以上振りに会った美咲は、初めて見るスカート姿で…正直、僕は見とれていた…

でも…前回、デートの約束を美咲に断られた次の日、由恵からあった電話で

「美咲、風邪ひいたって言ってたけど酷そうなの？」と本当に何気

ない気持ちで聞いてみた
その質問に

「美咲、風邪ひいたの？この前電話した時は全然元気そうだったけど？」

と答えた由恵

…本当に風邪だったのかも知れないが…僕は、美咲に体よく誘いを断られたのじゃないか。とゆう不安から…その後、美咲を誘う事が出来なくなっていた

…美咲からも、あれ以来連絡が来る事が無かった事もあり、僕は美咲に距離を置かれ始めた事に気付いてしまっていた…

…元々、美咲が僕なんかを気に留めるはずもない
そんな事は始めから分かっていたハズなのだが…

(…私、マコちゃん好きだな…)

…以前、美咲が言ってた一言…

それに特別な意味などは無いのは分かっていた…

でも、智博に対してとは違い僕と一緒に居る時、美咲はとても楽しそうに笑っていた

それが本当に嬉しかったんだ

…でも…

デートを断られ以来、美咲は僕に特別な想いを抱いてなどいないと改めて実感させられた…

…思い知らされたのだ…

あれから由恵とは何度か会ってはいた
いつも由恵から誘いの電話をくれている

由恵と一緒に居る時、僕は向けられて来る由恵の想いにいつもドキ
マギしていた

きつと、本当に僕を想ってくれているのだと伝わってきた

：何度も言うが、僕は竜揮や智博の様にモテる人種ではない：

それ故、由恵への対処をどうして良いのか解らないでいた

由恵は可愛いと思うし、僕なんかには勿体ない

：正直、由恵に腕を掴まれ下から覗き込むような目線で見られると

：僕は性欲を抑える自信が失くなる程だった：

：でも、今の気持ちのまま由恵を受け止める事はどうしても出来な
いでいた：

（：私ずっと美咲に嫉妬してるの：）

以前、由恵が言ってた言葉を思い出す

：僕の中で、美咲に惹かれている部分がある内は、由恵をどうして
も受け止められない：

美咲に憧れを抱いていながら由恵を受け入れるのは、とても失礼な
事に思えた

：現に僕は、今日美咲に部屋へと誘われた時、どうにも為らない程
気持ちが高ぶってしまったていた

軽く断ってしまった自分に後悔して、もう一度誘ってくれないかと

考えてしまっていた

…しかも、帰ろうとしている美咲の腕を掴んで、引き止めようともした…

「…はあ…」

僕は大きなため息を吐いて、自己嫌悪に陥った…

…本当に僕は優柔不断な男だ…

…大体、僕なんかが由恵と美咲と…どちらかを選べる様な環境ではないのに…

…少しモテている様な感覚に陥っている事自体が、大きな勘違いなのだ…

…今までの人生を振り返ってみろよ…二股掛けられていたり、高価な物をねだられたり…そんな僕だぞ…？

僕はそんな風に自虐的な事を考えながら、足元に丸まっていた毛布を頭から被った

…しかし、こんなモヤモヤした気持ちのまま眠れるハズもなく…

「ダアーツ！」

そう言いながら布団から跳び起き、テーブルの上のタバコに火を付けた

28 決意（前書き）

〳読者の皆様へ〳申し訳ありません。「第一話プロローグ」を少し変更させて頂きました。愛読して頂いた読者の皆様にはご迷惑をおかけします。ストーリー変更とゆう訳ではありませんが、少し話を広げやすくしました。ご気分を害された読者の方々、本当に申し訳ございません。〳バックハイ〳

28 決意

「…もしもし？マコ？」

私はソファ―に腰を降ろしながらマコへ電話をかける

電話越しに聞こえてくるマコの声が少し眠たそうだ

「…この前、飲み過ぎちゃったから…謝りたかったんだよね…」

皆で飲んだあの日、私は自分がどれ程飲んだのか分からないでいた次の日気が付くと自分の部屋のベットに寝ていた

それを考えると、私の部屋を知っている美咲か元子が運んでくれたのだろうと思っていた

しかし、美咲にマコが運んでくれたのだと聞いて顔から火が出そうな程恥ずかしかった

「いいよ。気にするなよ。僕の方こそ勝手に由恵の部屋に入ってしまったってごめんな？」

マコが優しい声でそう言ってくれる

私はそれに

「そんな事ないよ。ありがとう。」

と答えると次の言葉が見つからなくなってしまった

今日、マコに電話をした理由…それはこの間の事を謝りたい…
そして、GWの旅行を前に聞いておきたい事があったのだ…
ずっと聞くのが怖くてはつきりさせられなかった事…

初めてマコとデートした夜…海辺で交わしたキス…

あのキスにはどんな意味があるのだろうか…

私にとっては甘く幸せな時間だった。

しかし、マコはあの時唇を離すと

「ごめん」

と一言、言ったときり私の顔を見てはくれなかった…

それが怖くて、私は何も言えないまま友達の様子をしている

あれから何度かマコと会う事はあった

しかし、いつも私から誘っていた…

そして美咲の存在が急激に私を不安にさせた

…どうしても旅行を前にマコの気持ちを私に向けさせたかった…

「…マコ？…マコは彼女作る気ないの？」

…私なりにさりげなく聞いたつもりだった

しかし、言葉にしてから寧ろ直球な質問だと気付き後悔する…

……。

「…………ごめん…少し待ってて欲しい…」

マコが搾り出す様に返事をする

(…ごめん…)

私はその一言で胸が張り裂けそうになる…

私の気持ちを全て悟ったマコの台詞…

目から流れ出す涙を、電話越しにマコに気付かれない様に精一杯明るい声を出す

「やだな…ごめんなんて言わないでよ…何も出来なくなっちゃうよ…」

私の言葉にマコは何も答えられないでいる
私はそんな沈黙が怖くて精一杯言葉を探す

「マコ…？マコにとって私は迷惑なのかな？」

「そんな事ないよ！…ただ…中途半端な気持ちのまま…キス…したりしたから…謝りたくて…」

私の言葉に直ぐさま返事をくれたマコとその台詞に私は胸を撫で下

ろす

「僕…由恵が嫌いな訳じゃないんだ…ただ…」

「…友達でいいから…マコを好きで居たいから…待ってる…」

私は続きを聞くのが怖くて精一杯、言葉を重ねた…
そして

「…もう遅いから寝るね？旅行の時にでも返事を聞かせて欲しい…」

と続けると電話を切った

瞳から溢れる涙は止まってはくれない

あの日、唇を重ねた時…気持ちを通じた様な気がして幸福感に浸った自分が惨めになる…

…あの時も観覧車の時も…精一杯の勇気を出して私はマコに寄り添った

そうゆうやり方は卑怯なのかとも思ったけど…マコまで美咲に取られてしまうのは嫌だった…

…世界中の男達が私よりも美咲を選んだとしても…マコには私を選んで欲しかった…

それ程までにマコが欲しかったし…美咲に勝ちたかった…

私は膝を抱えて顔を伏せる。溢れる涙はいつまでも止まってはくれ
なかつた

29 旅行

「すげえ！結構、でかい旅館だな！」

竜揮がホテルを前にはしゃぎ出す

「温泉楽しみー！」

由恵が楽しそうに笑いながら僕の顔を覗き込む
いつもと変わらないその笑顔に僕はホッと胸を撫で下ろす

GW、僕達は温水プールのアミューズメントパークが近くにある温泉街へとやってきた

今日は旅館でゆっくりして、明日は皆でプールに行く予定だ

旅館でチェックインを済ませると僕達は部屋へと案内された
老舗旅館とゆう事もあり、造りは古いが掃除が行き届いておりロビーのテーブルや椅子等も高価そうな物で揃えられている

卓球場やカラオケバーなどもあるらしく、僕等は何処に行こうかと皆で盛り上がりながら部屋へと向かう

部屋は男女別々に二部屋予約しており、竜揮が隣の部屋に入ろうとする元子達に声を掛ける

「荷物おいたら一旦、俺達の部屋に来てよー」

それを聞いて、元子が返事をしながら部屋へと入る

僕等もそれを見ながら部屋へと足に向けた

「…どうする？取りあえず風呂入りに行く？」

部屋に入ると智博が荷物を置きながら聞いてきた
夕食の時間まで三時間以上もある

「まずは卓球が先でしょ！それから風呂行こうぜ！」

智博の言葉に竜揮がニヤリと笑いながら答える
僕はそんな二人を見ながら窓際のソファ―へと腰を下ろす

竜揮と智博は、僕の座っているソファ―の置いてある場所よりも一
段高くなった畳の上の座椅子に腰を下ろした

ここへ向かう車中、由恵は極力明るく僕に話かけて来た
まるで言葉を途切らせるのを恐れるように…

僕はそんな由恵に対し、申し訳ない気持ちでいっぱいだった…
僕はソファ―に深く寄り掛かると大きなため息を一つ吐いた

…調度その時、ドアがガチャツと開いて元子達が入って来た

「お邪魔します！」

元子は部屋に入ってからそう言うと、竜揮の隣へと腰を下ろす
続いて入って来た由恵と美咲は僕の前にあるソファ―に腰を下ろす

：何故か三人共凄くラフな格好へと着替えていた

「：いつの間に着替えたの？」

僕はそう聞きながら三人を見渡す

ロングTシャツにスウェットパンツ姿の元子

Tシャツに短パンで大きめのパーカーを羽織る美咲

そして、膝まで届きそうな大きめのカーディガンに長めのレギンスを履いた由恵

：三人共、いつもとは違う雰囲気でも可愛いらしい

「どうせ卓球しに行くんでしょ？ラクな格好の方が動きやすいし着替えたの！」

元子が笑いながら言う

「浴衣は？卓球は浴衣でやるもんでしょ！」

智博がつまらなそうな表情で聞いている

「汗かいちゃうでしょ？浴衣はお風呂の後だよ」

由恵が笑いながら答える

：確かに：この格好もいいけど浴衣も捨て難い：

僕は少し想像しながら顔を緩ませる

そんな僕の想像を掻き消す様に

「取りあえず卓球場に行こうぜ！」

と竜揮が言う

僕は少し表情を引き締めて皆を見渡す

…しかし…ぶつぶつ独り言を言いながら表情が緩みっぱなしの奴が一人いた…

「やっぱり浴衣で卓球…で…帯が…」
一人でニヤニヤと…気持ち悪い奴だ…

「智博！鼻血出てるぞ！」

僕の言葉に慌てて鼻を押さえる智博…
僕はそんな智博を見て

「…本当に鼻血出してたらびっくりするだろ？」
と笑いながら続けた

「嘘かよっ！ヒデエ！」
僕の言葉に声を上げる智博

そのやり取りを見ながら皆が笑い出す

鼻血など出てはいないのに、まだ鼻を押さえて顔を赤らめる智博…

僕はそんな智博を笑って見ながら席を立つ

すると、美咲が僕の方へと寄って来た

「マコちゃんも、鼻の下すっごい伸びてたよ？」

僕にだけ聞こえるようにそう言うと笑いながら玄関へと足を向けた
：見られてたのか：

僕は美咲の後ろ姿を見ながら、一瞬でも智博と似たような想像をしていた自分を恨んでいた：

30 喪失感

「行け！美咲！」

…パァン！

「やったあ！」

笑顔で僕を見る美咲

「ええ…？美咲ちゃん上手いよ…」

少しふて腐れながらピンポン玉を投げてくる智博

僕等は卓球場へと来ていた

くじ引きで男女ペアを作り、ビリチームは優勝チームに明日の昼ご飯を奢る事になっていた

…ちなみに僕は美咲とペア。只今対戦中の智博は元子と。そしてそれを笑いながら見る竜揮、由恵ペアだ

美咲も元子も、意外に運動神経が良いみたいでどんどんスマッシュを打ってくる

僕は卓球の経験はないが、美咲や元子に負けない位のスマッシュはたやすく打てた

…これで智博も上手かったらいい勝負になるのだが…

「もうー！トモ、足引っ張りすぎー！」

卓球場に響く元子の声…

元子は智博の足の引っ張り具合にホトホト愛想を尽かした様子だった…

それもそのはず…智博は昔から中学校、高校と続けていた剣道以外
はあまり運動が得意な部類ではなかった

元子はかなり奮闘したが、点差はみるみる開いて行く

…そして…

「やったあ！」

美咲のスマッシュが綺麗に智博の脇を擦り抜けると、美咲が声を上げた

僕は両手を胸の前で掲げて掌を目一杯開く
パチンッ

美咲が僕の掌に美咲の掌を合わせると

「やったね！」

と僕に笑いかけた

結局、僕たちチームは智博達に七点も差を着けて勝利する事が出来た

続く竜揮、由恵チームは竜揮が運動神経が良く奮闘したが、由恵が足を引っ張る形で僕たちが勝利した

「明日のご飯はゴチだね!」

美咲が僕に笑いかける

「美咲のおかげだよ!」

僕もそう言いながら美咲に笑いかけた

試合は、竜揮チームと智博チームが接戦を繰り広げている

僕と美咲は脇にある椅子に腰を下ろして試合の行方を眺めていた

「…由恵、可愛いね?」

美咲が由恵を眺めながら口を開く

由恵は跳んで来たピンポン玉にびっくりしてしゃがみ込んでいた

「そうだね。女の子って感じだよね」

僕はそんな由恵を笑いながら見て答えた
そんな僕の言葉に美咲が切な気な表情で

「由恵は女の子として見てるんだね…」

と答えた

いつもとは違う表情に僕はドキリとした

「…？美咲？」

僕はそんな美咲を不思議そうに見詰める

美咲は由恵を見たまま口を開く

「…今ね…凄く女の子らしく為りたい…由恵みたいに…」

それは感情の籠った切ない一言だった…

…僕はその言葉に全てを悟ってしまった

美咲が僕とのデートを断った理由…

僕と距離を置こうとした理由…

…そして…美咲の切な気な表情…

…美咲は恋をしているのだろう…

（…美咲、好きな人出来たの？）

…僕はそう問い掛けようとして言葉が出て来なかった

…美咲自身の口からそれを聞くのが怖かったのかも知れない
僕は男として見られてはいない事は分かっている

だが、智博や竜揮には向けられる事のない笑顔が僕には向けられている

…それが特別な事なのだと思いたかったのだ…
でも、美咲にはもっと特別な存在の男性が居るのだとはっきりと分かってしまった

…そして…由恵と唇を合わせてしまった自分にはそれに嫉妬心すら抱く権利もないのだ…

(…旅行の時に返事を聞かせて…)

あの時に言っていた由恵の言葉が頭を過ぎる

…僕は…僕はどうしたいのか自分でも分からなくなっていた

…でも、今の美咲の表情で気付いてしまったこの喪失感を消す事なんて出来なかった…

由恵への罪悪感。

美咲への喪失感。

どちらも消してしまいたい感情だった…

多分、何も考えずに由恵と付き合う事が、誰も傷付く事なく済む一番の方法なのだろう…

…でも…僕は自分の中から美咲の笑顔を消す事が出来ない…

…僕なんかには由恵は勿体ないのに…それでも美咲の側に居たいと思ってしまう僕は欲張りなのだろうか…

…ましてや美咲は恋をしているのに…

…由恵と付き合う事よりも美咲と友達で居る事を選ぶのか…？

「…マコちゃん？」

ふと覗き込む美咲の顔

気が付くと竜揮チームの勝利が決まった所だった

僕は覗き込む美咲の顔をまともに見る事が出来なくて、智博と話をする振りをして席を立った

31 男同士（前書き）

今回はマコ、智博、竜揮の馴れ合いがメインになっております。多少、汚い表現も交じっておりますので苦手な方はご遠慮下さい。飛ばして読んで頂いても大丈夫な様に書き上げました。

31 男同士

「マコちゃん？明日は何食べる？お寿司？焼肉？」

美咲がクスクスと笑いながら僕に聞いてくる

「…美咲ちゃんになら寿司でも何でも奢るけど…」

智博が悔しそうな顔で答える

「トモ！お前が足引っ張ったんだから二人分奢れよ！」

竜揮が元子を庇うように口を開く

「いいよ…私も下手くそだったし…」

元子が気まずそうに言うが智博は

「…いや…二人分と元子ちゃんの分も払うよ…お詫びに…」

と渋々答える

それに皆で笑いながら竜揮が

「俺と由恵ちゃんは？」

と調子よく答える

「…二人分つてのは、美咲ちゃんと由恵の分だし…あとは元子ちゃんだけ…」

…ちょっと待て…

「智博！僕、勝っただろ？」

僕の言葉をまるっきり無視するかの様に

「…お前らは飯くらい自分で食え！」

と答える智博

…こ…この野郎…

そんな僕の顔を見て、皆声を上げて笑い出す

「…じゃあ、そうゆう事でお風呂でも入りに行こうよ」

笑いながら話をまとめる元子

「っ！？僕の飯は！？」

慌てて声を出す、皆笑いながら卓球場を後にする

…皆…ヒデエ…

「気持ちいいー眺めも最高だし！」

そう声を上げながら露天風呂の岩に捕まり足をバタバタさせる智博

…僕はそんな智博の足を掴み引っ張り上げる

途端に頭が湯舟に沈み、今度は手をバタバタさせている

竜揮がそれを見ながら声を出して笑う

「殺す気かつ！」

僕が手を離すと智博が必死に湯舟から顔を上げて叫んだ

僕はそんな智博を無視して湯舟に浸かる

ドンッ

…突然、何か柔らかい物が顔に当たり途端に僕は湯舟に沈む

慌てて顔を上げるとそこにあったのは…

…汚い…

僕の怒りに満ちた表情を余所に智博が声を上げる

「トモくん必殺、尻ボンバー！」

…ふざけやがって…

そんな僕等の様子を笑いながら見ている竜揮：

バシャン！

僕は竜揮に向かってお湯をかける

大口を開けて笑っていた竜揮は、口の中にお湯が入った様子で、慌てて湯舟の外の排水溝に唾を吐くと直ぐさまお湯で流していた。

そしてすぐに僕等の方へ向き直り

「たっちゃんスプリングー！！」

と両手を広げて回転を始めた。

途端に露天風呂は竜揮の巻き起こした水しぶきで息も出来ない程になる。：夕食前の時間帯だからなのか、僕等の他にお客さんがいないから出来る行為である：

竜揮の水しぶきが少し弱まってくると途端に、今度は智博が背泳ぎのように身体を浮かせて足をバタつかせる。

：これも中々の水しぶき具合で、僕も負けじと竜揮と智博にお湯を掛けまくる。

せっかくの露天風呂は僕等の水しぶきで台なしになっている。

：こいつらに風情も何もあったもんじゃない：

僕はそう思いながらも水掛け遊びを楽しんでいた。

さっきの悶々とした気持ちを掻き消すように。

…ガラッ！

しかし、他のお客さんが来たのを見て途端に水掛け対決は中止となった。

僕等は全身ずぶ濡れになりながら、静かに腰を降ろし端っこの方へと移動するとお互いに目をやる。

「「あはははっ…」」

途端に皆で笑いが込み上げる。「決着は明日プールで着けようぜ！」

竜揮がニヤリと笑いながら答える。

「今度は晩御飯でも賭ける？」

智博も笑いながら続けるのを見て、僕はベシッと智博の頭を叩いて

「…飯の怨みは怖いぞ？」

と言ってやった。

竜揮はそれを見てまた笑い出し、智博は小さく

「…絶対、次は負けないから…」

と呟いた。

その後、僕等は髪を洗うのも身体を洗うのも、三人で大騒ぎだった。

三人で輪の様に並び、お互いの頭を洗いながら泡だらけの髪の毛で、やれウルトラマンだ、やれモヒカンだと勝手に人の髪の毛で遊んでいた。

洗い流すのもこれまた同じく、竜揮が桶のお湯を勢いよく僕等に掛けければ、僕は桶に水を溜めて二人に掛ける。あまりの冷たさに智博はシャワーの冷水を僕に掛けたり…。

…まあ、これも後から来たお客さんが僕等より先に出てしまったから出来た事なのだが…

…そんなこんなで僕達は僕達なりのやり方で温泉を楽しむ事が出来たのだ…

32 大人の恋

露天風呂で散々騒いだ僕等は、そろそろ夕食の時間とゆう事もあり、宴会場へと足を向けていた。

散々お湯を掛け合い、最後に水を掛けられた僕たちの身体は予想以上に温まっていた。

そのせいか、廊下を浴衣で歩くと調度良い涼しさで、それが温泉旅館の気分を満喫させていた。

ふと、前を歩く二人に気が付く。

その片方の女性が、浴衣姿で洗いざらしの髪をピンで纏め、後ろ姿が妙に色気を出している。

「由恵！」

智博の言葉に、その後ろ姿が振り返る。

隣に居た元子は、前髪をピンで上げていつもより幼く見える。

「美咲は？」

僕は二人の方へ歩きながら聞いてみる。

「…多分、ロビーに居ると思うんだけど…マコ、呼んで来て貰ってもいい？」

由恵がそう答えながら、少し視線を逸らした。

……？

…僕、何かしたっけ…？

そんな由恵の様子を不思議そうに見ると、元子が由恵を覗き込みながら口を開く。

「わざわざ迎えに行かなくても直ぐ来るんじゃない？あの人、中学の先生なんでしょ？」

…あの人？

僕は不思議そうに元子の顔を見た。智博も竜揮も同じ様な表情で元子を見ている。

「なんかね、中学の時の先生がたまたま旅行に来てたみたいだよ？」

僕等の視線を感じ取って、元子が続ける。

元子は中学校が別だったので、その先生は知らないらしく由恵と宴会場へと足を向けたらしい。

「…でも…もう夕食始まる時間だし…あの先生に捕まると長いから…」

由恵が元子の方を見ながら怖ず怖ずと答える。

…よっぽど苦手な先生なのか…？

その様子を見ながら僕は

「とりあえず見て来るよ。」

と言って、ロビーの方へと足を向けた。

僕はロビーの前までやって来ると、ソファ―に腰を降ろして話をしている美咲と男性を見付けた。

僕は掛けようとした声を、一瞬飲み込んでから二人を見つめた：

「中学の先生」と言われて想像していた中年の男性とは違い、20代後輩と見られる男性は、爽やかな顔立ちと長い手足。そして醸し出された大人な雰囲気。

そして、その横で静かに笑う美咲は浴衣姿がいつも以上に大人に見えるて：

：どう見ても二人は大人の恋人同士にしか見えなかった：

僕はそんな二人を前に、声を掛ける事も出来ずに立ち尽くすしか出来なくなっていた：

：そして何よりも、美咲がその男性を見上げる仕草、少し伏し目がちに笑う表情：全てが、僕の知らない美咲だった：

智博や竜揮に見せる、一線を引いた笑い方でも、僕に向ける悪戯娘の様な笑い方とも違う：

それは僕の目に、美咲は恋をしている少女の様に映っていた。

：僕の中で、先程の美咲の切な気な表情と、今の美咲の笑い顔が重なり始める：

：美咲の好きな男性が、あの隣に座る男性なのだと気付くのに時間

は掛からなかった：

僕の中で消し去ろうとしていた喪失感が、途端に胸一杯に広がり始める。

僕の足は鉛の様に重く、その場に立ち尽くす他になかった。

すると、その男性が席を立ちながら美咲の頭に手を乗せた。

美咲も少しハニカミながら一緒に席を立つ。

そして視線が緩やかに僕の方へと向けられた。

「…マコちゃん！」

美咲が僕の姿を見付けて声を上げる。

そして男性と少し話をしてから僕の方へと足を向けた。

その後ろで男性が僕に軽く会釈をしたので、僕も男性に頭を下げた。

「迎えに来てくれたの？」

美咲が笑顔で僕を覗き込む。

「…今の人は？」

僕はやっと声を絞り出して美咲に尋ねる。

「中学の時の先生だよ。部活の顧問だったんだ。」

笑顔で楽しそうに答える美咲。

僕は

「…そっか」

と小さく返して、宴会場へと足に向けた。

「…マコちゃん？」

僕の態度に不思議そうに声を掛ける美咲。

僕は立ち止まり、精一杯の笑顔を作り美咲の頭に軽く手を乗せた。

…先程の先生の真似をしてみたのだ…

「…ふ…ふははっ！何かマコちゃん変ー！」

…途端に笑い出す美咲…

僕は先程、美咲が先生に向けていた表情を思い出しながら、停めた足をまた進めだした。

33 笑顔

「乾杯ー!」

…宴会場に戻ると、既に食事の用意が調っており、お腹を空かせた智博や竜揮が子供の様に騒いでいた。

僕と美咲は席に着くと直ぐさまビールを注がれ、全員で乾杯をした。それを一気に飲み干し、テーブルに並ぶ豪華な料理に舌鼓を打つ智博と竜揮。

その様子を美咲はクスクス笑いながら見ている。

そんな美咲をちらりと見てから、視線を料理へと移す。

…先程の光景を見ていなければ、僕も素直に楽しめたのかもしれない…しかし、今の僕にはどうしても先程の美咲の表情が頭から離れない…

「マコ? 元気ないね? どうしたの?」

隣に座っていた由恵が僕の顔を覗き込む。

僕は由恵に、今の気持ちが悟られてしまった気がして少し気まずくなる。

しかし、そんな気持ちを精一杯隠す様に笑顔を作ると

「少しのぼせたみたいで具合が悪いんだ。」

と嘘を付いた。由恵はそれを信じたようで

「大丈夫？」

と心配気な顔を見せた。

僕は由恵の言葉に頷いて料理を口へと運ぶと、視線を由恵から逸らした。

…この話を少しでも早く終わらしたかった為でもあるが…今は誰かと楽しく話なんて出来る気分じゃなかった…

そんな僕とは対象的に、いつもより楽しそうに智博と話す美咲。

僕はちらりと美咲へと視線をやる。

頬が少し紅く染まっている…どうやら少し酔っているようだ…これもいつもと比べると珍しい事だ…

「…美咲…松山センセ元気だった…？」

不意に由恵が美咲に聞いた。

僕はちらりと由恵を見た。少し微笑んでいるが、その目は真剣な瞳。そして直ぐに視線を美咲へと戻す。

美咲は視線を料理に向けたまま

「…うん。あんまり変わってなかったよ。」

と答えて由恵に笑顔を向ける。

その顔は『松山先生』と呼ばれたあの男性に向けていた笑顔と同じものだった。

…美咲はあの男性の話をする時すらも、こんなに幸せそうな顔をするのだ…

僕は広がり始めた胸のモヤモヤを抑える事が出来なくなり始める。それはまるで、体中の血液に毒が侵食するかのように僕を苦しめ始め

る。

…些細なヤキモチなのかもしれない。でも…僕は気付いてしまったのだ。

…そんな些細なヤキモチでも、僕一人など狂わせてしまう程に美咲の存在は大きいのだと…

僕はそんな気持ちを誰かに悟られたくなくて、並んでいる料理に箸をのばす。

しかし、口に運んだ料理は喉を通る事が出来ずに、いつまでも僕の口の中で小さくかみ砕かれていく。

それをビールで無理矢理流し込む。

「む…？先生ってさっき言ってた中学の？美咲ちゃん好きだったの？」

由恵とは反対の隣に座る智博が、向かいに座る美咲の顔を見る。

…おそらく智博は先生があんなに若いとは知らないハズで、深い意味で聞いている訳ではない…

「…うん。」

少しハニカミながら答える美咲から視線が外せなくなる…。

…やっぱり…。

「へー。いいなあ好きだった先生に会えて。俺も陽子先生に会いた

いなあー」

そう懐かしみながら僕の顔を見る智博。

…ベシッ！

僕は無言で智博の頭を叩く。

「何だよ…？」

…そのツツコミの理由が判らずに頬を膨らましながら僕を見る智博…
僕は智博を睨みながら口を開く

「…陽子先生は定年間近で少し耳も遠かっただろ…」

「…でもなんか、ちっちゃくて可愛かったじゃん？…もしかして
美咲ちゃんの先生って若いの？」

僕の言葉に答えながら、『あっ！』と気付いて美咲を見る智博。

反対隣から由恵が

「20代後半位だよ」

と笑う。

それを聞くと

「ええっ？ そうなの？ …いいなあー。俺も美咲ちゃんみたいな生徒
が居るなら中学の先生になりてえー！

…でも…中学じゃ犯罪になっちゃうか…高校の先生だな…」

と一人で妄想し始めた智博の頭を、僕はもう一度叩いた。

また頬を膨らまして僕を見る智博を笑いながら、ちらりと美咲を見る。

下を向いて微笑んでいる様に見えるが、僕には美咲が傷付いている様に見えていた。

(…中学じゃ犯罪…)

智博の軽い一言が、その当時の美咲の想いを呼び戻したのだろう…
それ程本気だったのだろう…

僕は、また胸に広がり始めたモヤモヤを消し去るかの様に、グラスにビールを注ぐと飲み干した。

…もう、苦しくて美咲の顔を見る事も出来ないでいた

34 妄想男（前書き）

今回は、コメディータッチになっております。

34 妄想男

「…美咲…俺、美咲が大人になるまで待ってるから…だから、高校も卒業したら…もう一度会わないか…」

「…先生…私、早く大人になりたい…だから…先生が私を大人にして…」

……バシッッ！！…

「智博！また変な事妄想してただらっ！」

…不意にマコに頭を叩かれて現実世界に戻る。

マコめ…今からが凄い良い展開になって行くのに…

俺の頭の中は今、最大限にフル回転している。

先生と生徒…そして美咲の浴衣姿…由恵の浴衣姿も捨て難いし…元子もいいな…

「マコ！トモがいやらしい顔で元子を見てる！もっと叩けっ！」

…タツが叫ぶ…もう、煩いなあ！

こんなに新鮮なネタが揃ってるんだから妄想位させてくれよ…

大体、美咲の浴衣姿なんて貴重過ぎて中々見れるもんじゃないんだぞ！

しかも俺は一度美咲に振られてるんだ！
…妄想位させてくれよ。

俺はマコとタツを睨み付けると、また美咲の方へと目をやる。

…浴衣姿にピンで纏めた髪、薄めの化粧に紅くなった頬…

…マジ可愛い！！

本当に俺と付き合ってくれないかな…美咲と付き合えたらマジ、我慢しまくるのに…

二人で街を歩く…振り返る男性陣の羨望の眼差しを受けながら、俺は美咲の肩に手を回し引き寄せる…

…バシッッ！！

…またマコに叩かれた…

マコを睨みながらビールを煽る。

…何でマコはこんなに俺の感情を読むのが得意なんだろう。

明らかにマコに好意を抱いてる由恵や美咲には鈍感なくせに…。

…由恵の気持ちは、あの遊園地で分かってる。

…美咲のマコへの気持ちだって、悔しいけど俺との対応に比べれば一目瞭然だ。

それなのに何も判らずに涼しい顔をしているマコ。

本当に、どれ程羨ましい事なのかを一晩かけて力説してやりたい位

だ。

：しかし…マコは昔から何故かモテる男だと思う…。…顔は俺の方が格好いいのに…

本人は気付いてないが、中学時代からマコは『優しい』とひそかに好意を持つ女子が俺に相談を持ち掛けて来ていた。

：まあ俺はそうゆう女子をひそかに丸め込み、付き合い始めるのが得意だったんだけど…それはマコには内緒である…。

そもそもマコは昔から俺やタツとは違って、女子に興味を示さなかった。

好きな女は居たのかも知れないが、そうゆう話はしなかったし…。噂されてたのは、明るくて活発だった森口。二人でよくふざけ合ってた。

マコはどうだったのかは知らないが、森口はマコに貰ったキーホルダーをいつも大事そうに鞆にぶら下げてたっけ。

高校に入ってからは何人か付き合ったりはしてたけど、何故かいつも短い期間で振られてたマコ。

唯一、長く付き合った純子も散々我が儘言っただけで最後は元カレとよりを戻した。

実はマコと純子が付き合ってた頃、純子はよく俺に連絡をよこしていた。

マコは俺やタツとは違い、彼女に対して『好き』だとあまり言わないらしい。

：俺なんかしょっちゅう『結婚しよう』って言ってる程なのに…（勿論、いつでも本気だ。）

だから純子はよく『マコと居ると寂しい』とか『本当に私を好きなのか解らない』とか言っていた。

だからって俺に必要な以上に相談を持ち掛けられて、正直面倒臭かった。大体、女子の『相談』は殆どが寂しいから誰かと話す為の口実でしかない。

美咲にそれを持ち掛けられるならまだしも、親友の彼女にそれをされても面倒なだけなのだ。

そもそも、あんなに我が儘を言って『本当に私を好きなのか解らない』って…どんだけマコの気持ちを確かめたかったんだよ。

それで愛されてる実感が沸かないとか…どれだけ求めるつもりなんだよ。

…と、俺は常々思っていた。だから、マコが純子と別れた時はお祝いでもしてやりたい気分だったが、結果的に裏切られた形になったマコを思うと慰める事しか出来なかった。

なので、俺は基本的にはマコの幸せを望んでいる。

マコにお似合いの彼女が出来るなら、凄く応援したい。

…例えば由恵とか。

…美咲は駄目だ。

何故かとゆくと、それは流石に羨ましいから。

大体、マコは『藤井美咲と付き合う』とゆう事がどれ程の事なのか分かっていない。

マコが、美咲をどれ程の美人なのかを認識した上で、交際を求めない限り俺は由恵の味方だ。

寧ろ、美咲は俺と付き合えばいいのだ！

…バシッッ！！

…痛い…

俺は頭を押さえながらマコを睨む

「無駄な打算を立てようとするな！」

マコも俺を睨みながら口を開いた。

…だから、何で俺の頭の中を読んでんだよ…

…マコのバーカ！！

…バシッッ！！

…痛い…

…俺はマコを睨むと、マコの前に並んでいた鮑を一切れ盗み食いつやっ

35 決別

…カチッ！

ロビーのソファで煙草に火を点ける。

皆はトランプをすると言って部屋へと戻った。

僕は『煙草を買いに行く』と嘘をついて、一人でロビーに来ていた。

何かをしたかった訳でもない。

ただ、一人になりたかった。

色々な事が頭を過ぎり、僕の頭はパンク寸前だった。

「マコー。」

突然、誰かに呼ばれて振り返る。

そこに居たのは由恵。

「遅いから様子見に来たの」

そう言いながら僕の隣に腰を下ろす。

正直、今は由恵と話をする気分じゃなかった僕は

「もう少ししたら行くつもりだったんだ。…皆待ってる？ 行こうか。」

と答えて腰を上げた。

しかし、由恵に腕を掴まれて、上げた腰は再びソファへと沈んだ。

「…少し位大丈夫だよ。それより二人で話したかったから…」

由恵が僕から視線を外して答える。

僕も視線を膝へ落とし、由恵の話に耳を傾ける。

（…旅行の時に返事を聞かせてね…）

以前、由恵に言われた言葉が頭を過ぎる。

きっと、その話をされるのだろう…

「マコ…あのね、マコは好きな人とかいるの？」

由恵はそう切り出してきた。僕は、何と答えればいいのか解らずに由恵を見詰める。

「美咲は…多分、松山先生を引きずってるよ…」

美咲があんなに誰かに恋してるのを見るのは松山先生だけだもん…」

由恵は僕の揺れ動く頭の中を読み取る様に答える。だけどその言葉は逆に、僕の気持ちを荒立たせた。

「…それ、どうゆう意味？」

…思ったより冷たい声で答えてしまう。

由恵は僕をちらりと見るとまた俯く。

「…何となく…マコ、松山先生の事気にしてるんじゃないかって…」
その的確な読みに、僕はまた苛立つ。

「気にしてる訳ないよ。」

由恵にあたるのは筋違いだと分かっていても、傷口に塩を塗られる様な由恵の問いにどうしても冷たく答えてしまう。

「…ごめん…ただ私、本当にマコが好きだから…」

俯きながら辛そうに答える由恵。

僕は、冷たい態度をとってしまった事に罪悪感を感じながらも、由恵と視線を合わせる事が出来ないうでいた。

「…マコ…私じゃダメ？美咲よりもマコを温めてあげるよ？」

僕の掌に由恵の掌が重なる。そのまま由恵の指先が絡み付く。

…ドクン…

僕の胸が高鳴り始める。

あんなに冷たい言葉を投げ掛けたのに、それでも僕を想ってくれる由恵。

それが僕の胸の中に染み込んでいく。

…でも…

「…ごめん。」

僕はそう言い残して席を立つ。

僕の掌に絡み付いていた由恵の掌が行き場を無くして、由恵の膝の上で握り締められた。

それを横目で見て、僕は歩き始める。

：何度、由恵の温かさに流されそうになっただろう。

でもそれは、いつも由恵を傷付ける結果に終わっているのだ。

気持ちの奥の部分で求めているのは由恵ではないのだから…。

それはとても無謀な感情だと分かっている。

叶う事のない想いなのだと判ってはいても、僕自身蹴りを付けなければ先には進めないのだ…。

「：マコっ！」

：ギュッ！！

不意に腕を掴まれた感触に振り返ろうとした。

しかし、そのまま後ろから抱きしめられる。

「：お願い：行かないで。：少しでいい：傷付いても構わないから：私を見て：」

背中から聞こえる由恵の涙混じりの声。

それが余りにも切なくて、僕はどうすればいいのか解らないまま立ち止まる。

「…マコ…お願い…」

尚も続けられる懇願混じりの由恵の声。

僕は由恵の腕を少し緩めて身体を反転させる。

少し、由恵を落ち着かせようと背中に手を回そうとした…

…しかし、僕はその先の人影に視線が釘付けになる。

…美咲…。

美咲は少し驚いた様子でこちらを見ていたが、僕と視線が合わさると少し微笑んだ。

そのまま口元に人差し指を持っていくと

「しーっ」

と口を動かした。そのまま由恵に気付かれないように踵を返しその場を立ち去った。

僕はそんな美咲の後ろ姿から目が離せなくなる。

美咲にとってはどうでもいい場面なのかも知れない。…でも僕にとっては見られたくない場面だった…

…本当は由恵を抱きしめそうになっていた自分の掌に視線を落とす。そして、そのまま由恵の背中をぽんぽんと叩くと

「皆待ってるから部屋に戻ろう」

と由恵の顔を覗き込んだ。

しかし、由恵は顔を埋めたまま首を横に振ると僕をギュッと抱きしめた。

僕はそんな由恵の腕を身体から外し、由恵の頭を右手で包むと

「…由恵、本当にゴメン。」

とだけ言っただけでその場を離れた。

廊下を歩きながら、由恵の体温がまだ身体に残っている気がして、胸が高鳴るのを精一杯抑える。

本当はその足で、美咲の元へ行きたかったが…

それは流石に由恵に対して思いやりがなさすぎるし、美咲に会ったからと言って何を話せば良いのかも解らない。

そもそも美咲は気にも留めてないだろう…。

そう思うとやり切れない気持ちで一杯になった。

36 夜空の涙

…涙が止まらない。

拭っても拭っても溢れ出す涙は滑稽な自分を余計惨めにさせた…。

(…マコ…行かないで…)

懇願する様にマコにしがみつく由恵の姿。

それを見付けてしまった私の足は石の様に動かなくなる。

由恵は余りにも切なく、余りにもマコを求めている。

そんな由恵を優しく抱きしめようとするマコ…。

その一瞬の表情が余りにも優しく、私の胸をきつく締め上げた。

マコが私に気付いた時、本当はその場から逃げ出したい程の悲しみが押し寄せた。

…でも、ああいう場面での私は強いな…

…つくづくそう思う。

もう、由恵の様に素直に感情を表に出す事は出来ない。

傷付いても、泣きたくても、笑顔を作れてしまう。

随分、可愛いげのない女に育ってしまったもんだ。

少し、自虐的な笑いを浮かべて空を見上げる。

綺麗な星空が一面に広がる。

…流星に外はまだ寒いな。座っているベンチで足をぶらつかせて、背もたれに身体を預ける。

あの時、部屋へは戻れずに旅館の中庭へと足を向けた。

そのままこのベンチに座り込み、泣き続けていた。

―今日、女三人でお風呂に入った時―

「由恵とマコってどうなってんの？」

元子が由恵に詰め寄った。

私は、少し興味がなさそうに由恵に目をやる。

由恵は私と元子に視線を向けると、少し恥ずかしそうに俯いて口を開く。

「…どうもなっていないよ…キスしかしてないし…」

「ええっ？キスしたの？」

由恵の言葉に驚いて問い質す元子。

それに小さく頷く由恵…。

―キス…したんだ…―

由恵の言葉に体中の血液が凍りそうな感覚になる。

お湯に浸かっているのに、体中が凍えてしまうような感覚…。

溢れ出しそうな涙を精一杯堪えて、お湯で顔を洗う。

「…じゃあさ、付き合うのも時間の問題じゃん！」

楽しそうに話を続ける元子の声が、私の胸に突き刺さる。

私はそれを遮る様に

「…ごめん。のぼせそう…先に上がるね？」

と精一杯の笑顔を作ってお風呂を上がった。

…限界だった…

由恵の幸せそうな顔も、元子の楽しそうな顔も見れなくなっていた。
マコと由恵の幸せと一緒に喜べない私は冷たいのかもしれない。

…でも…

—冷たい風が身体を冷やしてゆく—

夜空を見上げ、溢れる涙が頬を伝う。

—思えば、私が泣いているとき、いつも隣に由恵がいたっけ—

由恵の温かい笑顔が私の心も暖めてくれた。

それだけで『私は一人じゃない』って励まされた。

大好きだった由恵の掌。

…でも今は、その掌がマコへと向けられる…

そう思うだけでこんなにも胸が締め付けられる…

「…藤井？」

不意に呼ばれた名前に驚きながら視線を向ける。

「…先生…。」

そこに居たのは松山先生…

「彼氏と喧嘩でもしたか？」

少し笑いながら隣のベンチに腰を下ろす先生。

「…彼氏じゃないですよ…先生は奥さんほっといて大丈夫なんですか？」

少し嫌味っぽく聞いてみる。

「風呂入りに行ったからさ。散歩しに来たんだ。」

そう言って空を仰いだ先生の笑顔はとても幸せそうだった。

私も先生の真似をして夜空に視線を向ける。

「…で、藤井は何かあったのか？こんな所で一人で泣いて…」

先生が微笑みながら私の方へ視線を移した。

私は空を眺めながら静かに口を開く。

「…告白…出来なかったんです…。…なんか、由恵も彼が好きみたいで…。彼も由恵が好きみたい…。」

「そうか。藤井は平田と仲が良いもんな。」

私の台詞に先生が静かに答える。

「…でも、やっぱり凄いい好きで…。ここで一人で諦める方法考えてたんです。」

先生はただ、静かに私の話を聞いてくれていた。

それが凄く落ち着いて、私は次々に言葉が溢れ出す。

「…何で恋なんかしちゃうんだろう。一人で生きれる位に強くなりたい…。」

…そう言って、また涙が溢れ始めた事に気が付いた。ふと、目元に温かさを感じた。

先生の人差し指が私の目元の涙を拭ってくれていた。

それが凄く優しく、また涙が止まらなくなる。

私は静かに俯いて、感情のままに涙を流した。

「…藤井？俺はあの時の藤井の告白、嬉しかったぞ？」

先生が私の頭に掌を乗せて優しく言った。

「藤井の気持ちに答える事は出来なかったけど…でも、嬉しかった。」

先生の言葉の一つ一つが私の心を溶かし始める。

「…だから、彼にも気持ちを伝えてみたらどうだ？ 決して無駄じゃないと思うぞ？」

先生の優しい声。私はあの頃の気持ちを思い出す。

あの時の涙も勇気も無駄なんかじゃなかったのだと。

―冷たい風が身体を冷やしていく―

でも、先生の温かさが私の心も暖めてくれる。

―不思議な感覚―

さっきまでの寂しさも、冷たさも全て拭ってくれるような…。

私は顔を上げて先生を見詰める。

そのままそっと先生の肩に頭を乗せた。

「…先生ごめん。少しだけ…。」

私の言葉に返事をするように、そっと先生の右手が私の頭を抱き寄せてくれた。

37 涙の後（前書き）

明けましておめでとうございます。ようやく更新します。皆様の応援のおかげでランキング20位に入らせて頂けた事に感謝しております。今回、またも男性陣の馴れ合いがメインです。苦手な方はご遠慮下さい。

37 涙の後

…ドンっ！…

「ぐえっ！」

…僕の目覚めは突然の腹の重みから始まった。
顔を上げるとそこにいたのは頬を膨らませ、僕を睨み付ける智博。

「マコー起きろよ！朝飯食いに行こうぜ！」

「朝飯…？…食いたくない…」

智博の誘いを断りながら布団に潜り込む僕。

…が、智博が僕の布団を剥ぎ取ると、僕に寝技をかけてきた。

「いてて…やめろよ！僕、寝起きだろ？」

「そんな事知らん！大体昨日は、マコのせいで由恵も美咲もどこか
行っちゃったし、タツと元子も二人で出掛けるし…！」

俺は一人でテレビ見てたんだからなっ！朝飯位、付き合えっ！」

寝技を掛けながら耳元で騒ぐ智博。…煩い…

大体、昨日僕が部屋に戻って来た時の惨劇は智博しか犯人は考えられない…

僕は昨日のいざこざで、最低な気分部屋へと戻って来た。
すると…

「アダルトチャンネル付けっぱなしで、ティッシュを散らかしてただけだろっ！」

僕の叫びに智博は一瞬躊躇ったが

「マコに分かるかー！皆、女とイチャイチャしてんのに一人で部屋でAV見る気持ちがあっ！マコにその覚悟はアルノカー！！」

と、直ぐに技を更に締め出した。

「そんな覚悟いらん！智博こそ、部屋に戻って散らかっているティッシュを拾える覚悟は有るのかよっ！」

「俺は拾わんっ！」

…ゴスッ…！

「「いてえー！！！」」

「お前らうるせえよ！」

突然の頭の痛みに顔を上げる。そこに居たのは、寝起きで機嫌の悪そうな竜揮。

智博も頭を押さえながら竜揮を睨んでいる。

「…マコ…昨日、タツはずっと元子ちゃんとイチャイチャしてたんだ…」

「…うん。それで、可哀相な智博を殴るのは酷いな。」

僕は智博と目を合わせると、目で合図を送る。智博もそれに頷き、僕等は同時に竜揮を見る。

「「いけー!!」」

智博と声を合わせて叫ぶと、智博は竜揮の両腕を押さえ込み身動きを取れなくする。

それを僕は笑いながら一瞥すると、一気に竜揮に襲い掛かる。

「わははっ!!…ギブギブ!!…ははっ」

くすぐられて、悶えながら懇願する竜揮。

…しかし、僕はそんなに甘くはないっ!!

「…マジひでえ。トモにやられるならまだしも、マコだって由恵ちゃんといチャついてたんだろ？」

あれから一通り竜揮の仕返しを済ませると、僕等は朝食が準備されている部屋へと向かう。

「…イチャついてた訳じゃないよ。」

竜揮に昨日の話を振り返されたくなくて、少し素っ気なく答える。

「嘘付かなくてもいいよ！美咲ちゃんだって昨日、例の先生といい雰囲気だったみたいだし。」

…えっ…？

驚いて竜揮を見る僕と智博。

竜揮はそんな僕等を一瞥すると

「昨日さ、元子と中庭に散歩しに行ったんだよ。そしたら先客が居てさ。…よく見たら美咲ちゃんだった。」

元子が『昨日美咲が話してた先生だよ』って言ってたし！」

…ズキン…

僕の胸の鼓動が上がり始める。

本当はどこかで少し、昨日の事で美咲を傷付けたのではないかと罪悪感を抱いていた自分がいた。

…でも…実際は、美咲にとっては僕と由恵の事なんてどうでもいい事で…

竜揮の話はそれを痛感させた。

「…そんなに落ち込むなよ…トモ…。残念だけど、トモは美咲にこれっぽっちも意識されてないよ…。」

智博の肩を抱きながら智博を励ます竜揮。

…でも…顔は必死で笑いを堪えている…

「…いやー。でも、その先生ってさイケメンなんだよ。金も持って
そうだし、美咲とお似合いだし。」

…改めてトモじゃ無理だなんて思ったよ!」

…バシッ!!

「痛いっ! 何すんだよマコっ!」

竜揮が大袈裟に頭を抱えながら僕を睨む。

「竜揮は慰めてんのか面白がってるのか分かんねーのっ!」

僕は、竜揮を睨み返してそう言うところりと智博を見た。

…竜揮にここまで言われてるのに気にも留めず一人ニヤニヤしてい
る智博…。

…またか…

どうせろくでもない妄想してるんだろ…。

僕はそんな智博を無視して見えてきた朝食場所の襖を開ける。

「おはよー!」

真っ先に飛び込んで来た声は元子だった。

隣では美咲が笑っている。

…由恵の姿がない事に僕は少し胸を撫で下ろした。

正直、まだ由恵の顔を正面から見る事は出来ない。

…そして、そんな僕とは対象的な美咲の笑顔…。

あの後、美咲と先生がどんな時間を過ごしたのかは解らない…。

でも、それを考えると僕の心は張り裂けるように痛みだす。

だから僕は出来るだけ美咲の顔を見ないように食事を始めた。

38 失意の中の光

…起きたくない…

眠い訳じゃないけど、マコの顔も美咲の顔も見たくない…。

何でここが温泉旅館なんだろう。

嫌でも二人の顔を見ないといけない。

私は、美咲と元子が朝食へと向かい一人になった部屋で布団に潜り込んでいた。

…結局、昨日はほとんど眠れなかった…

『…ごめん』

昨日のマコの台詞が何度も頭を過ぎる。

その度に溢れ出す涙は、自分がマコに振られたのだと痛感せざるを選なかった。

…何で…何で皆、美咲なの？

私と美咲を初めて対等に見てくれた男性…

…でも、結局マコは美咲を選んだ…

…また涙が溢れ始める…

…もうすぐ皆が帰って来てしまう…。

…美咲に、私がマコに振られた事を知られたくない…

私は慌てて布団から起きると、着替えとタオルを持ってお風呂へと足を向けた。

「…ふう…気持ち良かった…」

ゆっくりとお風呂に浸かり、鏡の前に立つ。
どうやら目の腫れも落ち着いたみたいだ。

…良かった。

髪を乾かして、廊下へと足を向ける。
朝食の時間帯とゆう事もあり、ほとんど人は居ない。
この静けさが私の心を落ち着かせた。

「…平田？」

突然、呼ばれた自分の名前に驚きながら振り返る。

「先生！…先生もお風呂？」

そこに立っていた松山先生の姿に自然と笑顔が零れる。

私は先生が好きだ。

もちろん美咲の様に『男として』ではなく。

先生は元々、皆から好かれて居たし、私もその中の一人だ。

「今の時間だと貸し切りみたいなものだし。嫁は寝てるしさ。」

先生が少し笑いながら答える。

私はその言葉に少し驚きながら先生を見る。

「先生結婚したの？いつの間に！？」

「一年前にね。昨日はちょうど記念日だったんだ。」

私の問い掛けに先生は少しはにかみながら答える。

…結婚したんだ…

「美咲は？知ってるの？」

先生は続けて質問をする私の頭をポンと叩くと

「昨日言ったよ。…平田、風呂上がりで喉渴かないか？ジュースでも奢るよ。」

と言ってロビーの方へと足を向けた。

私はそんな先生の後を追いつける様に歩きながら

「先生？美咲何て言ってた？がっかりしてた？」

と、またも質問を繰り返す。

先生は少し笑顔で私を見ると、自販機の前で止まりポケットから財布を出す仕種をした。

「平田、何飲む？」

先生の質問返しに、私は『お茶』と答えながらボタンを押す。
先生は自販機から私のお茶と先生のコーラを取り出すと

「そんなに藤井が気になるのか？平田は彼氏と仲良くしてるんだろ？」

と、取り出したお茶を私のほっぺにくつつけながら答えた。

「彼氏？…どうゆう意味？」

先生の質問の意味が分からずに、私は先生の顔を見つめた。

先生もそんな私を不思議そうに見ながらロビーのソファへと足を向ける。

「昨日、藤井が言ってたぞ？平田は彼氏と仲が良いって。」

…美咲が？

尚も不思議そうに見る私を見ながら先生はソファに腰を降ろすと

「昨日、ロビーに藤井を迎えに来たのは平田の彼氏じゃないのか？」

ロビーに美咲を…？

…マコ…？

…どうゆう意味だろ…？

美咲は私とマコが付き合ってるって勘違いしてるの？

昨日、お風呂であんな意地悪言ったから…？

私は駆け巡る疑問を抑えながら、先生の隣に腰を降ろすと

「美咲、何て言ってた？ヤキモチとか…その…彼が好きとか…」

恐る恐る先生に聞いてみる。

先生は少し笑いながら私をみると

「余計な事は考えないで、平田は彼氏と仲良くしてなさい！」

と、またも私の頭をポンと叩く。

本当に先生は昔からこの仕草が癖だよね…。

でも、いつもそれが妙に落ち着く。

私は先生に笑顔を返す。

先生はそれを見ると少しホッとした様な表情をした。

「…とにかく、悔いの残らない恋愛をしろよ？」

先生はそう言ってコーラを一口飲んだ。

私は先生に

「そのつもりです。」

と笑顔で答えて席を立った。

39 穏やかな空間

朝食を済ませ、部屋に戻り荷物をまとめる僕等。

僕の頭の中は美咲でいっぱいだった…。

何故か、今日の美咲は楽しそうに見える。

竜揮に昨日の美咲の事を聞いたせいもあり、益々美咲の中に僕は居ないと痛感させられた。

僕の胸のモヤモヤは広がるばかりで、寂しさと悔しさも次第に広がっていった。

…バシッ!!

「いてっ!!」

突然、誰かに頭を叩かれて僕は顔を上げた。
そこに居たのは智博。

「マコ、変な妄想してないで行くぞっ!」

…変な妄想って…それは自分だろ…

僕は智博を少し睨んで、散らかっていた荷物を慌ててまとめると、先に部屋を出ようとしている竜揮と智博の後を追った。

「あー温泉よかったなあ! また来ようね!」

楽しそうに、そう竜揮に声を掛ける元子。

竜揮はそんな元子を優しく見ながら、見えてきた車にセンサーの鍵

をかざす。

『ピピッ』とゆう電子音を確認してからトランクを開け、皆の荷物を詰め込む竜揮。

僕もそれを手伝いながらちらりと由恵へと視線を移した。

しかし、由恵も僕を見ていたのか目が合ってしまった。

僕は少し恥ずかしくなり、慌てて視線をずらした。

「オッケー！皆、車に乗って。」

竜揮がトランクを閉めながらそう言うのと、いつもの順番通りに由恵が最初に乗る込む。

僕も慌てて次に続こうとしたが、智博が車に乗り込むのを見て足を止めた。

…？

僕は、それに続きいつもとは違う席へと腰を下ろした。

美咲が僕の隣に座りドアを閉めると車は走り出した。

「由恵？お腹減ってないの？」

後で智博が由恵に聞いている。

「うん。プール行くのにお腹でちゃうし、調度いいや。」

そう言って由恵の笑い声が聞こえた。

でも僕は後ろを振り向く事が出来ずに、目を閉じて窓に頭を寄り掛からせていた。

「マコちゃん、疲れてるみたいだね。」

隣から聞こえた美咲の声に少し目を開け

「智博が酷い起こし方するから、ゆっくり寝れなかったんだ。」

と答えた。美咲はそれを聞くとクスクスと笑い

「エッチなテレビでも見てたんじゃないの？」

と僕の顔を覗き込む。

…その質問は…

僕は少し笑いながら

「僕は見えないよ」

と答えたと同時に後ろから首を締められた。

…く…苦しい…

「誰か見てたみたいない方するなよっ！」

後ろで叫びだす智博。

…わ…わかったから…

…く…苦しい…

僕のジェスチャーが分かったのか、ようやく手を離れた智博。

「…ゴホッゴホッ…！」

僕は振り返り智博を睨み付ける。
智博も負けじと僕を睨み付ける。

「…アハハっ！」

その様子を見て笑い出したのは

…由恵。

「トモ凶星だったんだあ！」

そう言いながらまだ笑いの止まらない様子の由恵。
美咲もそれにつられて笑い出す。

それを見つめる間に顔が紅くなり始める智博。
その様子にも僕も笑いが堪えられなくなる。

「…マコ！笑うな！由恵も凶星なんかじゃないからなっ！アダルト
チャンネルなんて見るかっ！」

…ムキになって否定しはじめる智博。

「「アハハっ！」」

それを見て僕等は大声で笑った。
どう見ても凶星意外の何者でもないじゃないか…。

「マコー！マコが変な言い方するからだーっ！」

「…変な言い方される行為をする自分が悪い！」

智博が僕の肩を掴みながら騒ぐ。

僕は智博に激しく揺さぶられながら必死で答えた。

「だからしてないだろっ！」

僕の言葉を必死で否定する智博。

それを皆が笑いながら、車は室内プールのアミューズメントパークへと入っていった。

40 赤い水着

「…ト…トモっ！正気か？何だよその水着はっ！」

更衣室に竜揮の叫びが響き渡る。

僕は何事かと二人の方へと目を向ける。

…っっ！智博…

智博は真っ赤なビキニパンツを履いて少し照れ笑いを浮かべている…

「へへっ！超カッコイイだろ！」

そう自慢げに答える智博。

…僕は開いた口を閉じるのを忘れて智博を見つめる。

「…マコ…何とか言ってやれよ…俺もトモがここまでアホだと思わなかった…」

竜揮の言葉に僕は恐る恐る言葉を選んだ。

「…智博。その水着は智博には似合わないよ…。竜揮が履くならある意味アリかもだけど…」

「何で俺ならアリなんだよっ！俺でも無しだろっ！」

僕の言葉に竜揮が驚いてまた叫ぶ。

「竜揮は似合うよ。背も高いし。」

「…そうかな…？まあ俺は何でも着こなすしな…」

僕の言葉に少し気をよくした竜揮は少し照れ笑いを浮かべた。それとは対象的に少し頬を膨らまして僕たちを見つめる智博。

「…これ…そんなにヤバイかな…？」

智博の問いに僕と竜揮は大きく頷いた。

水着に着替えて、女性陣を待つ僕等。

すると女子更衣室の方から三人が歩いて来た。

遠目に見ても解る程に三人共とても可愛い！

花柄でブルーのビキニを着ている元子。

ピンクで胸元に大きなリボンの付いたビキニの由恵
そして黒のセクシーなビキニは美咲だ。

三人の姿に思わず声を出して喜ぶ智博と竜揮。

…それとは対象的に女性陣から上がった声は…

…悲鳴だった…

…元子が慌てて走ってくる。

「竜揮っ！何その水着！？なんかヤダよー！」

竜揮の姿を見て驚いた様子だ…。

…それもそうだ…

僕に適当に誉められた竜揮は、その気になって智博と水着を交換したのだから…

「元子ー。似合うだろ？ トモがあまりにも着こなせてないから交換してあげたんだよ！」

そう元子に笑顔を向ける竜揮…。

…僕は笑いを堪えるのに精一杯だった…

「…竜揮くん、あれだね？ スイミングスクールの先生みたいでカッコイイよ？」

後から歩いて来た美咲が少し含み笑いをしながら竜揮に言った。
由恵は隣で笑いを堪えている。

「…ま…マジで？ 美咲ちゃんにカッコイイって言って貰えるとは思わなかったよ！…超うれしい…」

そう答えながら本当に嬉しそうな顔を見せる竜揮。

その台詞に笑いが堪えられなくなったのは僕と元子だった。

「ちょっと竜揮ー！ 美咲の台詞は誉めてないし、それを本気にしないでよー！」

元子の言葉に皆、途端に笑い出した。

そこで笑えないのは竜揮本人と、お気に入りの水着を取られた智博

だった…

「いいんだよー元子になんか分かって貰えなくても！分かってくれるだけでさっ！」

少し意地悪気に答える竜揮。

「…俺の水着なのに…」

ずっと一人でいじける智博。

…こいつらアホだ…

「…智博くんはその水着の方が似合ってるよ。」

美咲の一言に途端に機嫌を直す竜揮と智博。

「ほらっ！俺の水着だぞ？交換して良かったろ？トモ？」

「美咲ちゃんがそう言ってくれるなら！」

…こいつらやっぱりアホだ…

僕は二人の様子を無視してプールへと足を向ける。
それに皆も着いて来た。

「マコちんっ！」

急に呼ばれた名前に振り向くと、美咲が僕の方へと駆け寄って来て

いた。

僕は歩く速度を少し緩めて美咲の顔を見る。

「本当はね、あの水着、マコちゃんが一番似合うと思うよ?」

僕の顔を覗き込みながら悪戯っぽくそう言った美咲の顔が、凄く可愛い思いながらも

「僕があれを着たらお笑い芸人だろ?」

と美咲のおでこを軽く叩いた。

美咲はニヤリと笑いながら、少し小走りで前に出ると

「だからだよ!」

と一瞬振り返りながら言って逃げ出した。

…あの娘めっ…!

僕は直ぐさま美咲を追い掛け捕まえると脇の下に美咲の頭を抱え込み、軽く首を締める振りをした。

「キャハハハッ!」

下から聞こえてくる美咲の声。そして美咲が逃げようと、僕の腰に回した腕の感触が僕の胸を高鳴らせた。

41 滑り台

「ギャー！」

…ドボンっ！

智博の叫び声がここまで聞こえる。

どうやら智博はジェットコースターだけでなく、大きな滑り台も苦手な様子だ。

僕は美咲と落ちてくる智博を見守っていた。

こうゆうアトラクションが大好きな僕と美咲は一番に滑り降り、下で皆を見上げていた。

「…はあはあ…もう駄目…」

智博がビシヨ濡れになりながらプールから上がって来た。

僕等はそれを笑いながら見ていた。

「…キャー！」

同時に聞こえたのは由恵の叫び声。

由恵もやはり苦手な様だ。

「アハハっ！由恵凄い怖がってる！」

それを見ながら楽しそうにはしゃぐ美咲。

僕はそんな美咲に見とれてしまった事に気付き、慌てて視線を逸らす。

…が…

調度、由恵が上がって来るところで、僕の視線は由恵の胸の谷間に釘付けになった…。

「もうーメイク落ちちゃうよ…」

由恵が顔に掛かった水を手で拭きながら困った表情をしていた。

「メイクなんて気にしたら遊べないよ？次は流れるプールだからね！」

美咲が由恵にそう言ったのと同時にプールからは元子が上がって来ようとしていた。

元子はプールサイドに立ち上がると振り返り、竜揮の方を見ている。

それに釣られて僕たちも竜揮へと目を向ける。

…バシヤンツ

大きな水しぶきと共に滑り落ちて来た竜揮は、水面から顔を上げ、顔を両手で拭うと楽しそうな表情を見せてこちらへ向かって来た。

「すげえ！超楽しい！」

そう言ってプールから上がろうとしたが…

「竜揮っ！」

慌てて元子が竜揮の前に立ちはだかる。

僕等は何が起こったのか解らないまま二人の様子を見ていた。

元子に何かを言われ慌ててプールの中へ身体を戻す竜揮。

…竜揮は顔を俯けプールの中で何かをしている。それを見ながら元子は笑いが止まらない様子だ。

「何してんの？」

智博が竜揮の方へと向かおうとしたが

「何でもねーよ！」

と改めてプールから上がって来た竜揮。

しかし、顔は真っ赤で少し恥ずかしそうにしている。

何が起きたのか気になり、皆が元子へと視線を移す。

元子は皆からの視線に耐えられなくなったようで、竜揮に気を使いながら口を開いた。

「…竜揮がさ、あんなちっちゃい水着はくから…滑り落ちた拍子に少しズレててさ…」

笑いを堪えた様子で元子が答える。

…ズレてた…？

…どこまで…？

…見えたの…？

僕は少し想像して笑いが止められなくなる。
元子もつられて笑いだす。

美咲と由恵は少し頬を紅くして気まずそうな竜揮の方を見た。

…智博は…

「タツー！」

そう、少し怒った様に竜揮の方へと行くと
グイッと竜揮の首に腕を絡ませ、引きずる様に竜揮をこっちに連れて来た。

そして僕と竜揮にだけ聞こえる位の声で

「タツ、元子ちゃんとどこまで進んでる訳!？」

と竜揮に聞いた。

…確かに。先程の元子の様子。いくら彼氏とはいえ笑い飛ばすとは…

…相当、竜揮のを見慣れているハズだ…

僕も少し興味が湧き、竜揮の方へと目を向ける。

「…どこまでって…トモー何、中学生みたいな事聞いてんだよ?」

竜揮がクスクスと笑いながら智博を見た。

…確かに…高校も卒業した健全な男女が付き合っていて何もない方が逆に可笑しい。

…しかし智博は納得するハズもなかった…

「何だよそれっ！？タツばかりずるいしっ！俺なんて何ヶ月寂しい日々を送ってると思ってるんだよ！」

と、竜揮の首に巻き付けていた腕を締め上げる。

「知らねーよ！トモだって彼女作ればいいだろ！」

それに竜揮が反発しながら小声で叫ぶ。

僕は、『やれやれ…』と踵を返して美咲達の方へと向かう。

「四人で先行こう！あの阿呆二人は放置して。」

僕は皆の顔を見ながら言った。

それに元子も頷いて、仲良く四人で歩き出す。

「ちよっ…待ってよっ！」

竜揮が気付いて追い掛けて来る。

「…皆無視して。」

僕がボソッと呟くと、皆頷き足を早める。

「マコ！ずるいっ！ハーレムっ！」

後から智博の声も聞こえたが、皆当たり前の様に振り返らずに尚も足を早めた。

42告白

「次は？何のプール行く？」

「流れるプールは？」

智博の問い掛けに美咲が楽しそうに答える。

僕たちは少し歩きながら、色々なプールを眺めていた。

「元子！あれ楽しそうだよっ！」

竜揮が元子呼びながら指を指した先は…

大きな滑り台を二人乗りのゴムボートが滑り落ちて来るアトラクション。

「嫌だよ…竜揮の水着がまた脱げるじゃん！」

元子が竜揮にそう言うのと竜揮は少し残念そうに頷いた。

智博と由恵もそれに合わせて『もう滑り台は勘弁』と答えた。

…僕と美咲はとゆうと…

その滑り台にくぎづけになっていた。

「ねえ、由恵お願い！一緒に行こう？」

「なあ、智博も滑り台やろうよ！」

お互いに由恵と智博を誘うが二人共頷かない…。

それを見ていた元子が

「美咲とマコちゃん二人で行って来たら？」

と聞いてきた。僕は驚いて思わず美咲を見た。

美咲は目を輝かせて僕を見ていた。

…ちょっと待て…

…二人で…？

…水着で…？

…あの密着度の高いゴムボートに…？

…無理無理無理無理っ！

僕は慌てて答えようとしたが…

「行こう！」

美咲が僕の手を引き答えた。

…その笑顔が可愛くて…

…僕は結局、断る事が出来なかった…

滑り台は結構人気のアトラクションで長蛇の列が出来ていた。
おそらく滑る事が出来るまでしばらく待つ事になりそうだった。

「凄い楽しそうだね？」

美咲が目を輝かせて僕を見る。

僕はこれから起こる嬉しい危機に、不安でいっぱいになっていた…。

…僕の下半身が恥ずかしい事になったら…水着だしバレバレになる…

…それは困る…

「…ねえマコちゃん？ごめんね？迷惑だったよね…由恵に誤解されちゃうし…」

突然、美咲が僕の顔を覗き込みながら聞いてきた。

僕はその意味が解らずに、美咲を見た。

「…マコちゃん楽しくなさそうだし…困った顔してるから…」

美咲が少し困った様に笑いながら答えた。

僕は美咲の言葉の意味を理解して、笑いが込み上げてきた。

「…不安なのは僕の下半身の心配だよ…」

僕が正直に答えると美咲は顔を紅くして滑り台を見つめた。

滑り落ちて来るのはほとんどがカップルで、ゴムボートの後ろに男性が乗り、その足の間に女性が抱き抱えられる様に男性に寄り掛かり乗っている。

…つまり物凄く密着度が高いのだ…

美咲はそれに気付いた様に頬を染めて僕を見ると、

「マコちゃん信用してるし…」

と、釘を刺す様に答えた。

僕は何も答えられずに、笑って美咲を見ると美咲に睨み返されてしまった…。

僕は少し話題を変えようと、一生懸命に話し始める。

「…えっと…美咲、昨日は寝れた？」

少しとんちんかんな質問に少し後悔する。

「…全然。」

美咲が少し笑いながら答えるのを見て僕は『何で?』と聞き返す。

「…失恋しちゃった。」

美咲がまたも少し笑いながら答える。

僕はその台詞に胸が締め上げられた。

…あの先生にか…?

そう聞きたかったが、言葉にならない。

「…でもね、全然諦められなくて。」

…ドクン…

…ますます胸が苦しくなる

…美咲自身の口から出てくる、決定的な言葉に僕の体中の血液が逆流していく。

「…側にだけでも居たいんだよね…。」

僕は恐くて美咲の顔が見れないでいた。
美咲の恋する表情を見たくなかった。

…しかし、意を決して顔を上げて美咲を見る。

…美咲の表情は…

…ただ真っ直ぐに僕を見ていた…。

43告白2

…ドクン…ドクン…

…僕は真っ直ぐな美咲の視線から逃げる事が出来ないでいた…

美咲の言葉も気持ちも、向けられているのは僕ではないと分かっているのに…。

それでも小さな期待が僕の中で沸き上がる…。

「…その人に…告白はしたの？」

僕はそんな少しの期待を吹き消すかのように、美咲に尋ねた。

「まだしてないよ。これから告白するかどうか悩んでる。」

美咲があどけなく笑いながらそう答える。

…これから…？

僕は美咲の言葉の意味が解らなくて、美咲を見詰めた。

「…でもさ、その人には大切な人が居るし。私は本当は二人を応援する立場なのに…邪魔ばかりしちゃうんだ…。」

美咲はそう言いながら少し悲しそうに笑った。

…僕の気持ちも一気に悲しくなった…。

…今の言葉から考えると、美咲の好きな相手は間違いなく僕ではなさそうだ…。

自分の中で勝手に膨らませてしまった期待感に、少し羞恥心を抱いた。

「…マコちゃんはどう思う？それでも好きでいていいのかな…？」

……。

美咲の質問に僕は喉を詰まらせた。

…その問いに対して僕は何て答えればいいのか…。

…僕は美咲の恋を応援出来るのだろうか…？

「…止めちゃえよ…そんな恋…。」

…ほぼ無意識に言っていた。

「…周りにいくらでも美咲を大切にしたいと思ってる人は居るんだし…。」

…少し口調が強くなる。

「…美咲にとっては恋愛対象外の相手でも、美咲を幸せにしたいと

思ってるんだよ…。」

僕はそこまで言って美咲を見詰めた。

…美咲は…

…美咲は今にも泣き出しそうな顔をしていた…。

初めて見る美咲の顔に、僕は自分の言葉に酷く後悔をした。

「…ほら！智博だってさ…あいつ、アホだけど凄い美咲が好きだし。」

僕は無意識に並べてしまった自分の台詞を、自分の事だと気付かれ
たくなって…

…そう付け加えてしまった。

美咲は少し遠くを見てから、僕に視線を戻すと

「…ごめんね」

と微笑んだ。

僕はその『ごめん』の意味を聞くのが恐くて、視線を美咲から外す。

…多分気付かれたのかもしれない。

…僕の気持ちに…。

…そう思うとどうにもならない程の悲しみが僕に襲い掛かる…。

「…マコちゃん！ほらもうすぐ順番だよ！」

美咲が重い空気を打ち消すかのように、明るく僕に話しかける。
気付けば僕たちの順番はすぐそこまで来ていた。

僕も精一杯美咲に笑いかける。

この気持ちを気付かれたくはない…。

「…はい、男性は後ろでお願いしますね。」

店員さんがそう言いながらゴムボートを渡してきた。

僕は滑り台にゴムボートを浮かべると、先にゴムボートへ乗り込んだ。
だ。

そして僕の股の間に美咲が座る。

…失恋した矢先にこのシチュエーションもある意味辛いものである
…。

「合図と共に滑りますらかね。」

店員さんがそう言って、僕たちから少し離れた。

それと共に美咲が僕の方を少し振り向く。

「…ねえマコちゃん？…さっきの私の好きな人気付いちゃった？」

突然、美咲が先程の話を振り返してきた事に少し驚きながら僕は首を横に振る。

「はい！スタートしますよっ！」

店員さんが合図の掛け声をかけて来た。
それと同時に滑り始めたゴムボート。

「…だよっ！」

美咲が何か叫んだが、結構なスピードで聞き取る事が出来ない。

ゴムボートは滑り台のトンネルへと入っていった。
それと同時にあたりは急に暗くなる。

…突然の出来事だった…

顔に当たる冷たい空気が一瞬遮られた。

僕の唇に温かく柔らかな感触が襲った…。

…えっ…！？

…ドボンッ…！

その感触の理由を考える間もなく、僕らはプールに落ちた。

…僕は、プールから浮かび上がると顔の水しぶきを拭うのも忘れて唇を押さえる。

…何だったんだ…今の感触は…。

…まるでキス…されたみたいな…。

僕は水面から顔を出した美咲を見詰める。

美咲は濡れた前髪をかき上げると僕に視線を移した。

…そして僕に笑いかけると

「…マコちんだよ…私の好きな人…。」

…確かにそう言った。

44 美女の間で：

…聞き間違いなのだろうか…。
滑り台から滑り落ちた美咲は

「…マコちんだよ…私の好きな人…。」

…確かにそう聞こえた…。

…確かにそう言ったんだ。

…それにこの唇に残る感触は…

「危ないから早く上がって下さい！」

突然掛けられた店員さんの声に現実に戻る。

「行こう？」

美咲は笑いながら僕にそう言うのとプールサイドへと足を進めた。

…僕は胸の高鳴りを未だに抑えられずにいた…。

「マコっ！」

プールから身体を上げると由恵が駆け寄って来た。

後ろからは智博も着いて来ていた。

「待ってたの？めっちゃくちゃ混んでたから時間かかったのに…。」

僕は驚いて由恵と智博を見た。

「うん。元子達は二人で遊びに行っちゃったけど…私はマコと回ってたかったし…。」

由恵はそう僕に言うと、僕の手を引き

「行こう？トモがね、シャチの浮輪借りて来てくれたんだよ？」

と歩き出した。

そう言われて智博を見ると…確かに持つて…シャチを…

僕は由恵に手を引かれながら美咲の方を振り返る。

美咲は少し寂しそうに笑いながら後を歩いていた。

…また美咲に誤解されたくない…！

「由恵！ごめん！僕、ちょっとトイレに行きたい！」

僕はそう言って由恵の手を振りほどく。

…もちろんトイレなんて嘘だが…

そう言ってトイレへと足を向ける。

「俺も行く！」

智博も慌てて僕の後をついてきた。

僕は智博を振り返る事なく、足を進めるとトイレの前のベンチに腰を下ろした。

「マコ。由恵さ、マコ達が滑り台行ってからずっと待ってたんだぞ？ずっと落ち着きなく滑り台の方ばかり見てたし。」

智博が僕の隣に腰を下ろしながら口を開く。

「…れた。」

「…え？何？」

ほぼ、無意識で言葉を探す僕に智博が耳を傾ける。

「…美咲に…告白…された」
やっこの思いで言葉をだした。

「ええっ？マコ、美咲ちゃんに告白したの！？」

智博が慌てて聞き返す。

僕はそんな智博に視線を合わせると

「違うよ！僕がしたんじゃないって！…されたんだよ」

と言ってまた視線を外した。

…こうやって口に出して言う…だんだんと実感が沸いてくる。

…僕…美咲に告白されたんだ…。

じわじわと喜びが沸いてくる。

…美咲の好きな人…僕なんだ…。何だか凄く騒ぎたくなり、勢いよく智博を見た。

智博は…

…僕を見ながら気絶していた…

…バシッ…！

僕が勢いよく智博を叩くと、智博の瞳に黒目が戻ってきた。

…おかえり…智博。

「まーじーでー！？！？美咲ちゃんか！？マコに！？」

…帰って来たと思ったら、一人で騒ぎだす智博。

「嫌だ！許せん！」

…いや…智博の許しが必要なのか？

「俺の美咲がマコなんかにつ！」

…智博の美咲ではないし…マコなんかって…

「大体、美咲ちゃんがマコを好きなのは見てれば分かったけど！」

…はっ？知ってたの？

…智博のくせに？

「告白しちゃ駄目だよー！藤井美咲…。」

…何で駄目なんだよ…

…しかもフルネームだし…

…と、散々に騒ぎ立てた智博だが…

今の僕にはどんな言葉も効かない！

喜び一杯で無敵状態だ！

「…って事は？マコどうすんの？美咲ちゃんと付き合うの？由恵は？」

…智博の言葉に昨日の由恵とのやり取りを思い出す。

…僕はきつと、由恵にとっても冷たく対応しているのだと思う…。

…ここで僕も美咲が好きだと言ったらきつと由恵を傷付けてしまう…。

…でも…

「…智博…やっぱり僕は美咲が好きだし…美咲に誤解されるような行動は取りたくない…」

「…やっぱりー！？いいよ。分かった。由恵は任しといてよ！」

智博は僕の言葉を聞くと、わざとらしくガツカリする振りをしながら僕にそう言った。

そしてそのままベンチから腰をあげると

「…じゃあ戻ろうぜ！…大丈夫！上手くやるから！」

と何故か笑顔で言いながら、踵を返した。

45美女の間で2

僕と智博が美咲達の所へ戻ると、そこに由恵の姿はなく、美咲が一人で僕らを待っていた。

何故か美咲は、少し浮かない顔を浮かべながら右の頬が紅くなっていた。

僕らが来たのも気付かずに俯いていた。

「美咲ちゃん待った？あれ？由恵は？」

智博が声を掛けると、美咲は顔を上げて笑顔を作った。

：でも、そんな美咲の顔が何故か今にも泣き出しそうな気がして…僕の胸に小さな不安を落とした。

「…あのね…私、由恵にひどい事言っちゃって…」

僕らが美咲の近くまで歩いて行くと、美咲は少し苦笑いで答えた。

「…マコちゃん…お願い！由恵を探しに行って欲しいの…」

そして、そのままそう言った。

…由恵を探しに…？

僕は黙って美咲を見詰めた。

…正直、僕にとっては由恵よりも今、目の前にいる…頬を腫らした
今にも泣き出しそうな美咲を、ほっとく事なんて出来なかった。

でも、美咲は真っ直ぐに僕を見詰めたまま

「…マコちゃんお願い…」

ともう一度言った。

「俺が行くよ！美咲ちゃんはここでマコと待ってて！」

突然、智博がそう言ってどこかへ向かおうとした。

でも僕はそんな智博の腕を掴んでそれを制すと

「…僕が行く」

と答えた。

…きつと二人の喧嘩の原因は僕だとなんとなく気付いたんだ…

美咲が小さく

「ありがとう」

と答えたのが聞こえたが…

…その前に…

僕は、先程智博と話をしていたベンチへと足を向けた。

…確かあのベンチの脇に自販機があったはず…

僕は首からぶら下げた防水用のケースから小銭を出すとジュースを一本買って、また美咲達の方へ足を向ける。

少し小走りでジュースを買って来た僕を見て、智博と美咲は不思議そうな表情を浮かべていたが、僕はジュースを美咲に渡し

「それ、ほっぺにくっつけときな！」

と言うと理解したようで、今度は元気に

「マコちゃんありがとう。」

と返した。

僕はそんな美咲に申し訳ない気持ちで一杯になる。

…きつと、美咲の頬が腫れてる理由も僕が原因なんだと思う。

僕は美咲の顔を見る事が出来ずに、片手をあげ美咲に手を振るとそのまま踵を返した。

…でも…由恵はどこへ行ったのだろう。

美咲と喧嘩をした事を考えると、プールで遊んでる事はなさそうだし…。

一人で落ち着ける場所を探すのが一番かもしれないな…。

とは言っても…この広い施設の中、探しだすのは大変そうだな…。

僕は先程、美咲と乗った滑り台を見上げた。

…あんなに幸せな瞬間だったのに…

僕は少しため息をついて由恵を探そうと、視線を滑り台から外した。

…っっ!?

そこである姿が目止まる。

…由恵だ。

…まさかこんなに直ぐに見付かるとは。

由恵は俯いて泣いている様子で立っていた。

…滑り台の長蛇の列に並びながら…。

…ゴムボートを抱えて…。

…周りはカップルだらけなのに…一人俯きながら。

…ちゃんと前の人が進めば由恵も進んで歩きだす。

…何してるの？

僕はその様子に少し笑いが込み上げてきたが…。
それを堪えて由恵の方へと足を向けた。

「由恵っ！」

僕が声を掛けると、由恵は俯いていた顔をあげ僕に気が付いた様子だった。

でも直ぐに視線を外してまた俯いた。

「何してんの？滑り台に乗りたかったの？」

僕が少し笑いながら由恵の隣に並ぶと、由恵は小さく

「…美咲のおせっかい。」

と呟いた。

「美咲と何かあったの？」

由恵に聞いてみる。

「…マコも無理しなくていいし。」

由恵がまたも呟く。

「無理してないよ。心配してたんだよ？」

僕も負けじと答える。

「…美咲に告られたんでしょ？…よかったじゃん…マコも美咲が好きだし。」

由恵は唇をキュッと結んで何かを堪えるかのように、僕に突っ掛かる。

僕はその問いに何て答えるか少し悩んで口を開いた。

「…うん。嬉しいよ。多分、僕は美咲が異性として好きだし。…でも…」

そこで言葉が詰まってしまった。

由恵は俯いて必死で泣くのを堪えてる様子だった。

「…でも…僕は由恵と美咲には仲良くして欲しいんだ。ずるいのかもしれないけど…」

…本当は由恵をほっとく事も出来ないって言おうとした自分が、酷く情けない男に見えて…言葉を変えた。

「…だからさ、美咲を叩いたりしちゃ駄目だろ？」

僕がそう言って由恵の頭に手を乗せると、由恵は堪えきれなくなつた涙をボロボロと落とした。

「…だつてえ…みざぎが…ごくはぐしたら…わたし…かてるわけないじゃん…ずるい…みざぎばかり…」

由恵は涙と鼻水で言葉にならない言葉を必死に並べていた。

僕はそんな由恵の頭を自分の胸に寄せて

「勝つとか負けるじゃないでしょ？ 由恵の気持ちはちゃんと解ってるから…」

と声を掛けた。

由恵はそれでも泣き止まず、僕の上半身は涙か鼻水でベトベトになっていた。

「…あの…すいません…前に詰めて貰っていいですか…？」

突如、後ろから掛けられた声に、僕等は長蛇の列に列んでいる最中だった事を思い出し慌てて前に詰める。

…とゆうか…僕等、かなり恥ずかしい気が…

…それよりも…何で僕たち列んでるの…？

…ああ…ビキニパンツの変わりの辱めか…

…全ては智博のせいだ…

と、僕は根拠も無く、智博に恨みを馳せながらこの長蛇の列に列び続けた。

…泣き止まない由恵を宥めながら…

46すれ違い

マコが由恵を探しに行ってから、私達は近くのベンチに腰を下ろしていた。

…本当バカだな…私。

…本当はマコに傍に居て欲しかったくせに…

…でも、あのまま由恵をほっとく事が出来なかった。

…多分、由恵が今傍に居て欲しい人もマコだから…

「美咲ちゃん？もう頬っぺた痛くない？」

不意にトモが私の顔を覗き込んで来た。

「大丈夫だよ。全然痛くないし！」

私はトモに笑顔で答える。それを見て少しほっとした様子のトモ。

「…ねえ智博君？私、一人で大丈夫だよ？…ってゆーか…むしろ一人になりたいかも…」

私が少し申し訳なさそうにトモに言うと、トモは解りやすい程にがっかりした表情を浮かべて私を見た。

「もー！美咲ちゃん俺の事警戒してるっしょ？」

少し怒った振りをしてそう答えると

「大丈夫だよ！さすがにマコの好きなコに付け入る真似はしないし！」

と笑顔で続けた。

私はその答えに少し笑いながら

「もう！私、振られる覚悟でいるのに変な期待持たせないでよ！」

と笑い飛ばした。

きっと、トモは私に気を使ってそう言ってくれたのだろう。

昨日の旅館での出来事を考えても、マコと由恵が上手く行っているのは判っていた。

…なのに…告白なんてしちゃって…

…本当に私はバカだ…

でも、後悔してる訳じゃない。

駄目でも伝えられた事で、凄くすっきりしたし。

「…美咲ちゃんは本当にマコと似てるよね…他の事には鋭いくせに微妙に鈍いあたりが…」

トモが私の顔を見ながら言った。

…似てる…？

…私とマコが…？

「マコってさ、昔から何故かモテるんだよね。本人は気付いてないけど。…何でかな？絶対、俺とかタツの方がカッコイイのにさ！」

私はトモの話を聞きながら少し笑いが込み上げてきた。

私もマコが好きな立場だから何も言えないけど。

「でさあ、そんだけ鈍いからはつきり言わないと、本当に気付かないんだよね。そしてあの性格でしょ？めっちゃめっちゃ押しに弱いから、変な女の子にひっかかる事もしばしばでさあ…。」

トモが笑いながら話す。

「…変な女の子？」

私の問いにトモは笑いながら口を開く

「皆、マコに甘えちゃうんだよね。優しいから。わがまま言ったりとかさ。あれ買ってー、どこ連れてってーって。」

ふと、そんな女の子に振り回されるマコを想像して笑いが込み上げる。

「でさ、マコもそうゆうコ達に振り回されるのも疲れたんじゃないかな？…だから、美咲ちゃんに惹かれたんだろぅなっと思うよ。」

トモの言葉が凄く胸に染みた。

マコが私の事を異性として見て居なくても、初めて会った時に言っていた私を好きだと言ってくれた言葉がトモの言っていた理由ならば、こんなに嬉しい事はない。

「でもさ、マコは押さないと駄目だよ？言っただでしょ？マコと美咲ちゃんは似てるって。美咲ちゃんが前に出ないと本当に由恵に取られちゃうよ？」

トモの言葉を聞きながら、私は由恵を思い浮かべる。

由恵はいつでもマコの前で素直だ。私みたいに自分の気持ちを隠そうとしないし、いつもマコだけを見ている。

そんな由恵だから本当に可愛いと思うし、凄く羨ましい。

「…さてと、美咲ちゃん。そろそろマコ探しに行こうか？」

トモの言葉に私は頷く。

私もマコの前で素直になりたいし、可愛くなりしたい。

ちゃんと、もう一度マコに気持ちを伝えよう。

そう決心して腰を上げた。

それを見てトモも少し笑いながら席を立つ。

「あっちの方に行ったよね？」

そう言いながら歩き出したトモの後ろを私も着いて歩いた。

少し歩くと見えてきた、さっきマコと乗った滑り台。出口になるプールの縁に立ち、プールを眺めた。

…マコにちゃんと告白した場所。

…あの時の勇気をもう一度…。

…ドボンっ！

不意に、滑り台からカップルが滑って来た。

「…冷たいー！やっぱり恐かったよー！」

そう言いながら顔の水を手で拭っていたのは…。

楽しそうに笑っている由恵だった。

その後ろには…優しく笑っているマコ…。

…さっきまで、私とマコが居た場所に…

…私の勇気が詰まった場所に…

…今は由恵とマコが笑い合っていた…

…私はそのまま動けなくなる。

…気付けば目からは一筋の涙が零れていた。

47 対決（前書き）

僕の宝物をご覧の皆様へ いつも応援ありがとうございます。いつも皆様の評価やメッセージに励まされながら作品を書いております。おかげさまでランキングも上位に上がる事が出来ました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。これからも僕の宝物を応援よろしくお願いします。くバックハイく

47 対決

「美咲ちゃん？」

突然かけられたトモの声に私は慌てて振り向く。

トモは私の顔を見ると、驚いてから困ったような表情をした。

…突然呼ばれた私は、涙を拭うのを忘れていた。

「…どうしたの？」

きつと私の涙の訳を聞いているのだと思う。

「ははっ！今ね、水しぶきが飛んで来たんだ。」

私は慌てて涙を拭うとトモに笑いかけた。

トモはそんな私の言葉に益々、顔をしかめた。

「美咲っ！」

今度はプールの方から名前を呼ばれる。

振り向くとマコが私に気付いた様子で歩いて来た。
その後では由恵が少し気まずそうに俯いていた。

私はそんな由恵に、何て声を掛ければいいのか分からないまま由恵を見つめた。

「…とりあえずさ、皆で違うプールに行こう？ 智博もシャチを借りてきたんだしさ？」

マコがそんな私達の様子に気付いて話し出した。
トモがずっと抱えていたシャチの浮輪は、トモの腕の中で少し寂しそうに見えた。

「そうだね。今度こそ皆でシャチで遊ぼうか。」

私はトモからマコへと視線を移し笑いかけると、マコもホッとしたような表情を見せた。

私もそんなマコの顔を見ると自然に笑顔がこぼれる。

本当に単純だな私は。

マコの表情や行動でこんなにも簡単に涙を忘れられる。
もちろん先程のわだかまりが消えた訳じゃないけど…
マコにこれ以上、私と由恵の事で心配をかけたくなかった。

ふと、マコの後ろから視線を感じた。

由恵が真っ直ぐに私を見つめたまま口を開いた。

「…私…美咲と二人で話したい」

…ドクン…

由恵の言葉と視線に私の胸が高まる。

…由恵…

マコが驚いた様子で私と由恵を交互に見つめた。

由恵が私とどんな話をしたいのかはわからない。
でも由恵の真っ直ぐな瞳から私は逃れられずにいた。

「…わかった。じゃあ、二人で向こうに行こう？」

私は精一杯冷静に言葉を探す。

由恵に笑いかけたつもりだけど、ちゃんと笑えてたかどうかは自信がなかった。

心配そうに見つめるマコとトモを他所に私達は歩きだした。

…怖い…

…恐くてどうしようもない。

…由恵が何を話すつもりなのか。

私の頭を最悪な事態が駆け巡る。

…由恵もマコも失ってしまう…。

それがどうしようもなく恐くて、微かに手が震え出す。

私がマコに告白をしてしまったせいで由恵を傷付けた。

私が入る隙間なんて最初からなかったのに…。

「美咲？あそこでいいかな？」

不意に後から聞こえた由恵の声。

私は慌てて振り返る。

由恵が指さした場所は先程トモと話をしていたベンチだった。

私はそれに頷きベンチへと足を向ける。

由恵が先に腰を降ろしたのを見て、私は少し距離を置いて隣に座った。

二人で少し離れて腰を降ろし、私は由恵が口を開くのを静かに待った。

しかし、由恵は黙ったまま沈黙だけが流れていく。

…どうしよう…。

とりあえず由恵にさっきの事を謝りたい。

でも、マコに告白した事を後悔はしたくない。

由恵に謝ってしまったら…私は告白した事を後悔してしまう気がして怖かった。

―先程、マコに告白した事を、私は由恵に伝えた。

由恵にだけは内緒にしたくなかった。

マコが由恵を好きな事も、由恵がマコを好きな事もわかっている。だから余計に由恵に隠したくはなかった。

…ううん違う…

私は由恵を利用したのかもしれない。

マコへの告白は自分の気持ちに踏ん切りを着けたくてとった行動だった。

由恵に、私が告白した事を伝えて、私の入る隙間が本当にない事を確認したかったのかもしれない。

でも、私の頬の痛みと共に由恵も必死なんだと気付いてしまった。

（美咲のばか！ずるいよ美咲ばかり！私にはマコしか居ないのに！）

先程の由恵の言葉が頭を過ぎる。

由恵の大きな瞳は涙が溢れていて、私を必死で睨み付けていた。

それは威圧感でも恐怖でもない。

本当に小さな子供が大人を睨み付けているような…そんな表情に私の胸は締め付けられた。

由恵が私よりも、余裕が無くなってしまっている事を感じずにはいられなかった。

マコの一番近くに居るハズなのに…。

私が入る隙間なんてないハズなのに…。

それでもきつと、私の告白が由恵を追い詰めてしまっていたのかも
しれない…。

私はちらりと由恵へと視線を移す。

まだ俯いたまま何も話さない由恵へ私の方から口を開いた。

「…由恵？ 私ね、由恵の方が大事。由恵が嫌ならマコは諦める。」

自然に出た言葉だった。

48対決2

「由恵？私ね、由恵の方が大事。由恵が嫌ならマコは諦める。」

自然と出た言葉だった。

由恵が私を見つめる。

私は精一杯笑顔を作る。

…これでいいんだよね…

私は由恵から視線を外すと、自分の中のマコへの気持ちを整理しようとして決心した。

「…ちがうの…あたし…美咲にそんな事…言わせたかったんじゃないのに…」

隣から聞こえた由恵の涙混じりの声。

私は距離を置いて座っていたベンチを、由恵のすぐ隣へと座り直す。

「由恵ごめんね？由恵に辛い思いをさせちゃったね…」

私がそう言いながら由恵の頭に手を乗せると、由恵の涙は益々溢れ出してきた。

「…美咲…ごめんね…ほっぺ…叩いちゃった…」

その言葉に自然と笑顔が零れる。

「全然痛くないよ?」

そう言って由恵の頭に乗せた手で由恵の髪を撫でた。

「…マコの事…諦めないで…?…マコは美咲が…好きだから…」

「由恵?私の事は心配しなくていいんだよ?」

由恵が泣きながらも私に気を使う姿が、なんだか可愛くて私は少し笑いながら答える。

「…美咲い…違うの…本当はあたし…マコが美咲の事好きなの…ずっと前から…知ってたの…」

…え…?

「…でも…美咲に取られたくなくて…わざと…マコと仲いい振りしてたの…」

…由恵…

「…本当は…私…昨日…振られたの…」

…え？由恵が？…

私は黙って由恵の話に耳を傾けながら頭の中で状況を整理する。

…どうゆう事…？

…昨日、由恵が振られた？

だって…二人は抱き合ってたハズ…

(…マコ…行かないで…)

昨日の由恵の叫びが頭の中を過ぎる。

あの時のマコの表情が再び私の胸を締め付けた。

「…由恵？実はね、昨日たまたまマコちゃんと由恵が抱き合ってる所を見ちゃったんだ…」

由恵が静かに顔を上げる

「由恵は泣いてて気付かなかったみたいだけど…マコちゃんの表情、凄く優しかったよ？…そして切なそうだった。」

由恵は黙って私を見る。

「それを見た時…由恵が凄く羨ましかった。」

私はそつと由恵へ微笑む。

「由恵は大事にされてるんだなあ…って」

「…違うよ…私は…いっつもわがままばかり言ってマコを困らせてる…」

由恵はまた俯いて静かに言った。

「…ねえ…美咲？…それでも私…やっぱりマコが好き…諦めたくない…」

由恵の口調は静かに、強くそう言った。

「…だからね、美咲にも諦めてほしくない。…お互いライバルになっちゃうけど…それでもいいよね？」

…由恵…

「…ありがとう。」

私は小さくそう言った。

…でも、私の気持ちは固まっていたんだ。

こんなにもマコを求めている由恵。

…私が勝てる訳ないよ。

だって私はマコが好きだけ…

…同じ位に由恵も好きだから…

私は由恵に微笑むながら、マコへの気持ちを踏ん切る事を決意していた。

…でも…それでも胸に残る由恵の言葉…

(…マコが美咲の事好きなの知ってたの…)

(…昨日マコに振られたの…)

…由恵が言った言葉は本当なのだろうか…

…でも…私は気持ちを切り替える。

由恵を失う恐怖はもう味わいたくはなかった。

49 二次災害

僕と智博は二人で流れるプールへと来ていた。

もちろんシャチも一緒に。

「マコー。二人の事ほっといていいわけ？」

智博がシャチに掴まり流されながら聞いてくる。

「…僕が行ってもややこしくなるだろ？それに由恵が二人で話した
いって言ったんだし…。」

そう言いながらも僕の胸の中では不安が一杯だった。

…はあ…

…このタイミングで美咲と付き合えるのかな…

…むしろ、ここで呑気に美咲に返事をする訳にもいかいし…

…由恵の気持ちを切り捨てる事も出来ない。

「ところでマコ。次、その浮輪俺に貸してね。」

…人の気も知らずに呑気に言う智博…

そんな智博を睨みながら

「いやだ」

と言う僕。

僕は少し大きめの浮輪にお尻を入れてぷかぷかと浮いていた。
これが結構気持ち良くて、智博は羨ましそうにながめていた。

「マコー！」

突然、プールサイドから名前を呼ばれ振り返ると、由恵が笑顔で走って来ていた。

後ろからは美咲も笑顔で歩いて来る。

：なんだかよく分からないが、二人共仲直りした様子だったので僕はホッと胸を撫で下ろした。

：結局、二人はどんな話をしたのだろう：

：僕が原因なのに完全にアウェーな感じで少し不安になるが：

僕からは聞かない方がいいと直感的に感じていた。

「やっぱりここに居たんだ！」

そう言いながらプールに入って来る由恵。

美咲もそれに続いて入って来た。

「智博がシャチに乗りたいてって騒ぐからさ。」

僕は少し笑いながら言葉を返す。

「…ってか…由恵ごめん。僕の事押して？」

「押す？ ころう？」

由恵は静かに僕の浮輪を押した。
それと同時に前へ流れて行く。

「違う違う！ 僕の事を突き落として？ …降りられなくなったんだよね…」

…浮輪にお尻を乗せて浮かぶこの体制…
浮かんでいる時は気持ちいいが…
乗り降りが意外と大変なのだ。

由恵は僕の言葉の意味が分かったようで笑いながら僕を突き落としたりした。

…バシヤン！

同時にプールへ突き落とされる僕。

…やっぱり荒療治だったようで…鼻から水が入り込む。

「…ゴホッ！」

慌てて咳き込み水をだそうとする僕を楽しそうに笑う由恵。

僕はちらりと後の美咲へと目をやる。

…よかった…

美咲も智博と一緒に僕を見ながら笑っていた。

僕は胸を撫で下ろしながら、少し流された浮輪を拾って由恵に渡した。

「あはは！ありがとうございますマコ。」

由恵はまだ笑いが止まらない様子で浮輪を受け取る。

僕はそんな由恵に笑顔に向けた。

…でも本当は後ろに居る美咲が気になってしょうがなかった。

美咲は智博にシャツを借りて、楽しそうに泳いでいるが…

美咲達が戻って来てから、僕は由恵としか会話をしていない。たったそれだけの事かもしれないが…

…僕の胸の中は不安でいっぱいになる…

…美咲はどんな時でも笑顔を作るのが得意だから…

「美咲！次、僕にシャツかしてよ。」

意を決して美咲に声をかけてみる。

美咲はシャツに捕まりながら僕の方まで流れて来ると

「マコちゃんシャチ虐めそうだから嫌だよー。」

と言ってそのまま前へと流れて行った。

…このやろう…

僕は笑いながら美咲を追い掛ける。

美咲は僕を見ながらバタ足で水を掛けてくる。

途端に水浸しになる僕。

…ならば。

僕はプールに潜り美咲の方へと泳いで行く。

シャチに捕まる美咲を発見すると、下からシャチを捕まえて顔を上げた。

隣には驚いて僕を見ている美咲。

「シャチ確保ー！」

僕が美咲に笑いながらそう言うと、僕から視線をそらす美咲。

…ん？

「…マコちゃん近いし…」

美咲が小さく呟き、僕は美咲と肩が触れる程の距離間だった事に気が付き、慌てて離れた。

…やばい。

そう思いながらも僕の胸は大きく鳴っていた。

「なーんてね！バイバイマコちゃん！」

…バシヤバシヤ！

僕が離れた途端にそう言ってまたもバタ足で泳ぎだした美咲。

…もちろん僕は濡れ。

…あの悪戯娘め…。

僕は顔に掛かった水しぶきを拭いながら美咲を睨み付ける。

…でも口元は…

隠せない程に笑っていた。

50 二次災害2

一通り流れるプールで遊んだ後、僕たちは近くのテラスで休んでいた。

「なんか、すごいお腹空いた！」

由恵がそう言いながらお店の方へと目を向けた。

食べ物を買う事の出来るお店は五軒程並んでおり、どのお店もセルフサービスとなっている。

由恵が

「なんか買ってくるね！」

と席を立つ。

美咲も一緒に行こうと席を立つが、智博がそれを制した。

「運ぶの重たいだろうし俺が付いてくよ。二人の分は適当な物でいい?」

智博の言葉に僕は

「何でもいいよ。」

と答えてお金を渡そうとした。
しかし智博は

「いいよ。昨日の罰ゲームで」

と答えて由恵と歩いて行った。

「…昨日の罰ゲーム!？」

僕が智博に聞き返したが、智博は手をひらひらと振りながら歩いて行った。

「…寿司は…? 焼肉は…? 智博め…安くあげたな。」

僕が肩を落としながら呟くと美咲はくすくすと笑っていた。

「でもマコちゃんは自腹って昨日言ってたし、ラッキーじゃん？」

美咲がテーブルに寄り掛かりながら、そう言って笑う。

…まあそれはそうか…

とゆうか…智博、元子の分は？

…やっぱり智博に丸め込まれた気がする…

僕はそんな事を一人で考えながら、買い物をしに行った智博を睨み付けていた。

「…ねえ…マコちゃん？」

不意に美咲に呼ばれ顔を向ける。

美咲は少し気まずそうに俯いていた。

その様子に僕の胸が締め付けられた。

…多分、さっきの話だろう…

「ん？どした？」

僕は出来るだけ平然を装って美咲に聞いた。

美咲が少し困った様に眉を寄せた。

そんな些細な表情すらも、今は僕の胸を締め上げる。

…聞きたくない…

何故か直感でそう思っていた。

「…あのね、これからも友達で居て欲しいなって。」

…ドクン…

…美咲の言った言葉の意味を必死で考える僕。

…友達でいて欲しい…

「…だからね、さっきの告白…なかった事にして欲しい。」

美咲は更にそう続けた。

…僕は…言葉が出て来なかった。

美咲が出した答えがそれならば、僕は何も言える訳がない。

僕は先程の告白の返事すらしていないのだから。

…最初から何もなかった…

そう考えるのが一番自然なんだから。

「そっかあ。」

僕は少し笑って答える。

「…ごめん」

美咲が俯いたまま呟いた。

…僕は美咲に手を延ばそうとしたが…すぐに引っ込めた。

…こんなにも手の届きそうな距離にいるのに…

…僕は美咲へと手を延ばす事すら出来なかった。

「残念だな…藤井美咲に告られたなんて高校時代の友達に自慢したかったけど…なかった事にしといてやるよ。」

僕は、少しでも美咲に笑って欲しくて冗談混じりで言ってみた。

美咲は少し顔をあげ、笑いながら答えた。

「…自慢にもならないよ」

まだ気まずそうに笑うだけだったけど…

僕は少しホッとしていた。

…でも…

僕の胸の中は正直複雑で：

どうにもならない程の脱力感に襲われていた。

「ただいまー！マコ、ピザでもいい？」

僕の胸中とは裏腹な元気な声…智博だ…

「おかえり。何でもいいよ。…でもその前に…トイレ…」

僕は少し笑いながら席を立つ。

「ええー！買ってる時に行けば良かったのにー！」

智博が少しふて腐れて答えたが、僕は笑いながら何も答えず席を立った。

「もー食べてるからね！」

後ろから智博の声が聞こえたが、僕は振り向く事なく足を進めた。

…限界だった…

無理して笑うのも、冗談を飛ばすのも…

…もう限界だった…

そのまま近くのベンチに座り込む

両手で顔を覆って僕は泣いた。

…すげえ格好悪い…

こんなプールサイドのベンチで、水着姿で、男が一人で…
…格好悪いけど…限界だったんだ。

せめて美咲の前だけでは恰好付けたかった。
平気な振りして笑いたかった。

「マコっ！」

急に聞こえた声に顔を上げる。

「…由恵」

「ごめん。マコの様子おかしかったから…ほっとけなくて付いて来ちゃった…」

由恵は不安げに僕を覗き込むようにして、少し笑ってみせた。

51 智博の怒り

「…で？何があったの？」

私はトモへと視線をやる。

「マコと由恵が慌ててトイレに駆け込んだ理由だよ。」

トモはそう続けると私の顔を真っ直ぐに見つめた。

先程、マコが席を外した後、由恵もトイレに行くと言って席を立った。

おそらく何か感づいてマコを追い掛けたのだと私は思った。

「…マコへの告白…取り消して貰った…」

私は耐え切れずにトモから視線を反らして答えた。

「…ええ！？…マジで？」

トモが驚いて聞き返してきた。
私は俯いたまま頷いた。

「…うわぁ…ショック…美咲ちゃんはそんな子じゃないと思ってたのに」

トモの言葉に私は何も答えられない

「…だから女は嫌なんだよ。勝手に告白して期待もたせて勝手に取り消してって…それに振り回されたマコの立場は？」

トモは少し苛々した様子で続けた。

「マジで勝手に盛り上がって勝手に悲観的になって…だから女は嫌なんだよ。」

私は何も答えられず俯いたまま。

「…まじショック…美咲ちゃんもその程度かよ…」

トモが冷たく言い放った。

その言葉が私に深く突き刺さる。

…ごめんなさい…

…ごめんなさい…

口に出せないまま私はマコへの謝罪ばかりが頭を過ぎる。

「…とりあえず、美咲ちゃんがそう決めたなら、もうマコを振り回さないで。」

トモは目の前にあったピザを一切れつまむと続けた。

「…ってか…マコに悪いと思うならここで俺にキスしてよ…」

…そうだよね…

…マコに対する謝罪を形にしないと…

…って…!

「何でトモにキス!?!」

私は思わず顔を上げて叫んでしまった。

「…ぷっ…ぷはははっ!」

途端にトモが笑い出す。

「ツツコミ早いし！俺の事トモって呼んでくれたし！…ははっ！やっぱり美咲ちゃんはそうじゃなきゃ！」

トモの笑いにつられて私も思わず笑ってしまう。

「でもさ、さっきも言ったでしょ？マコは女の子に振り回されてばかりだって。…だからさ、もうマコの事振り回すのは止めて？」

トモは私と視線を合わせるとそう言った。

「美咲ちゃんがこれからもマコを想うのも諦めるのも自由だけど…マコの気持ちを無視するのはこれっきりにして欲しい。」

トモの言葉に私は頷いた。

「あとさ…さっきは酷い事言ってごめんね？」

トモは少し気まずそうに笑って続けた。

「…うん。私もトモに言われなかったら気付けなかったかも…。…だから…私もごめんね？」

私の言葉にトモはニカッと笑うと

「じゃあ、キスして！」

とふざけて見せた。

「だから何でよ！」

私も自然に笑顔でトモにツツコミを入れる。

…ありがとう。トモ。

私は心の中でトモにお礼を言った。

「ああっ！タツ発見！」

突然、そう叫んで立ち上がったトモ。

私もトモの視線の先を目で追い掛ける。

…本当だ。赤ビキニ発見！

「元子ー！」

私は隣に立っていた元子呼びながら手を振った。

元子は私に気付いた様子で小走りでこちらに向かって来た。

竜輝君も私達に気付くと、慌ててお店の人からハンバーガーの乗ったトレイを貰い小走りで向かって来た。

「もー！やっと思付けた！…あれ？二人だけ？由恵とマコは？」

元子は私達の側まで来ると、キョロキョロと見回しながらそう言った。

「なんかマコは腹壊したみたいでトイレに行った。由恵は心配して付いて行った。」

トモがピザに噛り付きながらそう答えると

「腹壊したって…トモ…美咲ちゃんと二人きりになりたいからって変な薬でも飲ませたんじゃねーの？」

と、竜輝君がトレイをテーブルに置きながら笑ってみせた。

「…ばれたか…今もキスしてってせがんでたのに…今度はタツに下剤しこむか」

トモは冗談か本気か解らないような、真面目な顔でそう答えるとピザを手に取り竜輝君の口に入れた。

「っ！何？下剤入りピザなの？」

慌てて口からピザを取り出すとピザの匂いを嗅ぎ始めた竜輝君。

「匂いで解るわけじゃないじゃん！」

そう言って竜輝君の持っていたピザを奪い自分の口に入れた元子。

私はそんな様子が可笑しくてくすくすと笑い出す。

不思議そうに見つめる元子と竜輝君。

トモは、少し穏やかな顔で私を見たあと

「あははっ！！やっぱり美咲ちゃんは笑顔が一番可愛いや！」

と笑い出した。

：私は突然の言葉に少し照れ笑いをしながらも、心の中でもう一度トモにありがとうと呟いた。

52 マコの涙（前書き）

読者の皆様へ。更新が約二ヶ月ぶりと、遅れてしまいました（涙。
楽しみにして下さっていた方々に迷惑をかけてしまいました。少し
ずつではありますが、更新頑張りますので応援よろしくお願いしま
す（バックハイ）

52 マコの涙

「…つか、格好悪い所見せちゃったな。」

そう言って隣に座る由恵に笑いかける。

「全然！格好悪くなんてないよ？…でも、あれだね…なんか男の人の涙って綺麗だね？」

由恵は僕の方を見ながら、凄く真面目な顔でそう言った。

…綺麗って…

…男の涙なんて格好悪いだけなのに…

由恵の表現が妙に可笑しくて僕は静かに笑った。

由恵はそんな僕をちらりと見てから、視線を遠くのプールへと投げ出した。

そのまま、ベンチに両手を付いて足をブラブラさせ始めてから口を開いた。

「あーあ。やっぱり駄目だな私。性懲りもなくマコに私じゃ駄目？って聞こうとしちゃった」

僕はちらりと由恵に視線を移す。

由恵は視線を変える事なく言葉を続けた。

「…でも、今回は学習能力付けたんだ！今はマコを困らせる事よりも元気にする事が再優先！」

「…由恵…」

僕は由恵を見つめた。

由恵はまだ僕を見る事なく微笑んでいた。

そんな由恵の気持ちが嬉しくて、さっきまでのやり切れない思いが徐々に薄れていく。

ふと、由恵の表情が少し重くなった。

「…マコ、ごめんね？私がマコを好きにならなければ…二人はうまくいったのに。」

由恵は視線をプールから足元に移すと呟く様にそう言った。

「…由恵？僕は今、由恵の気持ちで救われてるよ。」

僕はそう言いながら由恵の頭に掌を乗せた。

「…ねえ、マコ？マコが美咲を好きな理由聞いてもいいかな？」

由恵が少し笑いながらそう言って僕を見つめた。

「好きな理由？」

僕は何て答えていいのか戸惑いながら由恵に言葉を返す。

「うん。大丈夫だよ！もうヤキモチとか妬かないから！今後の為にも聞きたいだけ。」

そう言って笑いかけた由恵の顔は、とても清々しくて僕の気持ちを和らげた。

普通なら、僕を好きだと言ってくれている由恵にこんな話を話すのは変なのかもしれない…。

でも、何か吹っ切れた様な由恵の笑顔に僕は自然と口を開いた。

「…美咲はさ、僕にとっては女性じゃないんだよね。自然に一緒に居れる空間。人としての優しさ。かつこよさ。憧れ…。
…全部が一人の人間として好きなんだ。」

由恵は静かに微笑みながら僕を見つめていた。

なんだかそれが照れ臭くて、僕は視線を反らしながら言葉が続ける。

「美咲ってさ、凄い笑うのが上手いんだ。悲しくても辛くても笑顔で全部隠しちゃう。」

だからね、本当に楽しそうに笑う美咲を見付けるとさ…どうにもならない位に嬉しくて。」

そう言いながら僕は美咲の笑顔を思いだす。

昨日、旅館の廊下で僕と由恵を見付けた時、美咲は笑ってた…いつもの様に悪戯っぽく笑ってた。

…今ならわかる。あの笑顔の下に隠された美咲の気持ち。

「マコ？」

不意に由恵が僕の頬に手を触れた。
それで自分が涙を流してしまった事に気付いた。

…かっこ悪い…

僕は慌てて腕で涙を拭う。

…情けない…

「マコは美咲に気持ちを伝えないの？」

不意に由恵が聞いてきた。

「気持ちってさ、やっぱり言わないと判らないよ。マコだって美咲の気持ちに気付かなかったでしょ？」

由恵の言葉が胸に刺さる。

…でも…今更気持ちを伝えて何になるんだろう。これ以上、美咲との間に溝を作るのが怖かった。

「私が言うのも何だけどさ、マコも美咲も自分の気持ちを押し殺しすぎ！だから、私みたいな人に付け入られるんだよ？」

由恵が僕の顔を覗き込みながら頬を膨らませた。

それが何だか、前に美咲にあげたくまのぬいぐるみを思い出して笑いが込み上げる。

「もう！真面目に二人を応援しようって決めたのに！何で笑うの？」

由恵はそう言ってますます頬を膨らました。

「なんか、由恵と美咲が似てるなって思ったんだ。」

そう言いながらも笑いが込み上げてきた。

由恵はきょとんと僕を見つめて

「嬉しい。」

とはにかんだ。

そう言えば、こんな由恵の表情も久々に見た気がする。

僕の脳裏に浮かぶ由恵は、いつも必死に僕を見つめる姿ばかりだったから：

きっと今の由恵の表情には由恵なりの優しさと、我慢が詰まっているんだろう。

そう思うと少しだけ寂しさが押し寄せた。

「由恵。皆の所に戻ろう？」

僕はそう言って由恵に笑いかけると、ベンチから腰を上げた。

由恵も笑顔で頷き立ち上がる。

「由恵？ありがとうございます。僕を好きになってくれて本当にありがとうございます。」

僕はそっと由恵にそう告げると、振り向かずにそのまま歩き出した。

53 終わった恋愛

「マコ！遅いよ！」

先程のテラスへ戻ると竜輝と元子が戻って来ていた。

…遅いよ！って…

今まで二人でどこかに行ってたくせに…

そう思いながらも視線は美咲を探していた。

「美咲ちゃんならジュース買いに行ってるよ。」

僕の行動を読んでる様に智博が口を挟む。

それが何だか恥ずかしくて、無言で椅子に座った。

そのまま首に下がった防水用の小物入れから煙草を取り出し火を点けようとして手が止まる。

テーブルの上に無防備に置かれている美咲の携帯電話。

…そこにぶら下がったウッドビーズで作られたストラップ…

僕は思わず携帯を手取る。

「マコゝ人の携帯覗くのはいい趣味じゃないよ」

隣から智博がそう言って僕を覗き見た。

でも、僕の視線は携帯にぶら下がるストラップから目が離せなくなっていた…。

前に美咲に貰ったストラップと全く同じデザイン。

違うのは下に付いてる英語のロゴが(MISAKI)になっている事だけだった。

僕はそっと携帯をテーブルに戻し、点け忘れてた煙草に火を点けた。

「マコゝ何だよニヤニヤして。気持ち悪いよ。」

智博が口を挟む。

…ずっと見られてたのか…

僕は智博を睨みつけると煙草の煙を大きく吸った。

「マコ。私もジュース買いに行くけどマコは何か飲みたい？」

由恵が僕に声をかける。

僕は視線を由恵へと移して

「適当にお願い。」

と、答えた。

「わかった。元子も一緒行かない？」

由恵はそう言って元子の腕を引っ張る。

元子もそれに頷き、二人でジュースを買いに歩いて行く。

竜輝はそんな二人を見送ると

「なあ、マコと由恵ちゃん何かあったの？」

と、向かいの席から身を乗り出して聞いてきた。僕は苦笑いで

「何もないよ。」

と答えた。

「嘘つけよくなんか由恵ちゃんの雰囲気変わってるぞ？」

竜輝は尚もニヤニヤしながら身を乗り出してくる。

「タツ。なんかあったのは俺かもよ？」

智博がそう言葉を挟んで、変な笑いを浮かべた。

…何かあったのか？

…美咲と？

思わず智博を見つめる僕と竜輝。

智博は尚も変な笑顔。

…何か…

…あるわけないな。

直ぐさま智博を無視して竜輝に視線を戻す。
竜輝もタイミングよく僕を見ると

「そう言えばマコ、欲しかったCD買った？」

と、無理矢理会話を始めた。

「それがさ、なかなか見つからなくて」

僕も無理矢理、会話を合わせる。

…しかし…視線の先に飛び込んで来たのは智博の顔。

「ちょっと！無視しないでよ！」

無理矢理、僕と竜輝の間に入ってわざとらしくいじけて見せた。

竜輝はそんな智博に眉を寄せて、身を乗り出していた身体を背もたれに預けた。

「大体、嘘付くならもつとマシな嘘付けよ！ありえないだろ？美咲ちゃんが俺達の誰かと付き合う事になっちゃったら…この赤ビキニで駅前を歩いてやるよ！」

竜輝はニヤリと笑いながらそう言うと、僕の煙草を一本取って火を点けた。

智博はその言葉を聞くなり、ぐいっと竜輝に顔を近づけて

「言ったな！その約束忘れないでよ！俺じゃなくても赤ビキニだからな！」

…と、言うなり僕を見てニヤリと笑った。

「何？マコが？…それも有り得ないよ。マコには由恵ちゃんが居るだろ？」

竜輝は、鬼の首を取った様に勝ち誇る智博に驚きながらも、僕にそう聞いてきた。

僕はその言葉に少し戸惑いながら言葉を搜す。

「有り得ないよ。マコちゃんには由恵が居るでしょ？」

…後ろから聞こえてきた声に驚いて振り返る。

…声の主は

…美咲だった。

それを見て気まずそうにしている僕達を他所に、美咲は椅子に腰を下ろしながら言葉を続けた。

「大体、勝手に賭けの対象にするなんて失礼！私だって恋はするのに！」

美咲は竜輝を見ながら笑ってみせた。

「じゃあさ、美咲ちゃんはどんな男が好みなの？俺達みたいなタイプでは絶対ないでしょ？」

竜輝が開き直った様子で美咲に聞き返す。

…美咲の好み…

僕は、変な方向に話が向いてしまった事に動揺しながらも美咲が口を開くのを待っていた。

「…一緒に居ると安心して隙を見せてしまう人。…かな。」

少しの沈黙の後、美咲はそう言うのと少しはにかんで見せた。

竜輝はその言葉を聞くなりニヤリと笑うと口を開いた。

「ほらな。やっぱり有り得ないよ。赤ビキニはなしだな。」

「何で？」

智博が不思議そうに口を挟む。

竜輝はそんな智博を笑いながら見ると

「馬鹿だな。今のはどう考えても好きなタイプじゃなくて好きな人の話だろ？」

…つまり、美咲ちゃんはすでに好きな人が居るんだよ。」

と、続けた。

竜輝の言葉に先程の美咲の言葉が僕を指している気がして嬉しかった。

「じゃあさ、その好きな人が俺達の中の誰かって可能性もあるだろ？」

智博がそう言って美咲を見る。美咲は少し気まずそうに笑うだけで何も答えない。

代わりに竜輝が智博を見ながら口を開いた。

「だったら、あんなにはつきり有り得ないとは言わないだろ？もし俺達の中の誰かなら、それはすでに付き合ってるのを隠してるか終わった恋愛かのどっちかだよ。」

…終わった恋愛…

その言葉が僕の心に深く突き刺さっていった。

54 竜輝の勘違い（前書き）

読者の皆様へ。沢山の評価やご意見ありがとうございます。作者自信や文章に対するご指摘なども参考にさせて頂いてます。メールでご指摘して下さい方々へ返信が出来ないので、この場をかりて御礼をしたいと思います。これからも『僕の宝物』を応援よろしくお願いします！～バックハイ～

54 竜輝の勘違い

…終わった恋愛…

その言葉が僕の言葉に陰を落とす。

美咲は竜輝の言葉に少し笑って

「私の事なんていいからさ。それより由恵と元子は？」

と、話題を変えた。

しかし、竜輝は空気が読めないのか

「二人はジュース買いに行ったよ。それよりさ、やっぱり美咲ちゃんの好きな人って昨日の先生？」

と、話を続けた。

その言葉に、僕の脳裏に昨日の美咲と先生の様子が浮かんだ。

美咲は少し驚いた様子だったが、すぐに声を出して笑いだした。
そしてそのまま言葉を続けた。

「松山先生はそんなじゃないよ。…確かに昔は好きだったけど…
とっくに振られてるし、もう結婚してるんだよ？」

美咲の言葉に、自分の胸の高鳴りが落ち着きはじめる。
…結婚してるんだ…

さっき、美咲は僕を好きだと言ってくれた。
直ぐさま取り消されてしまったけれど…

やっぱりどこかあの先生が気になっていたから…

…よかつ…

…バシっ!!

「痛いっ! 何するんだよ! マコ!」

智博が頭を抱えて叫びだす。

まったく…せっかくホッと出来るシチュエーションだったのに

…隣でニヤニヤしてるから思わず頭を叩いてしまった。

「大体、何であの先生の話になるといつも妄想を始めるんだよ!」?

僕の言葉に智博は頬を膨らます

「別にいいだろ！？好きなんだよ！教師と生徒のシチュエーションが！」

「…好きなんだよって…」

そんなに自信を持って話す事でもないだろ？」

僕も負けじと言い返す。

「あははっ！」

美咲の笑い声に振り返ると、美咲は楽しそうに僕と智博のやり取りを見ていた。

それが凄く可愛くて、僕は思わず見とれてしまう。

「美咲〜！」

美咲はその声に振り返ると席を立った。

由恵と元子が帰って来たのだ。

「はい、マコ。コーラで良かった？」

由恵が僕にコーラを手渡す。

僕は『ありがとう』と言って渡されたコーラの蓋を開けた。

「ようやく皆揃ったし、少し休んだらまたプール行こう?」

智博がテーブルに身を乗り出して皆にそう言っていると、皆それに頷きジュースを飲んでからプールに戻る事にした。

「なあ、マコ？…相談があるんだけど…」

竜輝が小さな声でそう言ったのは、皆でプールへと歩いている時だった。

…竜輝が相談？珍しいな…

僕は少し不思議に思いつつも、童輝を見た。隣に居た智博も、童輝の言葉に身を寄せてきた。

竜輝は前を歩く女性陣をちらりと見ると、少し悩みながらも口を開いた。

「…さっきの話なんだけど…俺、あれから色々考えたんだ…」

…さっきの話？

僕は何の話かわからないまま竜輝を見つめる。

「…もしかして…美咲ちゃんの好きな人って…俺なんじゃないかな…」

…僕は思わず手に持っていたタオルを落としてしまった。

…智博も抱えているシャツを落としている…

竜輝はそんな様子に気付かずに一人で話を続ける。

「…俺なら元子が居るから、隠そうとする美咲ちゃんの様子も納得だし…でも、困るよ…俺は元子一筋だし…」

…全然困った様子でもない竜輝は、すでに固まって足を止めている僕達に気付きもせずに、一人でブツブツ言いながら歩いて行く。

…相談って…

…人がせっかく真剣に聞いてたのに…

僕はちらりと智博を見る。

智博も僕の方を見ながら固まっていた。

…

無言のまま目で合図する僕と智博。

そのまま竜輝の方へと走る。

…そして智博と二人で竜輝を抱える。

「…ちよっ！何するんだよ！離せって！」

竜輝がジタバタと動き出すが、僕達はお構いなしに竜輝を抱えて走り出す。

女性陣の横を走り抜けると、三人の笑い声が聞こえてきた。

でも、僕と智博はそれも無視してプールまで走る…

…そしてそのまま…

…ドボンッ！

プールへと飛び込んだ。

「何すんだよ！」

竜輝が水面から顔を出すなり叫びだす。

「うるさい！大体、タツが意味不明の勘違いをしてるから頭を冷やしてやっただよ！」

智博も負けじと叫びだす。

僕は…

「…ゴホッ…ゴホッ！」

…鼻から入った水を出していた。

「…もう頭に来た！喰らえタツチャンスプリンダー！」

竜輝が昨日の様に両手を広げて回転し始める。

途端に水びたしになる僕と智博。

智博も一緒に水を掛け始める。

…僕は…

プールサイドまで避難する

…と、美咲達が笑いながらやってきた。

「凄い楽しそうだね！」

元子がそう言ってプールに入る。
由恵と美咲もそれに続く。

「元子ちゃん、竜輝を止めてくれよ…」

僕がそう言っていると、元子は『わかった』と言って竜輝の方へと向かって行った。

…しかし…

元子は竜輝の側に行くなり、両手で竜輝に水を掛け始める。

…ますますヒートアップする竜輝…

…まったく…

僕はプールをあがり、一人で歩き出した。

「マコー！どこ行くんだよ？」

後ろから智博の声が聞こえたが、僕は何も答えない。

そのまま智博が投げ捨てたシャチを拾うと…

プールまで一気に走りだす。

「わああ！マコ！止めろっ！」

竜輝の叫び声が聞こえたが、僕はプールサイドから一気に飛び込んだ。

…バシャン！…

…凄い勢いで水しぶきがあがる。

もちろん全員水浸しだ。

「…トモ…マコを集中攻撃だ…」

竜輝が顔を拭いながら智博に合図する。

その途端に一斉に僕を囲む竜輝と智博。

…と元子と美咲と由恵…

…つまり全員からの集中攻撃…

それに反撃する僕。

皆楽しそうに笑いながら、水掛け遊びが始まる。

美咲も楽しそうに笑って智博に水を掛けていた。

それが凄く可愛くて…

僕は美咲の手を引っ張ると水中へと潜りこんだ。

急に僕に手を引かれ、水中に引きずられた美咲は驚いてジタバタしていた。

僕は、そんな美咲にそつと唇を重ねた。

…バシャンっ…！

水面にあがると、皆はまだ水を掛け合っていた。

美咲は唇に手を当てたまま立ち尽くしている。

それがめっちゃくちゃ可愛くて…僕の鼓動が高鳴った。

「…さっきの仕返し。」

そう言うのが精一杯だった。

55 隙

…帰りの車内…

皆、それぞれ今日の話で盛り上がっていた。

そんな中、僕は一人後悔していた。

…何である時、美咲にキスしてしまったんだろう…

美咲は相変わらず、そんな事などなかったかの様に振る舞っていた。

でも、僕に対する態度だけが妙にぎこちなくて…

隣に座る美咲をちらりと盗み見る。

美咲は窓に頭を寄せて、一人で黙ったまま外を見ている。

さっきまで皆と楽しそうに話をしていたのに…

…何か考え事でもしてるのだろうか…？

「美咲？ 今日、楽しかった？」

僕は、恐る恐る美咲に声をかけてみる。

…美咲は何も返事をしなかった…

僕の胸に急激に不安が広がる。

…トスン…

突然、美咲の頭が僕の肩へともたれ掛かってきた。

…美咲は寝ていた…

…寝てたのかよ…

急に笑いが込み上げる。

勝手に一人で不安になってる僕は相当な馬鹿だな…

美咲を起こさない様に横目で美咲の寝顔をのぞき見る。

無防備な顔で眠る美咲が凄く愛おしかった。

僕はそのまま、そっと美咲の頭を僕の膝の上に乗せた。

「美咲寝ちゃったの？珍しいっ！」

由恵が後ろから覗き込みながらそう言うと、元子も助手席から顔を出した。

「本当だ！男の人が居ると絶対お酒でも酔わないのに…」

確かに…

いつも、隙など見せない美咲が眠っていた。

「ちょっ！俺も見たい！」

竜輝があわてて車を端っこに寄せて停車させると

「いいから竜輝は運転！」

と、元子に怒られていた。

「…ねえ、美咲が安心して眠れる理由って…これじゃない？」

後ろから由恵が言った言葉に僕は振り向いてみる。

…そこには…

…大きな口を開けて眠る智博…

「…ぷっ！確かに！竜輝は運転中だし、マコちゃんなら安心だもんね
！」

元子が智博の様子を見て、笑いながら言った。
その言葉に

「…どういう意味だよ…」

と、竜輝が返す。

「そのままの意味だよ？」

元子の言葉に、由恵も思わず笑い出した。

「うわぁ…由恵ちゃんまで…」

竜輝がわざとらしくいじけて見せたが、元子も由恵も笑っていた。

僕は、膝の上で眠る美咲を眺めていた。

美咲が言っていた『一緒に居ると安心して隙を見せてしまう人』

…それは僕の事なのかな…

そんな事を考えながら、僕は美咲の唇をそっと指でなぞった。

「…ちん？マコちん？」

誰かの声にそっと目を開ける。

…そこにあったのは上から僕を覗き込む美咲の顔…

…僕はいつの間にか寝ていたようだ…

…あれっ!?

僕は慌てて跳び起きた。

僕が眠っていた場所は

…美咲の膝の上…

「…ご…ごめん!」

慌てて美咲に謝る僕。

美咲はクスクス笑っていた。

外を見るともう、僕たちの家の近くまで来ていた。

「マコも起きたし、次はトモだね!」

後ろで聞こえた由恵の声に振り向くと、智博はまだ眠っていた。

…しょうがないな…

僕は車内にあったティッシュペーパーを一枚取ると、細く振ってこよりを作る。

もちろん、そのまま智博の鼻に差し込む。

智博は寝ぼけた様子で鼻を擦りだす。

しかし、そんな事は気にせず続ける僕。

「…へ…へっくしょん！」

大きくしゃみと共に跳ね上がる智博。

…しかし、顔はぼーっと一点を見つめたまま動かない。

「智博！起きろ！もうすぐ着くぞ！？」

僕がそう声をかけると、智博は目を擦って眠たそうにしていた。

…僕にこよりを入れられた事は気付いてない様子だった。

美咲と由恵はクスクスと笑いだしていた。

「着いたぞ！」

竜輝がそう言って車を停める。

順番的に智博が最初だったようで、そこは智博の家の前。

智博はゆっくりと窓の外を見ると、まだはっきりしていない様子のまま車を降りた。

「じゃあ、気をつけてね。」

そう言ってゆっくり手を振る智博。

僕等も手を振り返す。

そのままゆっくり車は発進して行った。

次は由恵の家。

由恵は元気に車から降りると

「バイバイ」と、手を振った。

そして、次は美咲の番なのだが：

僕は竜輝に

「竜輝。美咲は僕が送るから、僕の家に行って！」

と言った。

美咲は驚いて僕を見ていた。

「えっ！？俺はいいけど…美咲ちゃんは？いいの？」

竜輝がルームミラーで後部座席を覗き込みながら美咲に聞く。

美咲はその言葉に

「…うん。マコちんの家に向かって…」

と静かに答え、車は僕の家へと向けて進み出した。

56 マコの告白

「じゃあな！ 気をつけて帰れよ！」

竜輝がそう言って車を発進させて行く。

僕は走り去る車に手を振ると、隣に立つ美咲に視線を移す。

美咲はその視線に気付いた様に、僕の方を見るとニツコリと笑った。

「…行こうか。」

僕はそう言って、駐車場へと足を向けた。

美咲も後ろを付いて歩く。

ポケットから車の鍵を取り出し、鍵を開ける。

そしてそのまま車に乗り込むと、美咲も助手席へと腰を下ろした。

僕は車を駐車場から出すと、そのまま美咲の家へと進めて行った。
前に家の前まで行った事があるから、道は覚えている。

僕はなかなか話を切り出す事が出来ないまま、車を運転していた。

美咲もずっと黙ったまま、外を眺めていた。

「…美咲？ まだ時間とかって大丈夫？」

僕がそう尋ねると、美咲は僕をちらっと見てから

「大丈夫だよ。」

と答えた。

僕は、その言葉を聞くなり車の進路を変える。

目的地は美咲の家ではなく、夜景の綺麗な丘の上。

この辺りは高級住宅街が多く、夜景が綺麗に見える公園はちよつとしたデートスポットになっていた。

何台かカップルらしき車は停まっていたが、僕は気にせず車から降りる。

美咲も車から降りたのを確認してから鍵をかけ、公園へと歩き出した。

「夜景綺麗だね。」

美咲がそう言って、僕を見た。

僕は、夜景なんかよりも美咲にみとれてしまったのだが…

そんなキザな言葉を口に出せるはずもなく、黙ったままベンチへと腰を下ろした。

美咲も隣に腰を下ろし、夜景を見つめていた。

僕は、どんなふうに話を始めようかと言葉を搜す。

でも、上手く言葉が見付からなくて…

…時間だけが過ぎていった

「…マコちゃん…ごめんね。私があんな事言ったから、困らせちゃったんだよね?」

沈黙を破ったのは美咲だった。

僕はその言葉に、美咲を見つめる。

「…トモに怒られちゃった。マコちんを振り回さないでって…」

…智博が美咲を怒った？

その言葉に智博なりの思いやりを感じて少し嬉しくなる。

「前にね、由恵にも言われた。マコちんを振り回さないでって…」

美咲が続けて言った言葉に僕は黙って耳を傾ける。

美咲は少し悲しそうに微笑むと、小さく

「…ごめんね？」

と、僕を見た。

…僕は…

その表情に、自分の気持ちが溢れ出すのを止める事が出来ないでいた。

「振り回されるのなんて当たり前だろ？僕は…どうにもならない程に美咲を好きなんだから…美咲が悪い訳じゃないだろ？」

気付けば僕は、そう言いながら美咲を抱きしめていた。

…美咲の一言が僕を嬉しくさせる…

…美咲の表情が僕を悲しくさせる…

それが恋だと言うのに…

美咲に謝られたくなんかなかった。

僕が勝手に好きなのに…美咲を苦しめたくはなかった。

…美咲の身体がゆっくり離れる…

僕は美咲を見つめた。

美咲も僕を見つめていた。

夜空の下で、月の明かりに照らされてる美咲はいつもの何倍も綺麗だった。

…美咲が僕を見つめる大きな瞳から、一粒の涙が零れ落ちた。

美咲はそれを拭わずに僕を見つめたまま…

小さく

「…ごめんなさい…」

と、呟いた。

その瞬間、僕は何も言葉を発する事が出来なくなる。
こんなに明るい月明かりも、光り輝く夜景も…

…僕には届かなかった。

…美咲は僕から目を逸らすと、もう一度

「…ごめんなさい」

と呟いた。

僕は身体を正面に向け、大きく深呼吸をする。

そのまま上着から煙草を取り出すと、火を点けた。

…これ以上、出てくる言葉なんてなかった。

…美咲の涙に少しの可能性はあるのだろうか…

…そう聞きたかったが、何も言えないまま俯いた美咲の頭に手を乗せた。

「…美咲…付き合わせてごめんな？あと…困らせてごめん。…行く？」

そう言って、吸った煙草を消すと席を立った。

美咲は俯いたまま涙を拭っていたが、ゆっくり立ち上がると僕の後ろを着いて来た。

57 締め

「綺麗な髪なのに勿体ないですね」

美容師さんが、私の髪を撫でながらそう言った。

私は鏡に写る自分の姿を見て

「構わないです。お願いします。」
と言う。

美容師さんは私の言葉を聞くと、ハサミを取り出し私の髪に入れていく。

そう言えば、松山先生を好きになってからずっと伸ばしたままだっ
たっけ…

…あの日から既に一週間が過ぎようとしていた。

夜になると、馬鹿みたいにもいつも一人で泣き続けてた。

マコを忘れようと決めたはずなのに、あの日のマコの温もりが…

…プールでのキスの感触が

…なかなか消えてはくれなかった。

あれ以来、マコからの連絡はなかった。

代わりに、由恵からは何度も電話がかかって来た。

トモから話を聞いたのか、

「私の事は気にしないで！美咲はマコが好きなんですよ？」

って、そればかり言ってたっけ…

でも、私知ってるんだよ？

あの日、プールで元子の胸で泣きじゃくる由恵を…

私は何も言えないま買ったジュースを持って皆の元へ戻ったんだ。

由恵を一人で泣かせる事なんて出来ないよ。

それに、もうこれ以上マコの困った顔は見たくなかった。

「…これ位の長さでよろしいですか？」

美容師さんが、鏡に写る私を見ながら聞いてきた。

私はそれに頷くと、美容師さんに促されるままシャンプー台へと足を進めた。

…さてと、次は何をしようかな…

私は行くあてもないまま、ぶらぶらと足を進める。

ふと、目に入ったブティックのウィンドウ。

夏に向けてのふわふわのスカートで、由恵を思いださせる。

(…私はマコしか居ないのに！)

あの日、そう言いながら私を睨みつけた由恵。

(…やっぱりマコが好き…諦めたくない…)

そう言って泣いていた由恵。

(…頑張ったね)

隣でそう言ってくれた由恵。

…これで良かったんだ…

♪

不意に聞き慣れた着信音が流れ始める。
私は慌ててバックから携帯を取り出す。

着信は…

由恵。

「もしもし?」

「もしもし? 美咲? あのね、明日休みでしょ? …久々に二人で買い物でも行かない?」

突然の由恵からの誘いにOKの返事をして電話を切る。

…よかった…

一人で家に居ると、どうしてもマコを思い出してしまう。

家に一人で居たくはなかった。

少しでもマコを忘れたい…

今は何も考えたくはなかった。

久々に、由恵と二人で出かけるのも楽しみだし…

そんな事を考えながら、手にしていた携帯をバックにしまおうとす

る。

：しかし、目に入ってきたのはウッドビーズのストラップ。

未だに外せないまま私の携帯にぶら下がっていた。

本当に色々な所に残っているマコとの思い出：

私は手にしたままの携帯をバックにしまい込むと、人込みの中を歩き始めた。

58 大作戦

「ねえ、トモ…本当に大丈夫かな？」

隣で由恵が不安げに俺を見る。

「大丈夫だよ！この日の為に、車だって俺のじゃなくて母ちゃんのだし！上手く行くよ！」

…俺は、駅前に停めた車の中で由恵と作戦会議をしていた。

…何の作戦かって？

そんなの決まってる！

お互い好きなくせに煮え切らない、マコと美咲をくつつける…

その名も

「トモ由恵、キューピッド大作戦」だ！

昨日予め俺はマコに

由恵は美咲に

「二人で遊ぼう」

と、駅前へと呼び出しておいた。

…もうすぐマコも来る頃だし…

「由恵！そろそろ変装グッズを出しといて！」

「わかった！」

俺の言葉にバックから帽子とマスクを取り出す由恵。

「トモ！マコが来たよ！」

由恵の言葉に俺も慌てて、帽子とサングラスで変装する。

由恵も俺も完璧な変装だ！

マコは俺達の前に車を停めていた。

見やすいし、絶好のポジションだ！

…後は美咲だが…

「トモ！美咲も来たよ！…美咲…髪切ったんだ…」

由恵の言葉に俺も視線を移す。

…美咲は髪をボブにしていた。

…超可愛い…

…いや！見とれてる場合ではない！

…マコは美咲に気付くかな…？

ハンドルに寄り掛かりマコに視線を寄せる。

マコは…美咲を見てる！

よし！そのまま声を…

かけた！

…そしてそのままマコの車に乗り込む美咲！

「由恵！大成功だ！作戦2に移るぞ！」

「うん！わかった！」

俺の言葉に笑顔で答えた由恵はそのままバックから携帯を取り出す。

「もしもし？美咲？…実はね、今日お婆ちゃんが急に具合が悪くなっちゃって…行けなくなっちゃったんだよね…うん…ごめんね…」

電話の相手はもちろん美咲。

由恵は電話を切ると、片手でOKサインを出して笑って見せた。

よし！

今度は俺の番だ！

ポケットから携帯を取り出しマコに電話をかける。

「…もしもし？」

「もしもしマコ？実は今日母ちゃんが風邪ひいて…」

「来れなくなっただろ？わかった、看病頑張れ！」

マコは俺の話を最後まで聞かずにそう言うと、一方的に電話を切った。

…何だよ…もう少し寂しがつてくてもいいのに…

…でも…一先ず作戦は成功だ！

後は…

マコの車が美咲を乗せたまま走り出す。

「やったぁ！大成功だね！」

由恵が嬉しそうにそう言った。

俺は気合いを入れて腕を捲くる。

「よし！尾行開始！」

「おう！」

由恵は相当ノリノリだ。

マコの車はしばらく走るとファミレスへと入って行った。

俺も続けてファミレスへと入る。

マコ達が入ってしばらくしてから車を降りる俺と由恵。

そのままファミレスへと入ると、店員さんに席を案内されたが

「窓際いいですか？」

と言ってマコ達の後の席へと移動する。

俺はマコと背中合わせの場所に座ると、マコ達の会話に耳を傾けた。

「…でさ、本当に智博は馬鹿なんだよ！」

…俺の話で盛り上がっている…俺はますます耳を傾ける。

「中学の時なんかさ、教育実習で来てた女の先生にキスしようとして頬っぺた叩かれてたし…」

…マコの話に楽しそうに笑う美咲…

…ちきしょうマコめ…俺の古傷をネタにしやがって…

「…なあ美咲…二人で写真でも撮らないか？」

突然、マコがそう言って美咲を誘い出す。

美咲もそれに頷いてマコの隣に席を移動してきた。

「…なんか、二人共いい雰囲気だね！」

由恵が小さな声で嬉しそうに言う。

俺は気付かれないように、こっそりとマコを見る。

マコと美咲は寄り添って、携帯のカメラを向けていた。

…何だよ…結構仲良くやってるんじゃないか…

それからしばらくしてファミレスを出るマコと美咲。

俺達も見失わないようにファミレスを出る。

再び尾行開始だ！

マコの車はどんどん走り出す。

俺も後ろを付いていく。

そしてマコの車が入って行ったのは…

「…嘘…」

隣で由恵が驚いていた。

俺も開いた口が塞がらなかった…

…マコが入った場所は…

…ラブホテル…

「…どうしよう」

隣で由恵が呟く。

「…とりあえず、駐車場に行ってマコの車を確認しよう！」

俺はそう言ってラブホテルへと車を進めた。

…駐車場に入る。

…マコの車は…

…ない…

「…車、ないよね？」

そう言って駐車場を探しまわるが、やっぱりない。

その時だった。

♪

聞き慣れた着信音が流れ始める。

ポケットから携帯を取り出す。

…メールだ…

相手は…

マコ。

『尾行するならもっと上手くやれよ!』

……。

下をスクロールしていくと

……。

さっきのファミレスでマコと美咲を覗き見る俺と由恵の写メが貼付
けてあった…

59 僕の宝物

「アハハっ！今頃、由恵達びっくりしてるね！」

楽しそうに笑い出す美咲。

―事の始まりは僕が駅前へと着いた時だった―

一台の車に目が止まる。

車に乗ってるのは…智博。

…？

…今日、歩いて駅前まで行くから車で迎えに来てって言ってたよな…？

とりあえず、智博が乗っている車の前に僕の車を停める。

…しかし、そこである事に気付く。

智博の隣に誰か乗ってる…

僕は目を凝らしてルームミラーを覗き見る。

…由恵…だよな…？

由恵は風邪でもひいたのか、帽子をかぶってマスクをしていた。

…何してるんだ？

僕は不思議に思いながらもある事に気付く。

通りすぎる男性が皆同じ方向を見ていた…。

…何度となく見てきた光景。

視線の先には…美咲だ。

美咲は長い髪をばつさりと切っていた。

…凄く可愛いのだけれども

美咲の切られた髪が、僕との関係を吹っ切ってしまった気がして…

僕の心に影を落とした。

…しかし…

目の前には美咲…

後ろの車には明らかに不自然な智博と由恵…。

…もしかして…

「美咲！」

僕は美咲に声をかける。

驚いた様子で戸惑ってる美咲。

「美咲…とりあえず車に乗らないか？」

僕の言葉に戸惑いを隠せない様子の美咲は、ゆっくりと車に近付くとドアを開けた。

「…マコちゃん…？何で？」

美咲は驚いている様子だったが…

「…いいから車に乗って！」

と、美咲を車へと促す。

♪

美咲が車に乗ると、直ぐに鳴りだした着信音。

…やっぱり…

美咲は電話に出ると、戸惑った様子で話をして電話を切った。

♪

…まるでタイミングを見計らったように流れだす着信音…

…相手は…

…智博…

僕は電話を切ると、ため息をついた。

…やっぱりな…

「…美咲、悪いけどちょっと付き合って！」

「…えっ!？」

僕は美咲の返事を待たずに車を発車させる。
美咲はかなり驚いた様子で僕を見ていた。

「…あのさ、気付かれないように後の車見える？」

僕の言葉に、美咲は訳がわからないまま車のシートに身を隠して後を振り向く。

「…トモと…由恵!？」

美咲は驚いた様子で僕を見つめる。

「…ああ、多分二人でくだらない作戦でも立てたんじゃないか?…バレバレだっつーの!」

僕はそう言いながら笑い出す。

美咲もやっと状況が理解出来た様子で笑い出す。

「アハハ! 由恵、あれで変装してるつもりなのかな?」

「どう見ても、風邪ひいた由恵だよな!」

僕と美咲は二人で笑い転げる。

「とりあえずさ、引っ掛かったふりして一泡吹かせよう!」

僕の言葉に美咲も頷く。

…という訳でファミレスにやってきた僕等。

智博達も一足遅く入って来た。

しかも、僕等の後に座り始めた。

…もう少し隠れればいいのに…

僕も美咲も必死で笑いを堪える。

僕はわざと智博の話を面白おかしくし始めた。
智博が後からちらちら気にしているのがわかる。

そして

「…なあ美咲…二人で写真でも撮らないか？」

僕の言葉に、美咲も気付いて隣へと移動してきた。

そして二人で写真をとるふりをしながら…

携帯の画面にはちらちらとこっちを見ている智博と由恵の姿が…

もう、笑いを堪えるのに必死だった。

そしてその後はラブホに入るふりをして裏から抜ける…

…智博達は見事に引っ掛かった。

「もう、笑いたくてしょうがなかったよ！」

僕の言葉に美咲も笑い出す。

「アハハ！本当にお節介な二人だね！」

本当だよ…

…でも僕は智博に感謝していた。

また美咲と笑い合えるなんて思ってたから…

僕等はそのまま海へとやってきた。

まだ明るい事もあり、風がとても気持ちいい。

美咲は短くなった髪を風になびかせて海を眺めていた。

僕はそんな美咲の姿を後から見つめていた。

「由恵のお節介っ！」

突然、美咲が海へ向けて叫びだした。

そんな美咲の後ろ姿が、笑っているような気がして僕も笑顔になっ

た。

そしてそのまま

「美咲！髪、似合ってるよ！」

と美咲に向けて叫んでみた。

僕の言葉に振り向いて僕を見つめる美咲。そしてそのまま

「ありがとう！」

と言うと、笑顔を作った。

それが本当にキラキラしていて…僕の鼓動を高鳴らせた。

…ドクン…

僕は胸の高鳴りを抑えられない。

僕はまだ、こんなにも美咲を求めているんだ…

「…美咲！…僕、美咲の事諦めなくてもいいかな！？友達の間までいいから好きでいたいんだ！」

…僕の叫びに美咲が見つめる。

…ドクン…

ここからの距離じゃ、美咲の表情がわからなかった。

…ドクン…

美咲が大きく口を開く。

…ドクン…

「いーよ！私もマコちゃんが諦められないから、友達でいてもいいかな！？」

…美咲…

美咲の言葉に僕は笑顔が隠せなくなる。

「大歓迎！」

…僕等はそのまま笑いあった。

…ゆっくりだけど、確かに見え始めた美咲との未来。

繋がり始めたこの糸を、決して解く事がない様に…

そう心で誓いながら、僕は美咲との距離を埋めるように近付いていく。

美咲はそんな僕をキラキラした笑顔のまま見つめていた。

―あれから三年半―

僕の隣にはいつも美咲がいた。

僕は、僕の肩に顔を埋める美咲の長い髪を撫でる。

「美咲？CM終わったぞ？」

僕の言葉に美咲はそのまま

「もうテレビは見ない！」
と言った。

…まったく…わがまま娘め

「…マコ…大好き…」

美咲はゆっくり顔をあげると深くゆっくりキスをした

―僕の宝物―

ずっとこのまま、同じ時を刻みながら二人で歳を重ねていこう。

大切な大切な僕の宝物。

—完—

59 僕の宝物（後書き）

僕の宝物を応援して下さった皆様へ！無事完結を向かえました！これからは少しずつ編集しながらより良い作品に仕上げて行きたいと思います。時間があれば、続編なんかも書いてみたいと思います。本当に御愛読ありがとうございました！（バックハイ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8687c/>

僕の宝物

2010年10月15日22時46分発行